

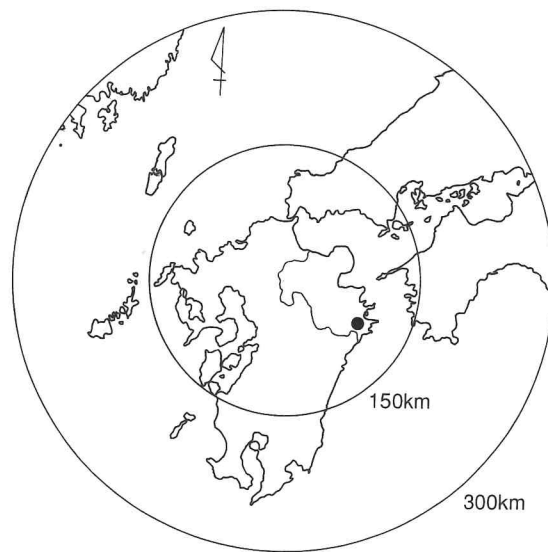
Ten yū kan i seki  
天 祐 館 遺 跡

美術館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1998

大 分 県  
佐伯市教育委員会

# 天祐館遺跡



## 序 文

近世佐伯の歴史は、慶長6年（1601）4月5日、佐伯藩祖毛利高政が佐伯2万石に封ぜられ入部したことに始まり、この時築かれた城下町が現在の佐伯市の基礎となっております。

今回、美術館建設予定地として発掘調査しました「天祐館」跡地は、11代藩主高泰公が文久3年（1863）隠居所として建築した場所であります。

此処の発掘調査は、当佐伯市が初めて行った城下町遺跡の本格的調査で、およそ100日の期間を要したものでありましたが、遺跡は非常に保存状態が良く、膨大な量の近世陶磁器・土器・瓦類・金属製品等の出土がありました。遺溝・遺物の両面において今後の佐伯市における城下町研究にとって貴重な資料とすることができます。

なお、発掘調査終了後、多数の出土遺物の整理に多くの時間を費やしましたが、調査の詳細を記した報告書ができあがりました。本書が近世佐伯の歴史研究等に寄与できれば幸いです。

末筆になりましたが、調査のご指導をいただきました諸先生方をはじめ、大分県教育委員会、発掘調査にご協力いただきました関係各位に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成10年3月

佐伯市教育委員会

教育長 森 脇 一 郎

## 例 言

1. 本書は、平成6年度に発掘調査を実施した佐伯市美術館建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本調査区は佐伯市大手町1丁目57番21に所在する。
3. 発掘調査は佐伯市教育委員会が主体となり、平成6年7月26日から11月10日まで実施した。
4. 調査体制は以下のとおりである。

調査委員 豊田寛三（大分大学教育学部教授）  
村松幸彦（社団法人大分県建築士会名誉会長・株式会社大分住宅研究室長）  
大橋康二（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長 現佐賀県教育庁文化財課課長補佐）

調査員 村上久和（大分県教育庁文化課主査 現副主幹）  
綿貫俊一（同 主任 現主査）  
高島豊（同 嘱託 現大分市教育委員会文化振興課技術員）  
吉武牧子（佐伯市教育委員会美術館建設準備室 現社会教育課主任）

調査事務 鳥井喜久太（佐伯市教育委員会教育長 平成6年度）  
森脇一郎（同 教育長 平成7～9年度）  
今泉浩太郎（同 社会教育課長 平成6年度）  
山田二三男（同 平成7・8年度）  
染矢邦英（同 平成9年度）  
大賀重行（同 課長補佐 平成6・7年度 同参事 平成8年度）  
野口俊一（同 係長 平成6年度）  
山田健一（同 主査 平成6年度 同係長 平成7～9年度）

上記のほか、田中良之氏（九州大学大学院教授）、金 宰賢氏（同大学院生）、清水宗昭氏（県文化課主幹）、高橋信武氏（同主査）、吉田 寛氏（同主任）、佐藤 巧氏（佐伯史談会）などの視察と指導、助言を得た。

5. 陶磁器類については大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館学芸課長 現佐賀県教育庁文化財課課長補佐）に御教示、御指導を得たほか、出土遺物の一部について渡辺 誠氏（名古屋大学文学部教授）、森村健一氏（堺市立埋蔵文化財センター）、鈴木裕子氏（豊島区遺跡調査会）、山川 均氏（大和郡山市教育委員会）、扇浦正義氏（長崎市教育委員会）の御教示を得た。記して感謝いたします。
6. 遺物整理、実測、トレース等は吉武のほか、佐藤久美、末政圭子（以上佐伯市教育委員会 現大分県文化課資料室）の多大な協力を得た。
7. 遺構写真は村上が、遺物写真は吉武がそれぞれ担当した。
8. 遺構検出土壌の分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
9. まとめの作成にあたって、藩政史料の調査、解説には長谷定子（佐伯市教育委員会）の助言と協力を得た。記して感謝いたします。
10. 本書の執筆、編集は吉武が行った。

## 目 次

I. 調査に至る経緯	1
II. 天祐館遺跡の位置と歴史的環境	1
III. 調査の成果	
1. 調査の概要	6
2. 遺構	
(1) 1号側溝	6
(2) 石組	6
(3) 瓦溜	7
(4) 埋桶	12
3. 遺物	
(1) 陶磁器・土器類	13
(2) 瓦類	84
(3) 銅銭	90
(4) 金属製品	90
(5) 硯	90
(6) 木製品	93
IV. 埋桶の用途推定に関する自然科学分析調査	95
V. まとめ	
1. 天祐館遺跡出土石組についての検討	
(1) 石組の性格と分布の特徴	107
(2) 南御殿・天祐館指図との比較と石組の前後関係	107
(3) 南御殿から天祐館への変遷と時代背景について（「藩政史料」を中心として）	112
2. 遺物	
(1) 陶磁器	116
(2) 土器	117

## 挿 図 目 次

第1図 天祐館遺跡周辺遺跡分布図 …………… 2	第41図 整地層出土遺物 (16) ……………56
第2図 佐伯藩の領域 …………… 3	第42図 整地層出土遺物 (17) ……………57
第3図 佐伯藩城下町の範囲と調査区位置図… 4・5	第43図 整地層出土遺物 (18) ……………58
第4図 石組の分類 …………… 7	第44図 整地層出土遺物 (19) ……………59
第5図 天祐館遺跡遺構配置図………… 8・9	第45図 整地層出土遺物 (20) ……………60
第6図 天祐館遺跡1号側溝 ……………10・11	第46図 III層出土遺物 ……………72
第7図 1号埋桶 ……………12	第47図 1・2トレンチ、 2号埋桶、廃屋土坑出土遺物 ……………74
第8図 2号埋桶 ……………12	第48図 表土層出土遺物 ……………75
第9図 1号側溝出土遺物 ……………13	第49図 試掘調査出土遺物 (1) ……………76
第10図 1号瓦溜出土遺物 (1) ……………15	第50図 試掘調査出土遺物 (2) ……………77
第11図 1号瓦溜出土遺物 (2) ……………16	第51図 試掘調査出土遺物 (3) ……………78
第12図 1号瓦溜出土遺物 (3) ……………17	第52図 試掘調査出土遺物 (4) ……………79
第13図 1号瓦溜出土遺物 (4) ……………18	第53図 試掘調査出土遺物 (5) ……………80
第14図 1号瓦溜出土遺物 (5) ……………19	第54図 試掘調査出土遺物 (6) ……………81
第15図 1号瓦溜出土遺物 (6) ……………20	第55図 軒平瓦 ……………85
第16図 1号瓦溜出土遺物 (7) ……………21	第56図 軒丸瓦 ……………86
第17図 1号瓦溜出土遺物 (8) ……………22	第57図 軒丸瓦・菊丸瓦 ……………87
第18図 1号瓦溜出土遺物 (9) ……………23	第58図 1号埋桶出土鬼瓦 ……………88
第19図 2号瓦溜出土遺物 (1) ……………28	第59図 瓦刻印類 ……………89
第20図 2号瓦溜出土遺物 (2) ……………29	第60図 銅銭 ……………90
第21図 3号瓦溜出土遺物 ……………32	第61図 硯 ……………90
第22図 4号瓦溜出土遺物 (1) ……………33	第62図 金属製品 ……………91
第23図 4号瓦溜出土遺物 (2) ……………34	第63図 木製品 (1) ……………92
第24図 4号瓦溜出土遺物 (3) ……………35	第64図 木製品 (2) ……………93
第25図 4号瓦溜出土遺物 (4) ……………36	第65図 1号・2号埋桶の主要珪藻 化石群集 ……………99
第26図 整地層出土遺物 (1) ……………39	第66図 1号・2号埋桶の花粉化石・ 寄生虫卵の組成 ……………101
第27図 整地層出土遺物 (2) ……………40	第67図 A～D類石組の分布 ……………108
第28図 整地層出土遺物 (3) ……………41	第68図 南御殿指図 ……………109
第29図 整地層出土遺物 (4) ……………42	第69図 天祐館遺跡出土石組と南御殿・ 天祐館指図対照図 ……………110・111
第30図 整地層出土遺物 (5) ……………44	第70図 天祐館遺跡出土焙烙分類図 ……………117
第31図 整地層出土遺物 (6) ……………45	第71図 豊後における焙烙鍋の変遷 ……………118
第32図 整地層出土遺物 (7) ……………46	第72図 天祐館遺跡出土焼塩壺分類 ……………119
第33図 整地層出土遺物 (8) ……………47	
第34図 整地層出土遺物 (9) ……………48	
第35図 整地層出土遺物 (10) ……………49	
第36図 整地層出土遺物 (11) ……………50	
第37図 整地層出土遺物 (12) ……………51	
第38図 整地層出土遺物 (13) ……………52	
第39図 整地層出土遺物 (14) ……………54	
第40図 整地層出土遺物 (15) ……………55	

## 表 目 次

第1表	1号側溝出土陶磁器・土器観察表	14
第2表	1号瓦溜出土陶磁器・土器観察表	24
第3表	2号瓦溜出土陶磁器・土器観察表	30
第4表	3号瓦溜出土陶磁器・土器観察表	31
第5表	4号瓦溜出土陶磁器・土器観察表	37
第6表	整地層出土陶磁器・土器観察表	62
第7表	Ⅲ層出土陶磁器・土器観察表	73
第8表	1・2トレンチ、2号埋桶、 廃屋土坑出土陶磁器・土器観察表	75
第9表	表土層出土陶磁器・土器観察表	75
第10表	試掘調査出土陶磁器・土器観察表	81
第11表	珪藻の生態性	96
第12表	1号・2号埋桶の珪藻 分析結果	97・98
第13表	1号・2号埋桶の花粉・ 寄生虫卵分析結果	100
第14表	1号・2号埋桶の 植物遺体同定結果	102
第15表	南御殿から天祐館への 変遷と時代背景	112
第16表	南御殿・天祐館の 建設担当者人数	113

## 写 真 図 版

図版1	珪藻化石	104
図版2	花粉化石	105
図版3	寄生虫卵・植物遺体	106
P L.1	天祐館遺跡空撮 (南東方向から 北東方向から)	
P L.2	天祐館遺跡調査区全景	
P L.3	調査区遠景(1)(2)・作業風景	
P L.4	調査区全景	
P L.5	1号側溝(東・南・西溝)・1号側溝と 64号石組切り合い関係	
P L.6	1号側溝焙烙出土状態・1号側溝側面 56・49・50号石組・59・101・110・54・ 89号石組根石除去後	
P L.7	19・40号石組、整地層、4号瓦溜遺物出土 状態 1・2号埋桶	
P L.8	1号側溝・1号瓦溜出土遺物(1~9、1~52)	
P L.9	1号瓦溜出土遺物(53~96)	
P L.10	1~3号瓦溜出土遺物(97~101、1~30、 1~16)	
P L.11	4号瓦溜・整地層出土遺物(1~41、1~19)	
P L.12	整地層出土遺物(20~92)	
P L.13	整地層出土遺物(93~152)	
P L.14	整地層出土遺物(153~199)	
P L.15	整地層出土遺物(200~260)	
P L.16	整地層・Ⅲ層・2号埋桶・ 廃屋土坑出土遺物(261~296、1~13、1~7)	
P L.17	表土層・試掘調査出土遺物(1~4、1~61)	
P L.18	軒平瓦・軒丸瓦(1~22)	
P L.19	軒丸瓦・菊丸瓦(23~40)	
P L.20	鬼瓦・銅銭・煙管・金属製品	
P L.21	硯・木製品	
P L.22	下駄	

## I. 調査に至る経緯

大分県南東部に位置する佐伯市では県南の中核都市として、平成3年度（1991）より地域における芸術文化の拠点となるべき美術館の建設計画を進めていた。佐伯市を含む県南地域には美術館、博物館等の文化施設はほとんどなく、文化的環境に恵まれているとは言い難い。そのような現状を考え佐伯市美術館は市民に対し芸術文化の啓発、普及、育成を図る生涯教育の場であると共に、市民が日常的に利用し、芸術に親しむための場を提供することを旨とするものであった。建設場所は自然環境、歴史的環境、利便性などを考慮に入れて選定を行った結果、佐伯市大手町1丁目57番21所在の現在佐伯市営駐車場として利用されている場所に決定した。敷地は、前面に歴史を現代に活かした道づくりとして「日本の道・百選」に選ばれた「歴史と文学の道」があり、背後に城山が広がる恵まれた環境にある。また左右には三余館（佐伯市勤労者総合福祉センター）及び佐伯文化会館が並び、商店街や大型店なども近く文字通り佐伯市の中心部である。計画では美術館本体は地上4階建て、隣接する公共施設とも共有可能な約200台収容の駐車場は地上2階建ての鉄筋コンクリート造りで、平成6年度末に着工し7年度中に竣工、8年度に開館予定であった。

建設予定地は城山の麓、現在佐伯文化会館が建っている佐伯城三の丸の南東に隣接し、佐伯城下町遺跡として周知されている。この場所は明治四年頃の絵図では藩主別邸であった天祐館、御武具倉、稽古場等となっている。そこで平成5年度に大分県教育委員会が試掘調査を行った結果、美術館の本体部分に当たる箇所から建物の基礎とみられる遺構を確認し近世陶磁器が多数出土したため、本調査が必要になった。このことについて佐伯市教育委員会と県教委は協議を行い、平成6年度（1994）に本調査を実施することになった。これに伴い佐伯市では埋蔵文化財専門の職員を採用し体制を整えた。本調査は平成6年7月末～11月初めまでおよそ3カ月半の期間を要し、約1100㎡の面積で行った。調査区からは建物の基礎石組と多量の陶磁器類、瓦類等が出土し、近世佐伯城下町の様相の一端が明らかになった。発掘調査は佐伯市教育委員会が主体となり、随時県教育委員会の指導、応援を得た。調査区は調査終了後埋め戻しを行い、駐車場として原状復帰した。

ところで、発掘調査中の8月に行われた市長選挙で美術館建設を推進する現職が落選し、美術館凍結を公約に掲げた新市長が誕生した。そのため美術館建設は中止され、調査の根拠となるべき事業計画は失われた形となった。結果的に現在までのところ遺跡は破壊されることなく保存されている。調査地点の今後を見守りたい。

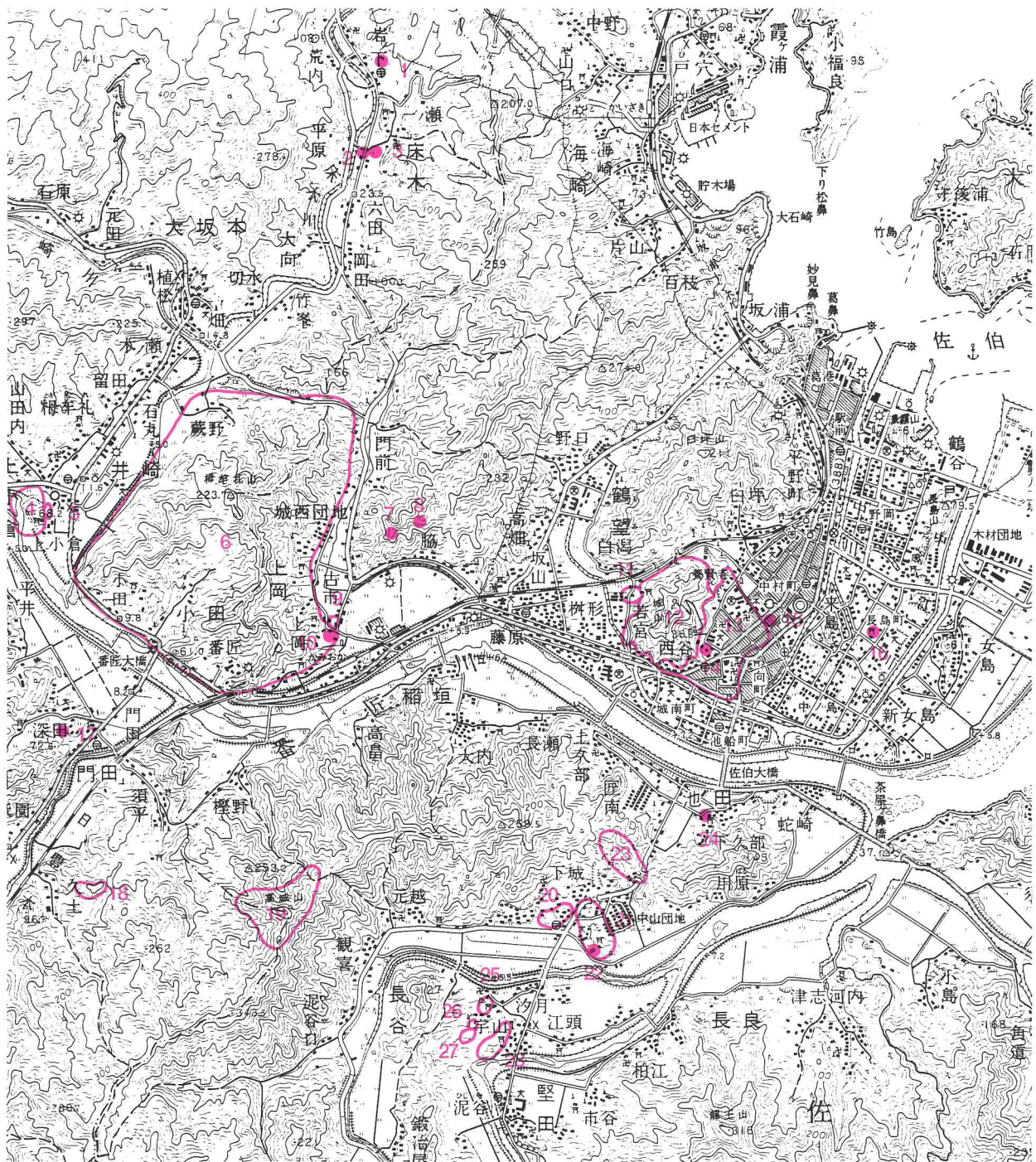
## II. 天祐館遺跡の位置と歴史的環境

大分県南部地方は豊後水道に臨む複雑なリアス式海岸が展開しており、臼杵・津久見・佐伯の三つの大きな湾と多くの入江を形成している。佐伯市は番匠川、堅田川、木立川等の流域に形成された狭小な沖積平野に発展した県南の拠点都市である。

中世段階の佐伯地方は豪族佐伯氏の治める地域であった。その統治の中心となったのが標高223.7mの梅牟礼山に築かれた梅牟礼城である。梅牟礼城の築城は大永年間（1521～1528）、10代佐伯惟治の時代と考えられており、周辺には石造物や寺院など中世の遺跡が多く存在する。県の文化財にも指定されている佐伯市上岡字八戸所在の十三重石塔直下および周辺部からは平安末～鎌倉時代に属する蔵骨器が11点出土した。また近隣の丘陵部にも高城・八幡山城・宇山城・中山砦等中世期の山城が点在する。梅牟礼城は10代佐伯惟治から14代惟定まで5代に渡り佐伯氏の拠点であったが、文禄2年（1593）主家の大友氏が豊臣秀吉によって改易されると惟定も佐伯を去り梅牟礼城はその役割を終えることになる。

近世佐伯の歴史は、慶長6年（1601）佐伯藩2万石初代藩主毛利高政の入部によって始まる。文禄2年の大友吉統改易後、豊後国はいわゆる太閤（文禄）検地によって石高42万石弱と算定され、太閤蔵入地が設定された。その結果、海部・大野・直入・大分・速見・国東・日田・玖珠の豊後各郡に蔵入代官が配置され、このことが徳川時代以降も続く豊後の小藩分立の基となった。海部郡には垣見弥五郎・宮部法印という2名の代官が置かれ、





1. 河野家宝塔	2. 一瀬家板碑	3. 一瀬家重制石幢	4. 上小倉横穴群
5. 磨崖石塔 (小倉)	6. 梅牟礼城跡	7. 二上寺跡	8. 三上寺跡
9. 古市遺跡	10. 十三重塔	11. 白濁遺跡	12. 鶴屋城跡
13. 佐伯城下町	14. 天祐館遺跡	15. 樹形御番所遺跡	16. 宝剣山古墳
17. 五十川家五輪塔	18. 平城跡	19. 高城跡	20. 下城遺跡
21. 八幡山城跡	22. 岩清水古墳	23. 中山砦	24. 岡ノ谷古墳
25. 長良貝塚	26. 上の台遺跡	27. 汐月遺跡	28. 宇山城跡

第1図 天祐館遺跡周辺遺跡分布図 (国土地理院発行「佐伯」1/50,000 使用)

各々2万8000石、1万6800石を支配した。石高からみて後者の官部管轄分が佐伯藩領に引き継がれていくものと推定されている。秀吉家臣団の一員であった毛利高政は、文禄検地後日田・玖珠郡2万石に封ぜられた。高政の日田入部がいつなのか諸説あって正確なところは不明であるが、文禄3・4年頃(1594・1595)とする説が有力である。慶長5年(1600)関ヶ原の合戦で徳川家康が勝利を納めると豊臣方についた高政は佐伯2万石に転封された。佐伯藩の領域は現在の行政区画でいうと津久見市南部と佐伯市・弥生町・上浦町・本匠村・直川村・米水津村・蒲江町のほぼ全域に渡る(第2図)。入部後高政は弟の森吉安に2000石を分知。しかし高政の死後家督争いに敗れた吉安が幕府に分知領を返上するという事件が起こり、以後幕末まで藩領内に幕府領を抱えることになる。前述したように中世佐伯城下は梅牟礼城を中心とする



第2図 佐伯藩の領域

地域であったが、高政は険しい山城である梅牟礼城を廃し新たに築城することを決意する。新城の建設地として選定したのは番匠川の河口に位置する八幡山(城山)であった。慶長7年、家康に佐伯城築城の許可を得ると、安土城建設に加わった人物を近江より招き縄張り作成を依頼する。また石垣築造には播州の人物を召し抱え指図させたという記録が残っている。同年普請が開始され山頂に三層の天守をもつ本丸を中心に二の丸・北の三の丸等を築き、遅くとも慶長11年には完成したと考えられる。しかし山上の城館を使用したのは2代高成の時代までで、寛永年間(1624~1643)には山麓の下屋敷(三の丸)に藩庁機能を移している。

一方城下町として選ばれたのは城山の東側、番匠川河口の沖積地である。東麓の山際地域に武家地、その東の「塩屋千軒」とよばれた一帯に町人地(内町)が形成された。町場は梅牟礼城下を移設した古市町を中心に周辺の干潟を埋め立てて拡大した。町人地は南の番匠川沿い(船頭町)にも広がり、船頭町・内町あわせて両町とよばれた。城下町は番匠川の本流・支流を外堀とし、山際の湿地帯を火災や戦時の防御のため内堀のような形で残すなど自然地形をうまく利用して造られている(第3図)。

今回発掘調査を行った天祐館遺跡は三の丸(現佐伯文化会館)東南に隣接した場所に位置する。「明治四年頃佐伯藩時代屋敷図」によると本調査区には天祐館という建物が存在したことが確認できる。天祐館とは文久3年(1863)第11代藩主毛利高泰が隠居に伴い建てた別邸のことである。同年の佐伯藩政史料(「御用日記」)には南御殿と記されているが、明治3年の同史料において天祐館と改称されたことが記録されている。佐伯城下を記したこれより古い記録として元文3年(1739)「御城并御城下絵図」と文政9年(1812)「御城下分見明細図絵」が残っているが、当地については具体的な記述がなく文久3年以前の沿革は不明である。

以上中世~近世までの佐伯地域の歴史を概観してきた。今回の調査は初めて行った城下町の調査であり、近世佐伯の様相を知るうえでも非常に意義深いものであった。佐伯市の基礎となったのは毛利高政の築いた城下町である。現在の佐伯市街地はこの城下町を中心に発展しており、今も比較的当時の屋敷割をとどめている。今後も城下町の調査を継続的に行うことが必要である。

参考文献

佐伯市教育委員会『佐伯市史』1974  
 大分県総務部総務課『大分県史』近世篇Ⅰ・Ⅲ1983  
 佐伯市教育委員会『佐伯藩史料 温故知新録』1 1995・2 1997  
 佐伯市教育委員会『梅牟礼城跡関連遺跡発掘調査報告書』1994



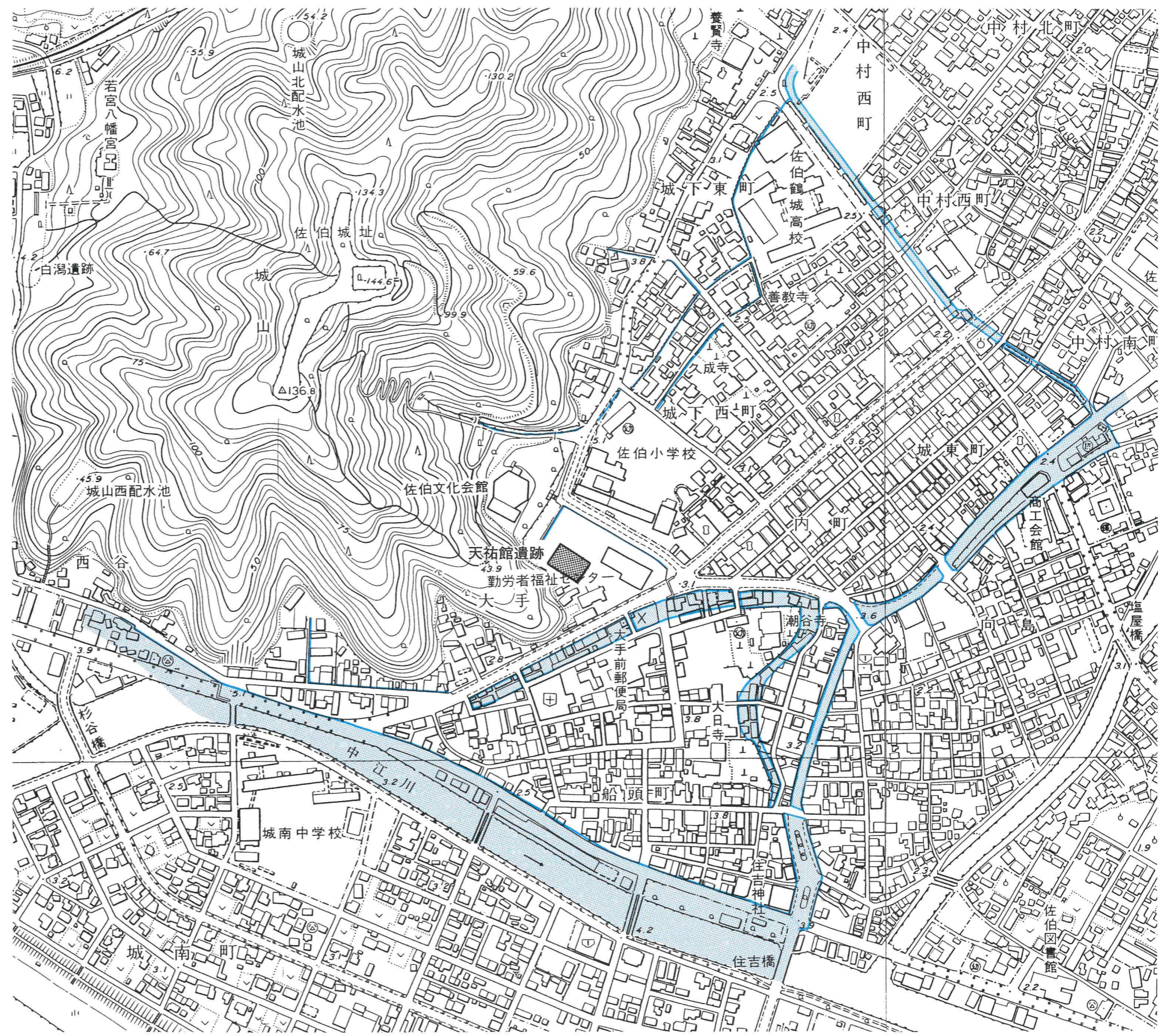
第2図 佐伯藩の領域

城を廃し新たに築城することを決意する。新城の建設地とし(山)であった。慶長7年、家康に佐伯城築城の許可を得ると、三成を依頼する。また石垣築造には播州の人物を召し抱え指図られ山頂に三層の天守をもつ本丸を中心に二の丸・北の三の丸を築く。しかし山上の城館を使用したのは2代高成の時代まで(三の丸)に藩庁機能を移している。

川河口の沖積地である。東麓の山際地域に武家地、その東の麓に町場が成された。町場は梅牟礼城下を移設した古市町を中心に周辺に広がった(船頭町)にも広がり、船頭町・内町あわせて両町とよ山際の湿地帯を火災や戦時の防御のため内堀のような形で残している(3図)。

佐伯文化会館) 東南に隣接した場所に位置する。「明治四年頃」という建物が存在したことが確認できる。天祐館とは文久3年(1863)のことである。同年の佐伯藩政史料(「御用日記」)には南天祐館と改称されたことが記録されている。佐伯城下を記した「御城下分見明細図」と文政9年(1827)「御城下分見明細図」より文久3年以前の沿革は不明である。

きた。今回の調査は初めて行った城下町の調査であり、近世以来の佐伯市の基礎となったのは毛利高政の築いた城下町であり、今も比較的当時の屋敷割をとどめている。今後も



第3図 佐伯藩城下町の範囲と調査区位置図(国土地理院発行1/5,000 使用)

佐伯市教育委員会『佐伯昔と今』

佐伯市教育委員会『佐伯藩史料 温故知新録』1 1995・2 1997

### Ⅲ. 調査の成果

#### 1. 調査の概要

発掘調査は試掘調査の結果と美術館の工事計画とを勘案して、美術館本体の底地部分のみで行うことになった。面積は約1,100m<sup>2</sup>である。表土剥ぎは調査区東側より大型重機を投入して行い、1 m程掘り下げたところで遺構面に達したため随時人力による遺構検出作業へと切り替えた。調査区全体を遺構面まで掘り下げた段階で、東西10m×南北8 mのメッシュを設定し、さらに遺構の精査に努めた。遺構を検出した黒褐色土層からは多数の近世陶磁器類・瓦類が発見されたためこの層を近世の整地層と考えた。調査区北壁での土層観察の結果、Ⅰ・Ⅱ層；表土、Ⅲ層；近現代の整地層、Ⅳ層；近世の整地層＝遺構検出層であることを確認した。以後Ⅳ層を整地層と呼ぶ。整地層は部分的に建物を取り壊して廃棄したと思われる土坑（廃屋土坑）、便槽など近現代の遺構によって攪乱を受けていた。

整地層まで掘り下げたところで検出した遺構は石組135基、瓦溜4基、埋桶2基、側溝1基などである。石組はほぼ調査区全体に規則性をもって分布する。石組実測終了後下部構造を調べるため人力ですべての石を撤去した結果、ほとんどの石組で下部に胴木を埋設していることを確認した。後述するがこれらの石組群は幕末に建てられた南御殿（天祐館）の基礎部分であることが判明し、整地層（Ⅳ層）は南御殿建設時のものであることを確認した。瓦溜については整地層出土遺物と同じ年代の陶磁器類や瓦類を多数包含していることから、南御殿建設時のゴミ穴と考えられる。個々の石組及び瓦溜については時間的な制約からレベルを取ることができず20分の1の平面図の作成のみを行った。

1号側溝については当初2カ所で露出していたためその延長線を重点的に掘り下げたところ、調査区北半部にコの字形に巡る1本の溝となることがわかった。1号側溝は部分的に石組によって壊されていることから、石組より早い時期に築かれていたことは確実である。調査では側溝で囲まれた区域に何らかの施設が築かれていた可能性もあると考え、幅2 mのトレンチを東西、南北方向に十字に設定し確認のための掘り下げを行ったが何も発見できなかった。

この他調査区東端に水抜き用に設定したトレンチを掘り下げたところ埋桶遺構が出土したが、重機で一気に掘削したため半砕してしまった。また調査区西側でも石組周囲の精査によって埋桶遺構1基を発見した。

#### 2. 遺構（第5図）

##### (1) 1号側溝（第6図）

検出長は東側溝15.4m、西側溝11.7m、南側溝18.0mでコの字形を呈し、さらに北側の調査区外へ伸びると考えられる。溝幅は最大40cm、最小24cmを測り、溝底は西から東へと傾斜することから流れの方向は西→東であったと考えられる。側溝両側面の石は溝内側に対して面を揃え、上面も石畳のように平坦になるよう造られている。検出面は石組より下層で部分的に石組による破壊を受け、また側石が抜き取られている部分も何か所か認められた。側溝内出土遺物は東側側溝の下面からまとまって検出された。レベルの高い方からこの地点に流れ着いたとも考えられる。年代は17世紀末～18世紀中頃であることから、溝の廃絶時期も18世紀中頃を大きく下ることはないと推定される。

##### (2) 石組

調査区全体から135基検出した。紙幅の関係から個々の石組についての説明は行わず、全体の出土状況と構造の特徴について述べることにする。

出土した石組は北東－南西ライン、北西－南東ラインに沿って直線的に規則性をもって並ぶ。石組は構造によってA～D4つのタイプに分類した（第4図）。

A類；97基 複数の胴木を敷いた上に多量の礫を置き間に粘土を充填、さらに礫の流出を防ぐため周囲に杭を

巡らせたもの。胴木は腐植防止のため表面を黒く焼いたものもみられる。135基中最も多い。平面形態は円形・方形・長方形・カギ形等のヴァリエーションがある。

B類；25基 胴木を置かず礫の周囲に杭を巡らせ、粘土で埋込めたもの。やはり平面形態はヴァリエーションをもつ。A類を簡略化したものと考えられ、出土石組中2番目に多いタイプである。

C類；11基 胴木も杭も伴わず礫のみで構築されているもの。やはり形態にはヴァリエーションがあり、中には21号のように形態的には石列という表現の方が適すると考えられるものもある。

D類；2基 土坑の底に瓦片を敷きその上に礫を置くもので、12・89号の2基のみである。

石組群からは江戸時代各時期の土器、陶磁器類等が出土した。量的には18～19世紀中頃までのものが主体となる。この出土遺物の年代観は、前述したIV層が石組構築時つまり文久3年（1863）の南御殿（天祐館）建設時の整地層であるという考えを考古学的に傍証する形となった。

### (3) 瓦溜

調査区東側で4基検出した。瓦溜は整地層中で集中的に土器・陶磁器類・瓦類が出土した地点である。

#### 1号瓦溜

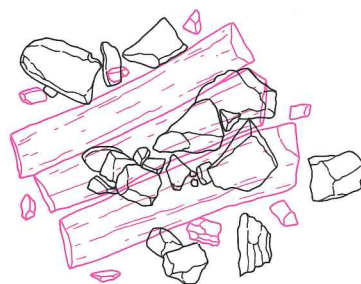
遺物出土範囲は長さ6.16m、最大幅2.08mの細長い不定形を呈し、2号瓦溜と接する。掘り込みラインは確認できなかった。1号瓦溜からは大量の瓦片と最も多くの土器、陶磁器類が出土した。陶磁器の年代は慶長期～幕末までの近世全般であるが、18世紀～19世紀初頭のものを中心とする。産地組成は磁器では肥前産のものが主体となり、陶器類は肥前、関西、九州、瀬戸美濃等多岐にわたる。また「佐伯切畑村瓦師長蔵」の刻印をもつ瓦片も出土している。遺物の年代からみても天祐館建設時の整地に伴う廃棄坑であろう。

#### 2号瓦溜

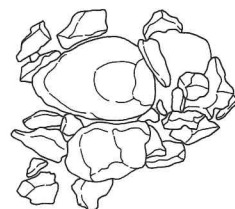
遺物出土範囲は長さ4.16m、最大幅2.72mの不定形を呈する。1号瓦溜と接するがその境は明確ではない。掘り込みラインは確認できなかった。遺物の出土数は1号瓦溜ほど多くなく、瓦片と18世紀～19世紀初頭の肥前産磁器が主体となる。

#### 3号瓦溜

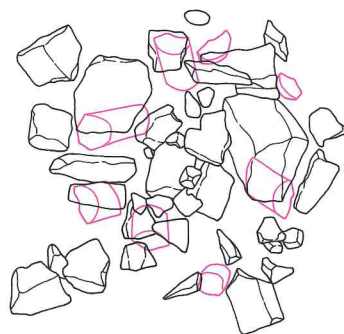
134号石組み周辺で確認したが、少し掘り下げると水が湧き出す柔弱な地盤のため範囲確認ができなかった。



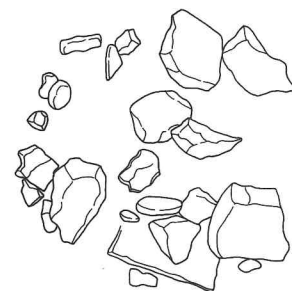
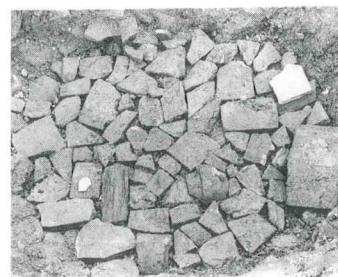
A 類



C 類

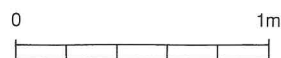


B 類

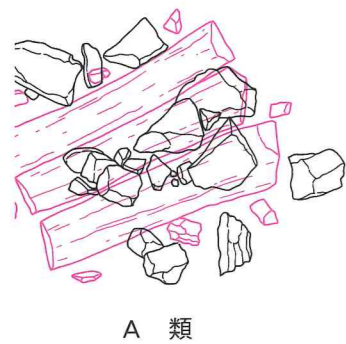


D 類

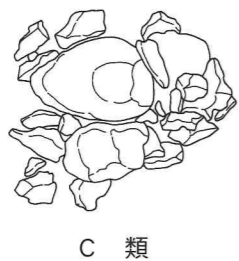
(上の写真はD類石組下の瓦敷)



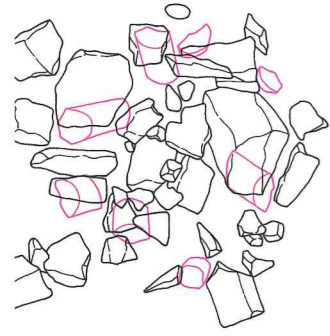
第4図 石組の分類 (S=1/30)  
(A:127号・B:15号・C:61号・D:12号)



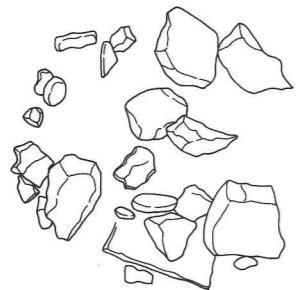
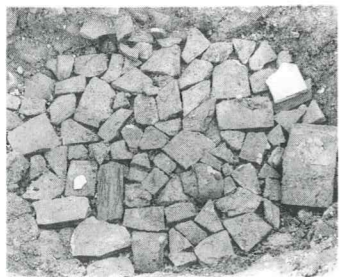
A 類



C 類



B 類



D 類

(上の写真はD類石組下の瓦敷)



4 図 石組の分類 (S=1/30)  
:127号・B:15号・C:61号・D:12号)

集中的に土器・陶磁器類・瓦類が出土した地点である。

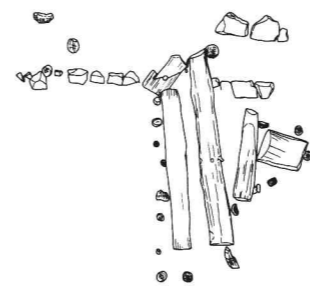
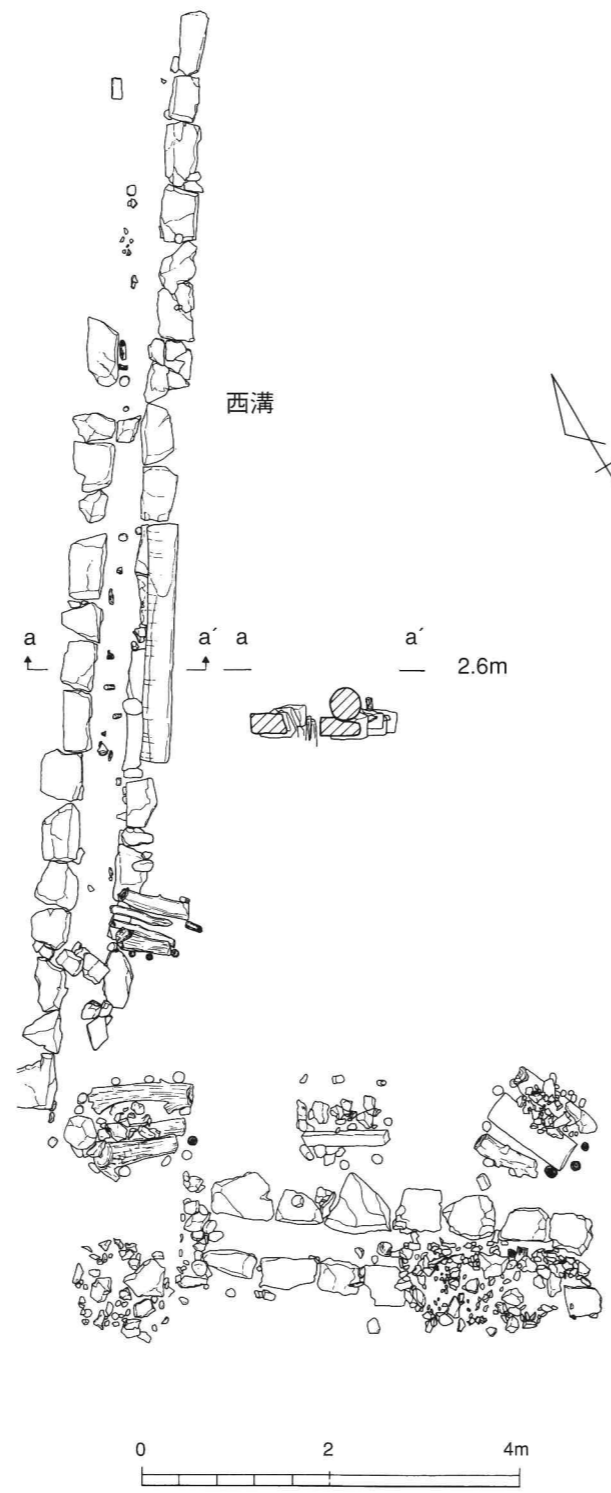
長い不定形を呈し、2号瓦溜と接する。掘り込みラインは確認  
多くの土器、陶磁器類が出土した。陶磁器の年代は慶長期～幕  
のものが中心となる。産地組成は磁器では肥前産のものが主体  
多岐にわたる。また「佐伯切畑村瓦師長蔵」の刻印をもつ瓦片  
設時の整地に伴う廃棄坑であろう。

定形を呈する。1号瓦溜と接するがその境は明確ではない。掘  
は1号瓦溜ほど多くなく、瓦片と18世紀～19世紀初頭の肥前産

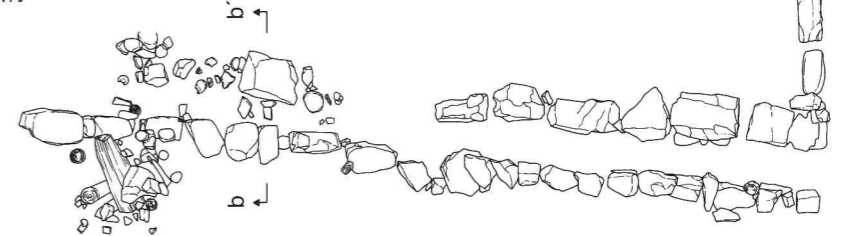
ると水が湧き出す柔弱な地盤のため範囲確認ができなかった。



第5図 天祐館遺跡遺構配置図 (S=1/160)



南溝



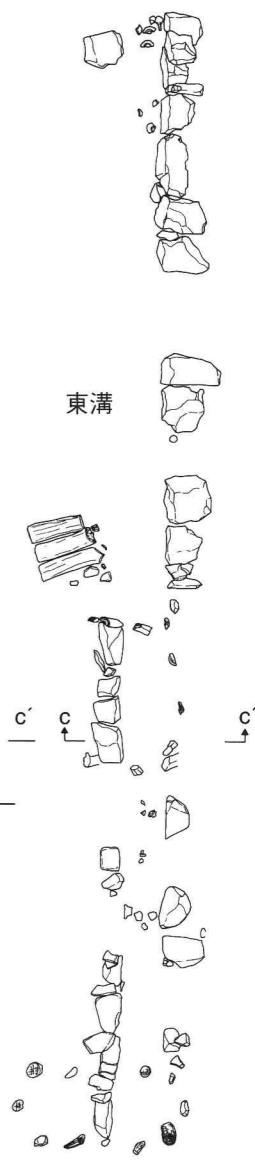
b b' 2.6m

2.6m c



c' c'

東溝



第6図 天祐館遺跡 1号側溝 (S=1/80)

遺物は量的には少なく、陶磁器は19世紀以降のものが中心で年代的には比較的新しい構成となっている。

4号瓦溜 119・120号石組を斜めに結ぶライン上で検出した。集中して瓦、陶磁器類が出土したが、1、2号瓦溜よりかなり浅い。陶磁器の年代は18～19世紀前半代である。

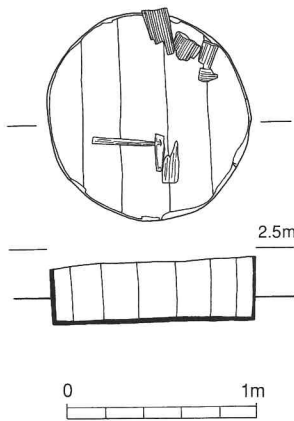
#### (4) 埋桶

##### 1号埋桶 (第7図)

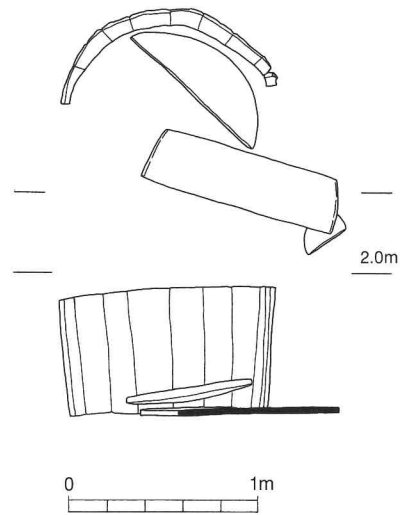
石組周辺の精査によって調査区西端で検出した。底板は直径108cm、上部のほとんどを削平されており側板は30cm程しか残存していなかった。埋桶内からは鬼瓦・鉄鎌・木製品が出土したが、陶磁器は共伴しなかったため年代判定の決め手に欠ける。用途については出土状況や形状から便所である可能性が高いと考え、埋桶底に堆積した土壌の自然科学分析を行った。詳しい分析内容はIVで報告されるが、結果は便所として機能したという確証は得られなかった。また石組との位置関係から判断すると天祐館に伴う遺構とは考え難い。

##### 2号埋桶 (第8図)

調査区東端の水抜き用トレンチ内より出土した。掘削の際重機で半碎してしまったため東側半分しか図化できなかった。側板は上部が削られていたものの長さ1m程は残存し、底板は直径が104cm、1号より約80cm低い位置で検出した。埋桶内からは18世紀末～19世紀初頭の肥前産磁器蓋が出土した。1号同様埋桶の用途については便所を想定し、土壌の自然科学分析を行った。その結果消極的ではあるが、便所として利用したという可能性も提示されている。



第7図 1号埋桶 (S=1/40)



第8図 2号埋桶 (S=1/40)



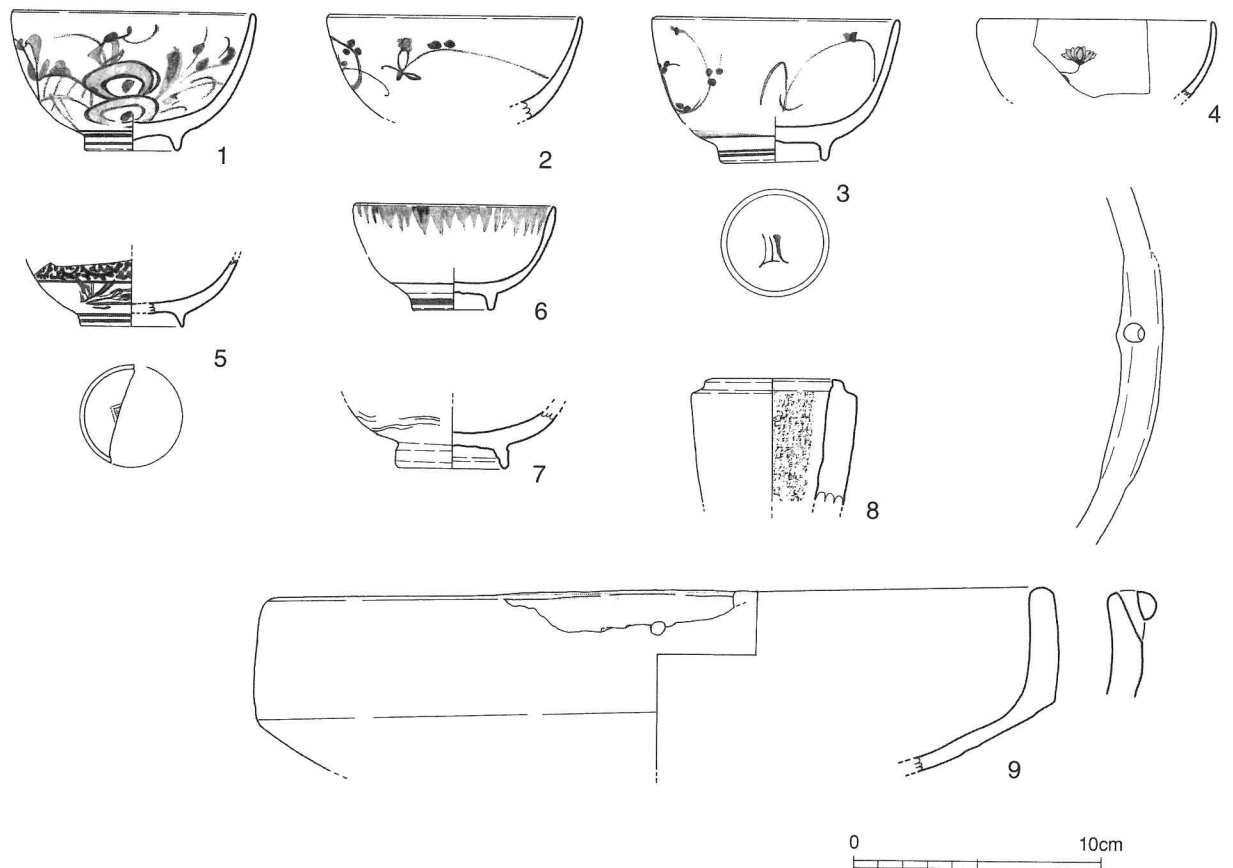
### 3. 遺物

#### (1) 陶磁器・土器類

陶磁器・土器類は出土量が膨大であるため各遺構・整地層に分けて比較的遺存状態の良好なものを図示した。以下それらの概要を記すが紙幅の関係で個々の詳細な説明は観察表を参照していただきたい。

#### 1号側溝（第9図・第1表）

1～6は肥前染付磁器碗である。1～3は18世紀前半～中頃の製品、2・3は器壁が薄くやや大ぶりで底の深い、いわゆる「くらわんか」手と呼ばれるもののなかでは古いタイプに属す。4・5は薄手の碗で18世紀前半、6は1690～1740年代、7は肥前唐津系陶器刷毛目碗で17世紀末～18世紀前半に比定される。8は焼塩壺で体部の3分の2と底部が欠損するが口縁部の形態等から両角まり分類のC1-c-ホに属し、小林謙一編年のV期（1720～1740年代）に比定される<sup>(1)</sup>。9は土師質土器焙烙で口縁部の相対する2カ所に粘土を貼り付けた把手をもつ。把手はそれぞれ貫通孔を有する。このタイプのもは難波洋三のD類、把手はa1類に分類され<sup>(2)</sup>、府内城三ノ丸遺跡における編年ではⅢ期、18世紀前半～中頃に位置づけられている<sup>(3)</sup>。以上石組による攪乱の影響を受けていない床面出土のもののみを1号側溝出土遺物と判断した。量的には少ないもののその年代は17世紀末～18世紀中頃までにおさまり、時期的にある程度まとまりをみせていることから、遺構の埋没年代は18世紀中頃～後半代と考えることができる。



第9図 1号側溝出土遺物 (S=1/3)

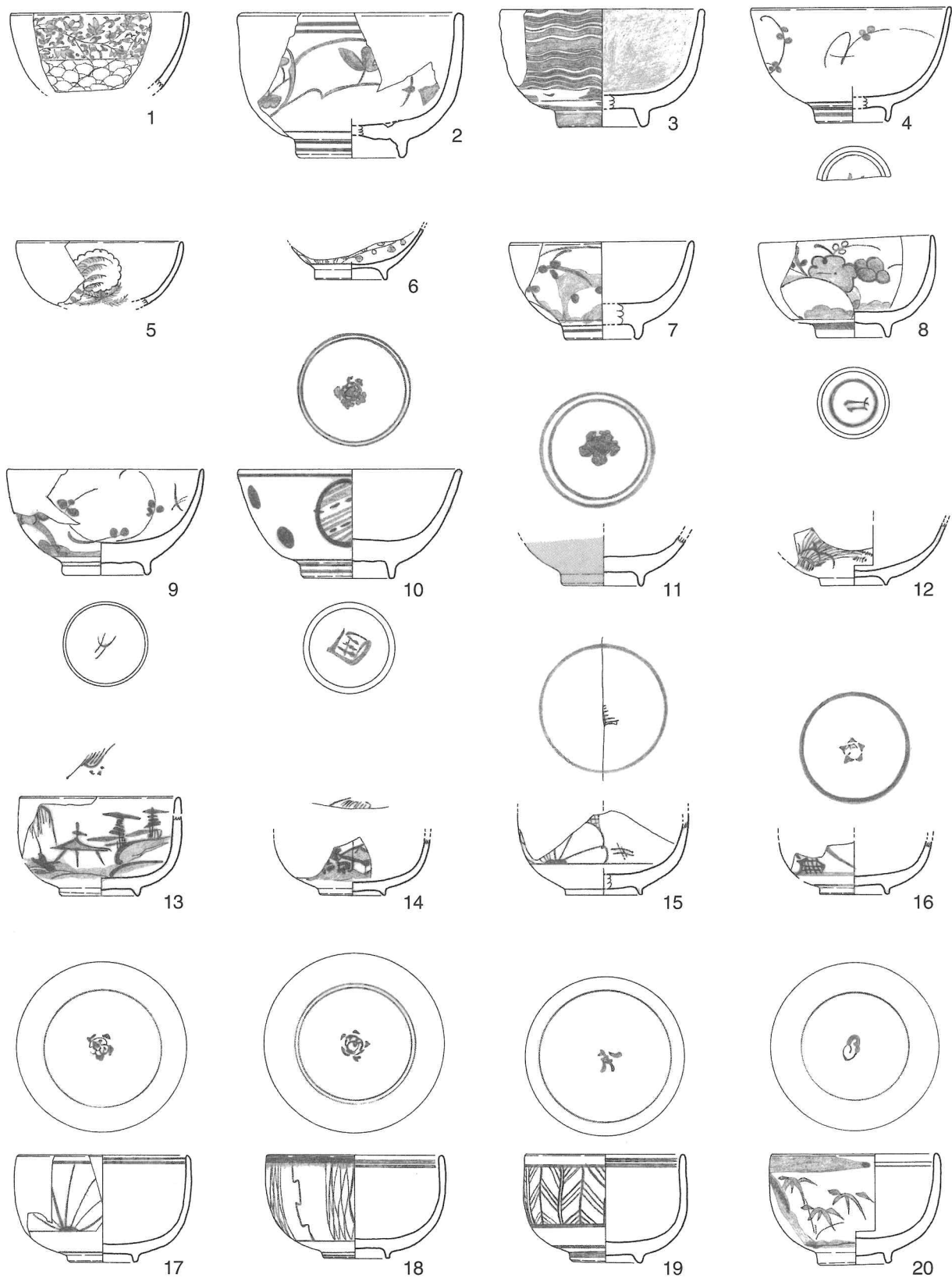
第1表 1号側溝出土陶磁器・土器観察表

法量( )は反転復原径

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
1	磁器碗	8.8	5.6	3.8	ロクロ	染付・透明	外:草花			肥前	18C前半~中頃		14
2	磁器碗	(10.2)	-	-	ロクロ	染付・透明	外:草花			肥前	18C前半~中頃		
3	磁器碗	(10.0)	4.0	5.8	ロクロ	染付・透明	外:草花		大明年製 崩れ銘	肥前	18C前半~中頃		
4	磁器碗	(9.4)	-	-		染付・透明	外:菊			肥前	18C前半		
5	磁器碗	-	-	(4.2)	ロクロ	染付・透明	外:蜻蛉草 草花		欠損 渦福?	肥前	18C前半		
6	磁器碗	(8.0)	4.2	3.1	ロクロ	染付・透明	外:雨降			肥前	1690~1740年代		
7	陶器碗	-	-	4.3	ロクロ	白土・鉄釉	刷毛目			肥前	17C末~18C前半		
8	土師 焼塩壺身	(4.9)	-	-	板作り 内面布目					堺	17C末~18C前葉		
9	土師焙烙	30.8	-	-							18C前半~中頃	貫通孔を有する把手あり	

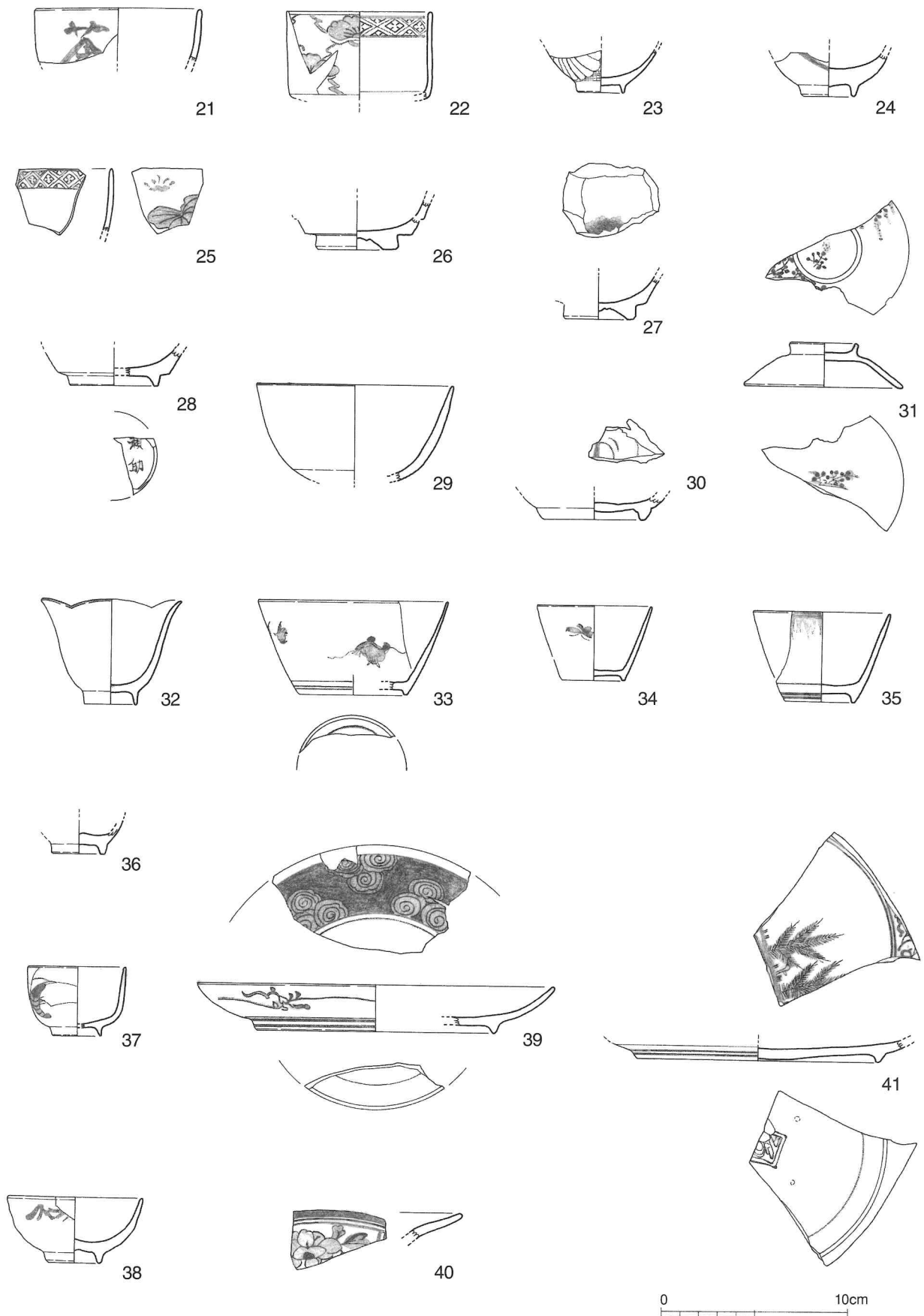
## 1号瓦溜(第10~18図・第2表)

1・4~19・22・24は肥前染付磁器碗、2は肥前陶胎染付碗である。4・7~10はいわゆる「くらわんか」手とよばれる粗製の磁器碗で4の製作年代は18世紀前半~中頃、7~10は18世紀後半に比定される。11は18世紀後半の青磁染付碗。10・11の見込みにはコンニャク印判により五弁花が描かれている。13~20は1780~1810年代に生産された丸形の磁器湯呑碗である。20は肥前系もしくは在地産の可能性ある。21は肥前系の染付磁器碗で、体部に「茶」という文字が染付されていることからやはり湯呑碗と考えられる。2・4号瓦溜では「道」と書かれた同タイプの碗が出土しているがセットになるものであろうか。22はやはり1780~1810年代に生産された筒形の湯呑碗である。25は肥前色絵磁器碗で18世紀中頃~末に比定される。3・27~29は陶器碗で、3は肥前唐津系刷毛目碗、26・27は萩焼の碗である。28は高台内に「瀬戸助」の刻印があり、瀬戸美濃産と考えられる。類例が新宿区内藤町遺跡で発見されており、その報告書中では製作地、製作年代は不明としながらも江戸で作られたという可能性も示唆している<sup>(4)</sup>。29は大分県臼杵市で19世紀初頭の10数年間だけ操業した末広窯の製品である<sup>(5)</sup>。これまで末広焼の製品は地元臼杵以外では発見されていなかった。臼杵市は佐伯市と同じく大分県南部に位置し地理的にも近い。今回の発見は末広焼の流通を考える上でも示唆的な資料となった。31は1820~1860年代に盛行する端反碗の蓋である。32は肥前輪花白磁猪口で口唇部に口紅を施した丁寧な作行のものである。33~35は肥前染付磁器猪口、36~38は肥前磁器小杯である。38のようなタイプは紅皿として使用された場合も多い。39~44・47~50は染付磁器皿、45・46は青磁染付皿でいずれも肥前産。39は1690~18世紀初頭のもので、同形同柄の皿が整地層からも出土している。43は表土から出土したものであるが42と同一規格になると予測されるためここに掲載した。このように同形態の絵変わり皿と考えられる45・46の例を含め、皿については同一規格のものを複数組で使用していたことが伺われる。40は肥前染付芙蓉手皿で、1690~18世紀前半の所産である。主として海外輸出用に生産されたものであるが、本遺跡からは数点が出土している。49は18世紀代に出現する粗製の染付磁器皿で高台径が小さく見込みを蛇の目状に釉剥ぎするのが特徴である。主に長崎県の波佐見地方などで生産され日常雑器として全国的に流通していた。51の陶器皿はきめの細かい白色土に透明釉を掛け見込に平面三日月形の小さな砂目をもつのが特徴である。このタイプは玉子手と呼ばれる上手の皿で1600~1630年代の肥前内野山窯に特有の製品である<sup>(6)</sup>。52は18世紀後半の肥前色絵磁器鉢である。内面に赤の顔料で菊の花を描いている。53・55・56は瓶類である。53は肥前染付磁器瓶の底部で体部が丸く頸が細長く伸びる形になる。54は青磁花生で両側に耳が付き口縁部がラッパ状に開く形態になる。このタイプは仏花器として使用された。57~59は火容として使用されたと考えられるものである。57は肥前陶胎染付火容で全体に鉄泥を施した後外面には染付による装飾を施す。58は焼き締め陶器火容と考えられるものである。底部外面

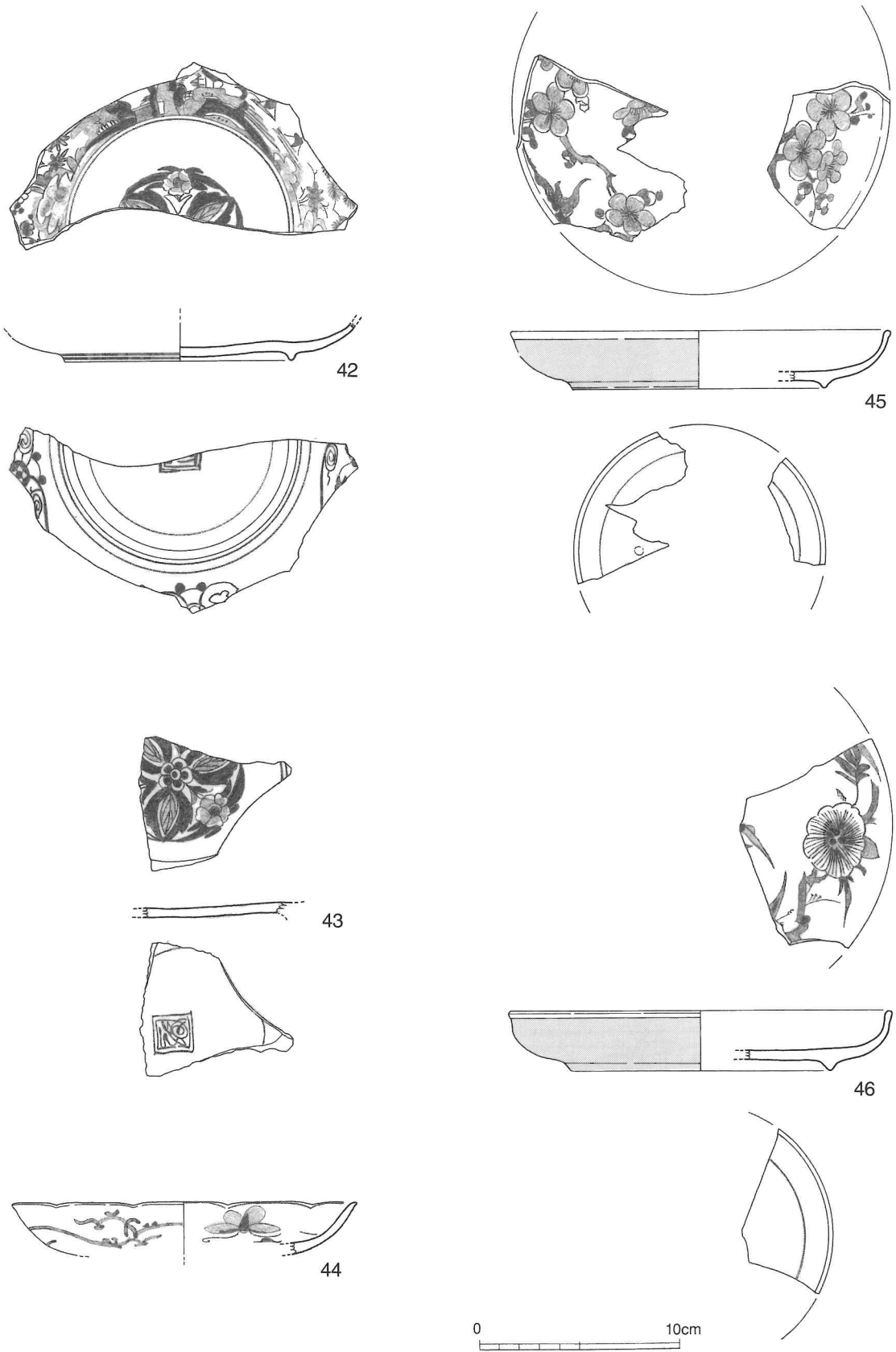


0 10cm

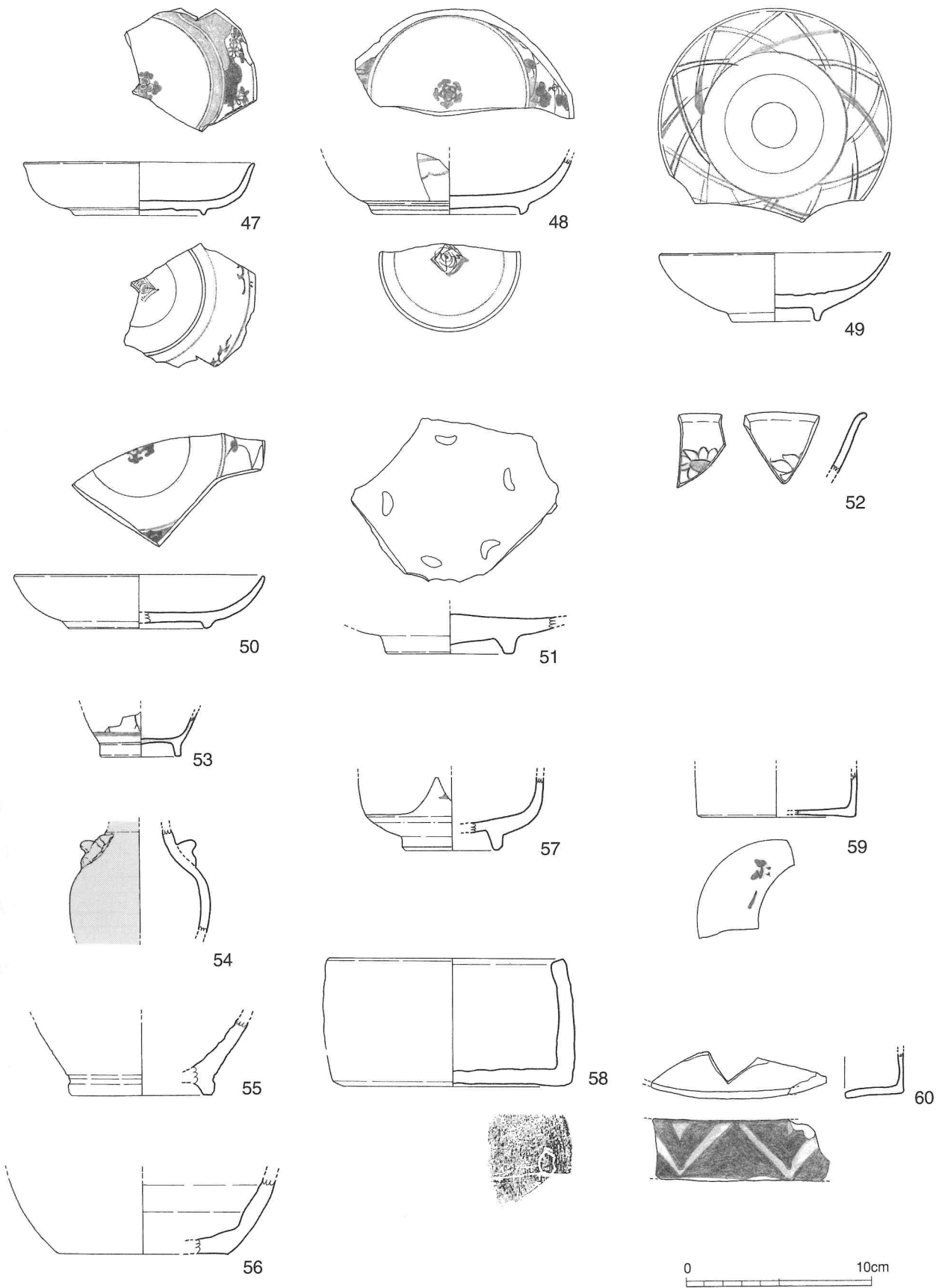
第10图 1号瓦溜出土遺物(1) (S=1/3)



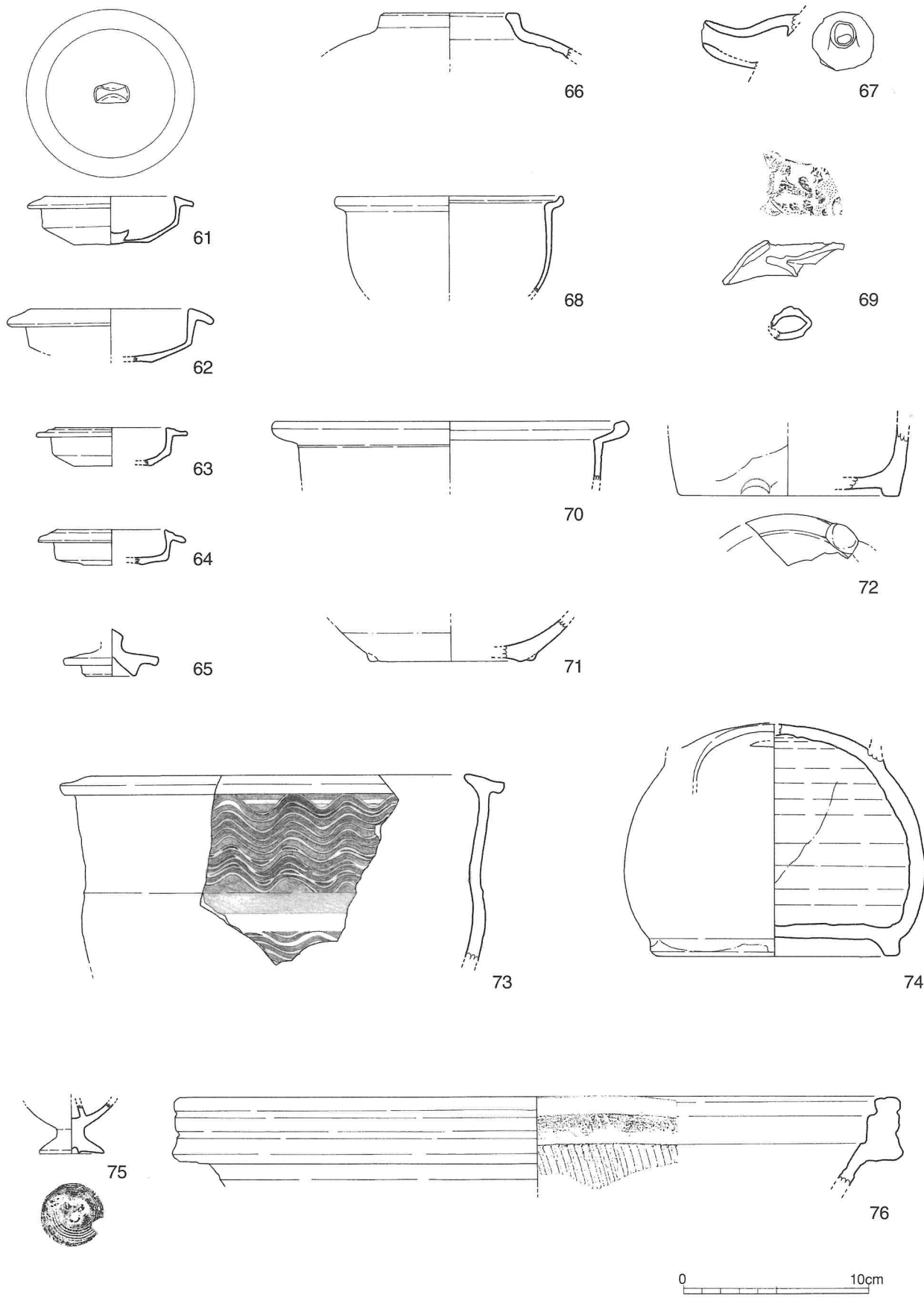
第11图 1号瓦溜出土遺物 (2) (S=1/3)



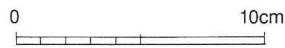
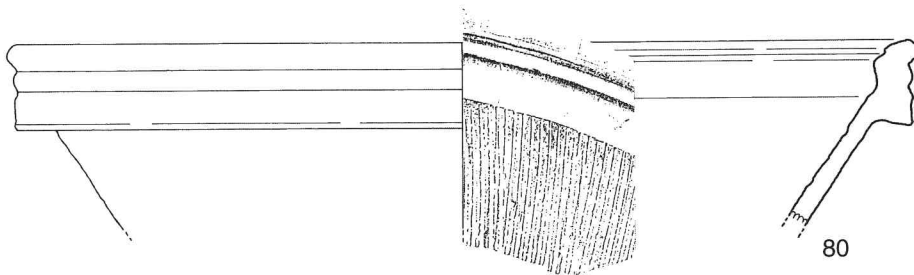
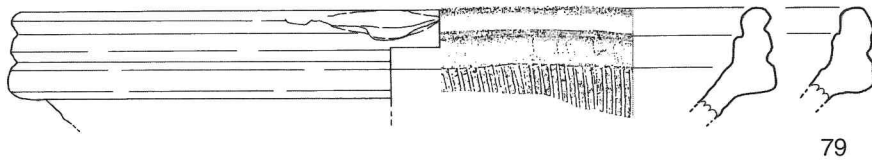
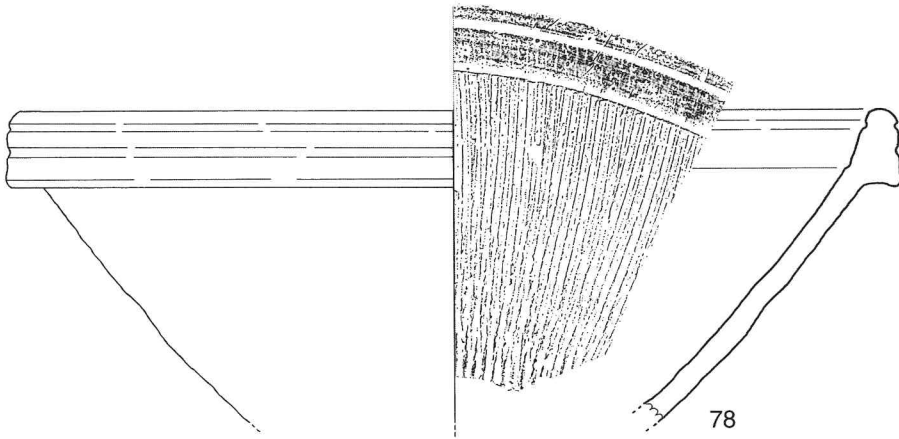
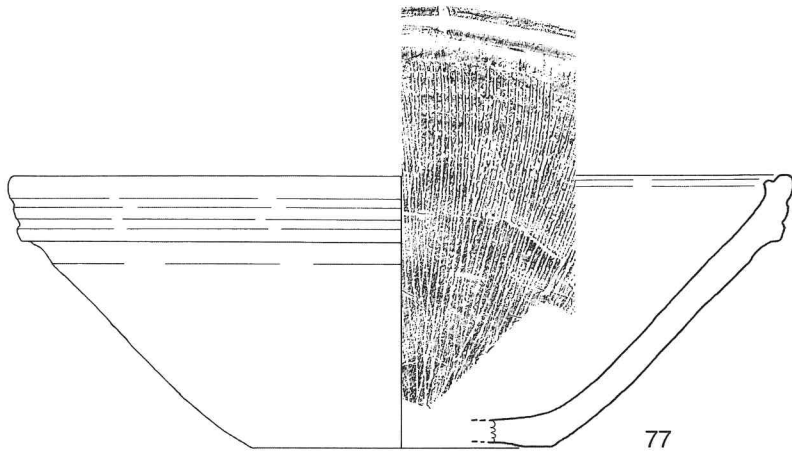
第12图 1号瓦溜出土遺物(3) (S=1/3)



第13图 1号瓦溜出土遺物(4) (S=1/3)

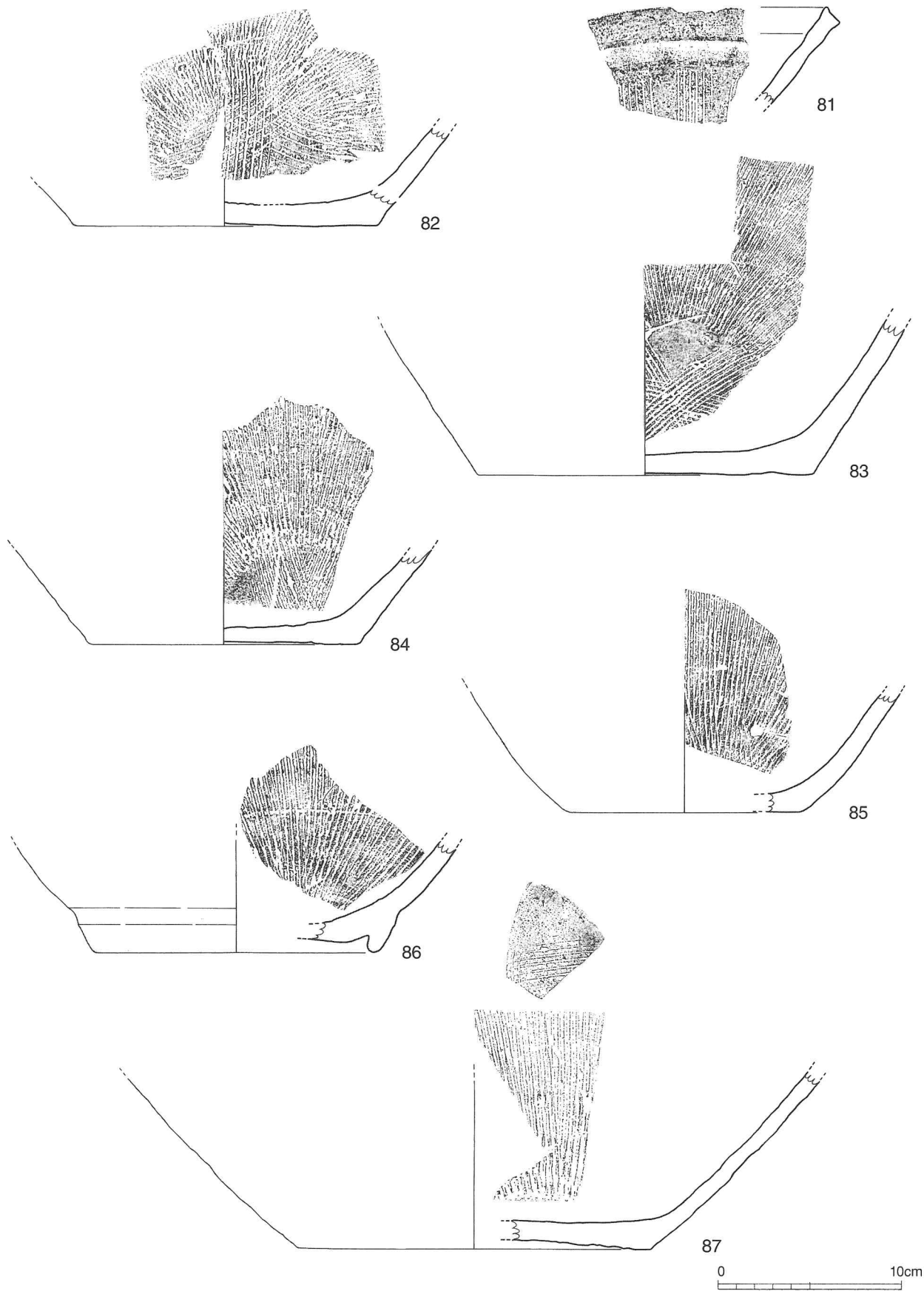


第14图 1号瓦溜出土遺物 (5) (S=1/3)

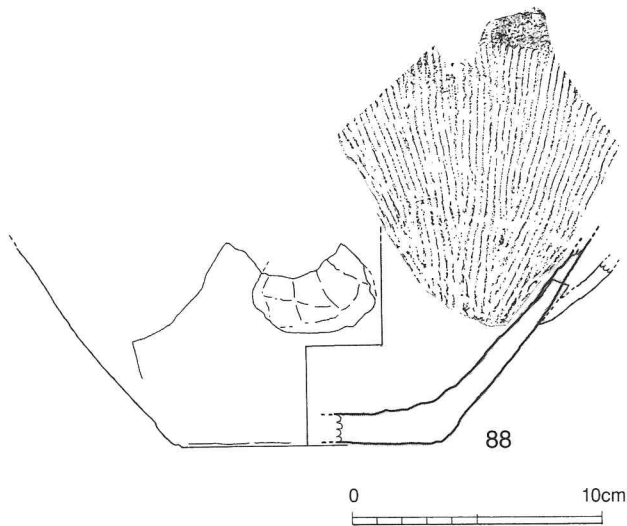


第15图 1号瓦溜出土遺物(6) (S=1/3)



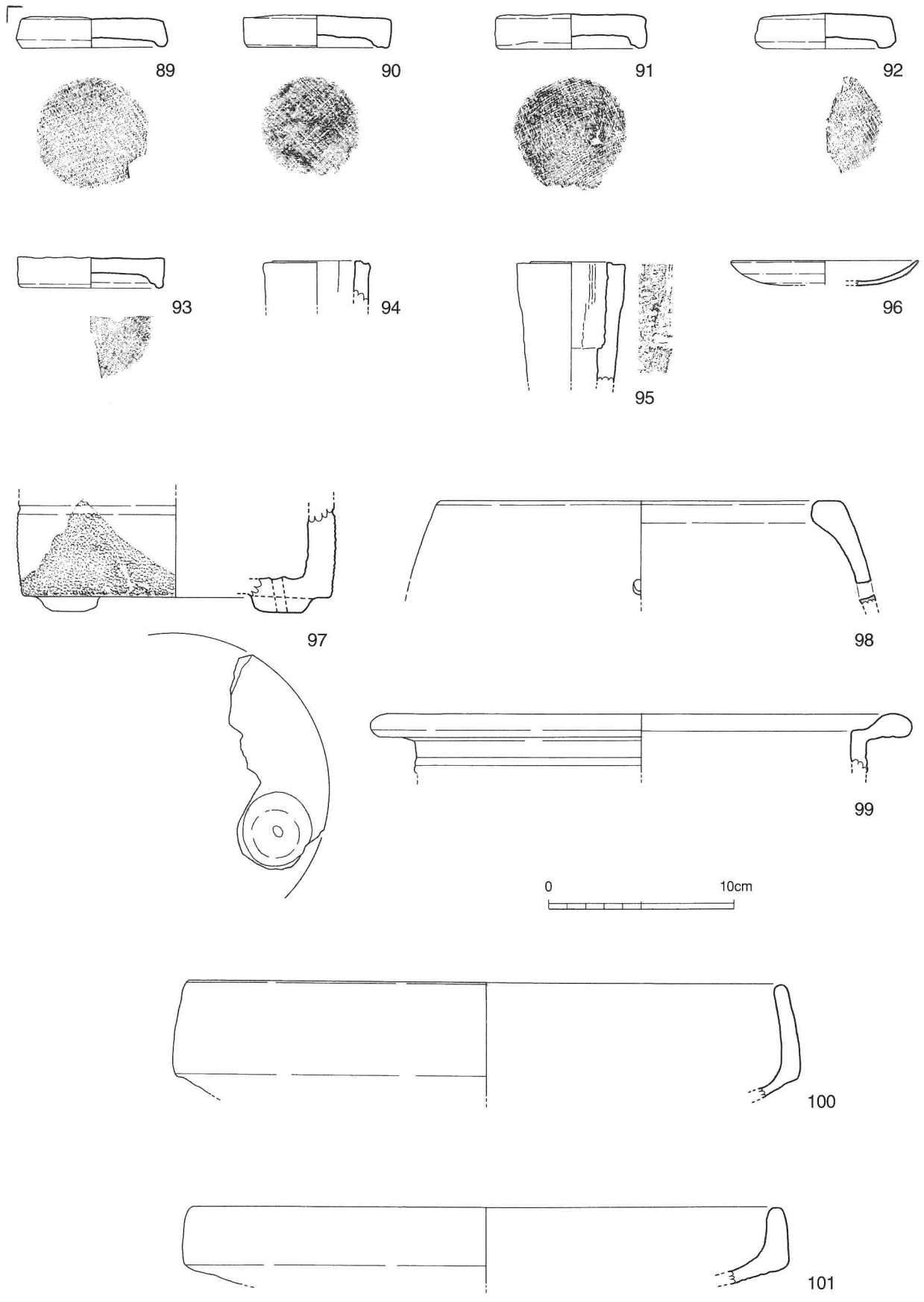


第16图 1号瓦溜出土遺物 (7) (S=1/3)



第17図 1号瓦溜出土遺物(8) (S=1/3)

に扇形の刻印をもつことから備前系の製品である可能性が高いが、年代は不明である<sup>(7)</sup>。59は関西系陶器火容で判読不能だが底部に墨書を有する。60は肥前鉄釉磁器鬘盥で、完形品の平面形は長楕円形を呈す。整髪の際に櫛を浸すための整髪料を入れた容器である。61~64は関西系陶器土瓶蓋。66・67は九州産陶器土瓶である。いずれも18世紀後半以降の製品である。62は4号瓦溜・整地層出土の破片と接合する。65は陶器蓋で、対応する器種は不明であるが九州産乗燭の蓋である可能性もある<sup>(8)</sup>。68は九州産陶器行平鍋、69は関西系行平鍋の把手である。69の上面には型作りで中国風の衣装を着た人物が陽刻されている。70・71は関西系あるいは九州産の陶器鍋である。通常70のようなタイプの鍋には口縁部の相対する2カ所に把手が付く。68~71の年代は18世紀後半以降である。74は瀬戸美濃産陶器火もらいまたは手焙りである。体部は丸く肩部正面と背面に窓が開き、上部に把手の痕跡がある。75は陶器乗燭で内面中央に芯を立てる部分をもち脚が付くタイプである。脚底部は左回転の糸切り痕がみられ中心部に未貫通の穿孔がある。76~80・82~85・87は堺産陶器播鉢である。77は内面の口縁部直下に突帯をめぐらし播目は口縁部付近で軽くナデ消す。外面の調整は口縁部外縁帯のやや下までロクロ削りを施す。接合はしなかったが85と同一固体である可能性が高い。82~84は播鉢底部で見込みの播目が中央で交差するように入れられている。76・79・80は77でみられた口縁部内面の突帯の位置が下がり段を成すものである。体部の播目は口縁部下で強くナデ消されている。87は底部で、見込みの播目が中心部を囲むようにウールマーク状になると予想される。以上77・82~85は白神典之編年のI形式1段階<sup>(9)</sup>、堀内秀樹編年のII-a類に<sup>(10)</sup>、76・79・80は白神II形式、堀内III-a1類に属すると考えられる。78は口縁部外縁帯の断面が三角形に近く内面の口縁部下にかすかに段の痕跡がみられるなど形態的には堺播鉢の白神III形式の特徴をもつが、内外面に黒褐色の釉が掛けられていることから産地の特定はできない。製作年代は19世紀以降であろう。81は丹波産播鉢で兵庫県下相野窯址編年のII形式に類する<sup>(11)</sup>。86は体部下端よりやや上から張り付けた高台をもつ底部で、堀内編年I-b類に属し備前産と推定される。88は産地不明の陶器播鉢である。成形は型作りで内外面に鉄泥を施し注口が付く。播目は隙間なく入れてあるがやや雑な感じを受ける。整地層出土遺物273(第43図)と同一固体もしくは同一産地の可能性がある。89~93は焼塩壺蓋で、いずれも内面に布目圧痕がみられ蓋受けをもつタイプの焼塩壺に伴う。形態は渡辺誠分類におけるB類に属す<sup>(12)</sup>。これらの中でも89~92は金雲母を大量に含むことから小川望のイ②類に分類される<sup>(13)</sup>。89~92が雲母を含み橙色を呈するのに対し、93は灰白色で2次的焼成を受けた痕跡がなく角閃石・長石を含むことから両者の産地は異なると考えられる。93は胎土から推測すると在地産の可能性もある。94・95は焼塩壺身である。94は口縁部の蓋受けが段を成すもの、95は蓋受けが痕跡のみになっているものである。94は内面が平滑に仕上げられており、95は内面下位に段を有し段上部の布目の上からヘラ状工具による縦方向の削り痕が残る。94は小川望のII②b2に分類され、95は両角まり分類C2-e-へ、小林謙一編年のIII期(19世紀前~中葉)に比定される<sup>(14)</sup>。96は土師質土器小皿である。外面は口縁部やや下まで左回転ヘラ削り、内面は回転ナデ調整を施す。淡橙色を呈し、焼成は良好で精緻な作りである。97は瓦質土器焜炉である。外面に布目状圧痕が付き底部には円盤状の足をもつ。本来は3足で、足の中央には底部まで貫通する穿孔を有する。98は土師質土器焜炉である。体部に風通しの穴が1個残存している。99は瓦質土器甕で硬質な焼き上がりである。100・101は土師質土器焙烙である。100は器高が深いタイプ、101は浅いタイプで、100は府内城三ノ丸遺跡のII期、101はV期にそれぞれ対応する器形と考えられる<sup>(15)</sup>。1号瓦溜の陶磁器・土器類は18世紀代のものを主体とするが、1860年代を下限とする端反碗の蓋・19世紀代に下る土師質土器等が検出されており、遺構の年代は19世紀中頃と考えられる。



第18图 1号瓦溜出土遺物 (9) (S=1/3)

第2表 1号瓦溜出土陶磁器・土器観察表

法量( )は反転復原径

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
1	磁器碗	(9.1)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:唐草			肥前	18C前半~中頃		15
2	陶胎碗	(11.2)	7.5	(5.4)	ロクロ	染付・透明	外:唐草			肥前	18C前半~中頃		
3	陶器碗	(10.4)	6.1	(4.5)	ロクロ	白土・鉄釉	外:刷毛目			肥前	18C前半		
4	磁器碗	(10.3)	5.9	(3.8)	ロクロ	染付・透明	外:梅樹		銘あり	肥前	18C前半~中頃		
5	磁器碗	(8.6)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:若松 雪輪			肥前	18C中頃~末		
6	磁器碗	—	—	(3.6)	ロクロ	染付・透明	外:植物			肥前	18C中頃~末		
7	磁器碗	(9.4)	5.0	(3.8)	ロクロ	染付・透明	外:雪輪 梅樹			肥前	18C後半		
8	磁器碗	(8.9)	5.3	(3.7)	ロクロ	染付・透明	外:雪輪 梅樹		大明年製 崩れ銘	肥前	18C後半		
9	磁器碗	(10.1)	5.4	4.3	ロクロ	染付・透明	外:雪輪 梅樹		大明年製 崩れ銘	肥前	18C後半		
10	磁器碗	(11.4)	5.6	4.6	ロクロ	染付・透明	外:丸 見込:五弁花	コンニャク 印版	落款	肥前	18C後半		
11	磁器碗	—	—	4.0	ロクロ	染付・青磁	見込:五弁花	コンニャク 印版		肥前	18C後半		
12	磁器碗	—	—	3.4	ロクロ	染付・透明	外:稲束			肥前	18C後半		
13	磁器碗	8.2	5.1	3.9	ロクロ	染付・透明	外:山水 見込:抽象?			肥前	1780~1810年代		
14	磁器碗	—	—	(3.2)	ロクロ	染付・透明	外:楼閣			肥前	1780~1810年代		
15	磁器碗	—	—	(3.9)	ロクロ	染付・透明	外:半菊 見込:寿崩し			肥前	1780~1810年代		
16	磁器碗	—	—	3.5	ロクロ	染付・透明	外:半菊 見込:五弁花			肥前	1780~1810年代		
17	磁器碗	(8.8)	5.5	3.4	ロクロ	染付・透明	外:半菊 見込:五弁花			肥前	1780~1810年代		
18	磁器碗	9.0	5.3	3.3	ロクロ	染付・透明	外:網目 見込:五弁花			肥前	1780~1810年代		
19	磁器碗	8.2	5.5	3.5	ロクロ	染付・透明	外:矢羽 見込:不明			肥前	1780~1810年代		
20	磁器碗	8.6	5.7	3.6	ロクロ	染付・透明	外:竹笹 見込:不明			肥前系 or 在地	1780~1810年代		
21	磁器碗	(8.8)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:文字「茶」			肥前系	18C後半~19C初		16
22	磁器碗	(7.8)	—	—	ロクロ	染付・透明	外:松皮菱 内:四方禪			肥前	1780~1810年代	筒形碗	
23	磁器碗	—	—	2.4	ロクロ	染付・透明	外:割菊			肥前	18C後半		
24	磁器碗	—	—	2.7	ロクロ	染付・透明				肥前	18C代		
25	磁器碗	—	—		ロクロ	色絵・透明	外:桐 内:四方禪			肥前	18C中頃~末		
26	陶器碗	—	—	4.1	ロクロ	藁灰釉				萩	19C		
27	陶器碗	—	—	3.6	ロクロ	藁灰釉・鉄釉				萩	19C		
28	陶器碗	—	—	(4.7)	ロクロ	灰釉			瀬戸助 (陰刻)	瀬戸美濃			
29	陶器碗	(10.5)	—	—	ロクロ	灰釉・鉄釉		口紅		末広	19C初 (1801~1815)	大分県白杵市 末広焼	
30	磁器碗	—	—	(5.4)	ロクロ	青花・透明			露胎	中国	16C末~17C初頭		

法量 ( ) は反転復原径

番号	器種	法量 ( cm )			成形	装 飾			底 面 内 底	製作地	製 作 年 代	備 考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文 様	装飾特徴					
31	磁器蓋	(8.4)	2.4	(3.5)	ロク口	染付・透明	外:植物 見込:植物			肥 前	1820~1860年代	端反碗蓋	
32	磁器猪口	(7.6)	5.6	(2.8)	ロク口	白 磁		口紅 輪花		肥 前	17C末~18C前半		
33	磁器猪口	(10.1)	5.0	(5.8)	ロク口	染付・透明	外:鳥		一重圏線	肥 前	18C前半		
34	磁器猪口	6.1	4.0	3.3	ロク口	染付・透明	外:蝶			肥 前	18C中頃~末		
35	磁器猪口	7.3	4.8	3.7	ロク口	染付・透明	外:雨降			肥 前	18C代		
36	磁器猪口	—	—	2.7	ロク口	透 明				肥 前	18C前半		
37	磁器小杯	5.1	3.7	2.6	ロク口	染付・透明	外:海老			肥 前	18C後半		
38	磁器小杯	(7.1)	3.5	2.7	ロク口	染付・透明	外:竹筴			肥 前	18C後半~19C前半	紅皿	
39	磁器皿	(19.0)	2.5	(12.7)	ロク口	染付・透明	内:雲気 外:連続唐草		一重圏線	肥 前	1690~18C初頭		
40	磁器皿	—	—	—	ロク口	染付・透明	内:牡丹 (芙蓉手)			肥 前	1690~18C前半	大皿	
41	磁器皿	—	—	(13.0)	ロク口	染付・透明	内:唐草 見込:若松		渦 福 一重圏線	肥 前	1690~18C前半	ハリ支え	
42	磁器皿	—	—	11.4	ロク口	染付・透明	内:山水 外:連続唐草 見込:唐花		渦福? 一重圏線	肥 前	18C前半	125号石組	17
43	磁器皿	—	—	—	ロク口	染付・透明	見込:唐花		渦 福 一重圏線	肥 前	18C前半	表土出土 類例として掲載、No42と同種	
44	磁器皿	(17.2)	—	—	ロク口	染付・透明	内:蝶 外:連続唐草			肥 前	18C前半		
45	磁器皿	(18.6)	2.9	(12.5)	ロク口	染付・青磁	内:梅樹		一重圏線	肥 前	18C前半~中頃	ハリ支え	
46	磁器皿	(19.0)	3.0	(13.0)	ロク口	染付・青磁	内:花		一重圏線	肥 前	18C前半~中頃		
47	磁器皿	(12.4)	2.9	(7.0)	ロク口	染付・透明	内:岩 花 外:連続唐草 見込:五弁花		渦 福	肥 前	18C前半~中頃	蛇の目凹型高台	18
48	磁器皿	—	—	(8.0)	ロク口	染付・透明	内:草花 外:連続唐草 見込:五弁花	コンニャク 印 版	渦 福 一重圏線	肥 前	18C前半~中頃		
49	磁器皿	12.4	3.7	4.7	ロク口	染付・透明	内:斜格子			肥 前	18C代	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	
50	磁器皿	(13.4)	2.9	(7.5)	ロク口	染付・透明	内:草花 見込:五弁花	コンニャク 印 版		肥 前	18C後半	見込み蛇ノ目釉剥ぎ	
51	陶器皿	—	—	6.7	ロク口	透 明				肥 前 (内野山)	1610~17C第2~4半 期	砂目積 玉子手	
52	磁器鉢	—	—	—	ロク口	色絵・透明	内:花			肥 前	18C後半		
53	磁器瓶	—	—	4.1	ロク口	染付・透明				肥 前	17C後半~18C		
54	磁器花生	—	—	—	ロク口	青 磁				肥 前	18C代		
55	陶器瓶	—	—	(7.5)	ロク口	鉄 泥			露 胎	肥 前	17C後半~18C前半		
56	陶器瓶	—	—	(9.2)	ロク口					備前?	18C~19C	焼き締め陶器	
57	陶胎火容	—	—	(5.0)	ロク口	染付・透明			鉄 泥	肥 前	18C前半		
58	陶器火容	(12.5)	6.8	11.8	ロク口				扇形刻印	備前?		焼き締め陶器	
59	陶器火容	—	—	(8.2)	ロク口	透 明			墨 書	関西系	18C後半~		
60	磁器鉢蓋					鉄 釉			露 胎	肥 前	17C末~18C初頭		

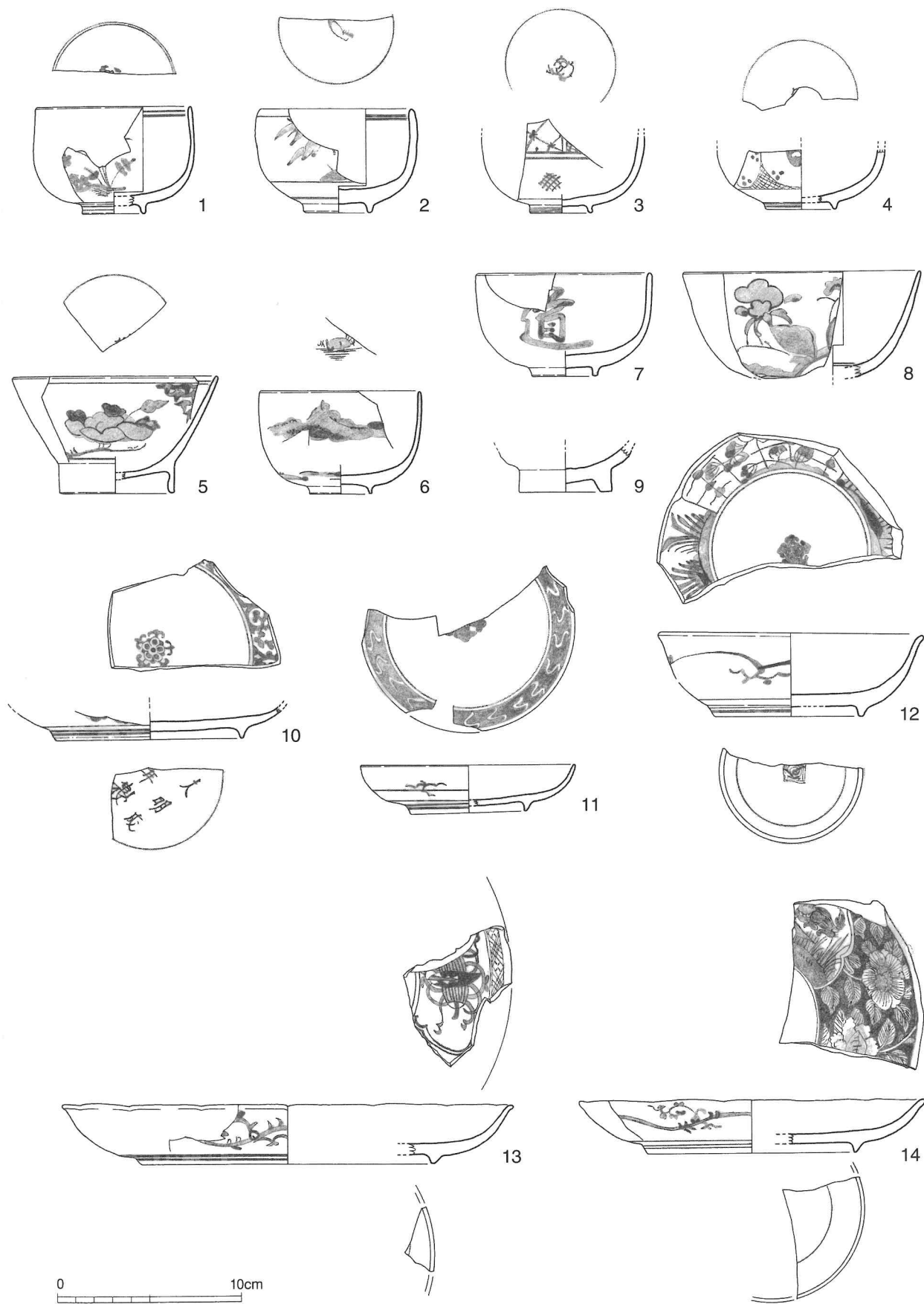
法量 ( ) は反転復原径

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
61	陶器蓋	7.0	2.6	4.0	ロクロ	透明			露胎	関西	18C後半～	土瓶蓋	19
62	陶器蓋	8.6	—	—	ロクロ	透明			露胎	関西	18C後半～	土瓶蓋	
63	陶器蓋	(6.0)	2.1	(4.2)	ロクロ	鉄釉			露胎	関西	18C後半～	土瓶蓋	
64	陶器蓋	(5.9)	1.9	(3.2)	ロクロ	鉄釉			露胎	関西	18C後半～	土瓶蓋	
65	陶器蓋	5.2	2.5	2.5	ロクロ	鉄釉			露胎	九州	18C後半～		
66	陶器土瓶	(7.2)	—	—	ロクロ	白っぽい 釉				九州	18C後半～19C		
67	陶器土瓶	—	—	—						九州	18C後半～19C	注口	
68	陶器行平	(12.1)	—	—	ロクロ	鉄釉				九州	18C後半～		
69	陶器行平	—	—	—	型押	鉄釉	人物			九州	18C後半～	把手	
70	陶器鍋	—	—	—	ロクロ	鉄釉				九州	18C後半～		
71	陶器鍋	—	—	(7.6)	ロクロ	鉄泥			露胎	関西 or九州	18C後半～		
72	陶器植木鉢	—	—	(11.8)	ロクロ	透明				瀬戸美濃	18C～19C代		
73	陶器甕	(19.8)	—	—	ロクロ	白土 鉄釉	刷毛目			肥前	17C後半～18C前半		
74	陶器火もらい	—	12.4	(12.8)	ロクロ	灰釉			露胎	瀬戸美濃	18C～19C代	体部上方に窓 把手あり	
75	陶器乗燭 <small>ひょうそく</small>	—	—	3.5	ロクロ	鉄釉			糸切り(左)	関西?	18C後半～		
76	陶器播鉢	(38.2)	—	—	ロクロ					堺	18C後半		
77	陶器播鉢	(31.0)	10.8	(12.0)	ロクロ					堺	18C前半～中頃		20
78	陶器播鉢	(34.7)	—	—	ロクロ	鉄釉?				不明	19C代?		
79	陶器播鉢	(29.6)	—	—	ロクロ					堺	18C後半		
80	陶器播鉢	(36.1)	—	—	ロクロ					堺	18C後半		
81	陶器播鉢	—	—	—	ロクロ					丹波	17C前半		21
82	陶器播鉢	—	—	16.4	ロクロ					堺	18C前半～中頃		
83	陶器播鉢	—	—	(18.0)	ロクロ					堺	18C前半～中頃		
84	陶器播鉢	—	—	(14.6)	ロクロ					堺	18C前半～中頃		
85	陶器播鉢	—	—	(12.4)	ロクロ					堺	18C前半～中頃	No78と 同一個体の可能性あり	
86	陶器播鉢	—	—	(15.4)	ロクロ					備前	17C後半～18C初頭		
87	陶器播鉢	—	—	(19.1)	ロクロ					堺	18C後半		
88	陶器播鉢	—	—	(9.9)	型打					不明	19C～		22
89	土師 焼塩壺蓋	7.6	1.7	—	板作り 内面布目					堺			23
90	土師 焼塩壺蓋	7.5	1.7	—	板作り 内面布目					堺			

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
91	土師焼塩壺蓋	7.7	1.8	—	板作り内面布目					堺			
92	土師焼塩壺蓋	(6.6)	1.9	—	板作り内面布目					堺			
93	土師焼塩壺蓋	(7.5)	1.6	—	板作り内面布目					堺			
94	土師焼塩壺身	(4.8)		—	板作り内面ヘラナデ					堺	18C～19C初頭		
95	土師焼塩壺身	(4.2)	—	—	板作り内面布目上にヘラナデ					堺	18C～19C初頭		
96	土師小皿	(10.0)	—	—	ロクロ				ロクロ削り(左)				
97	瓦質焜炉			(16.6)	外面布目						19C前半	円盤状の足1個残存	
98	土師焜炉	(21.5)	—	—	外面ミガキ						19C前半～中頃	風通し穴1個残存	
99	瓦質甕	(27.4)	—		ロクロ								
100	土師焙烙	(32.0)	—	—	ロクロ						18C後半		
101	土師焙烙	(31.5)	—	—	ロクロ						19C前半～中頃		

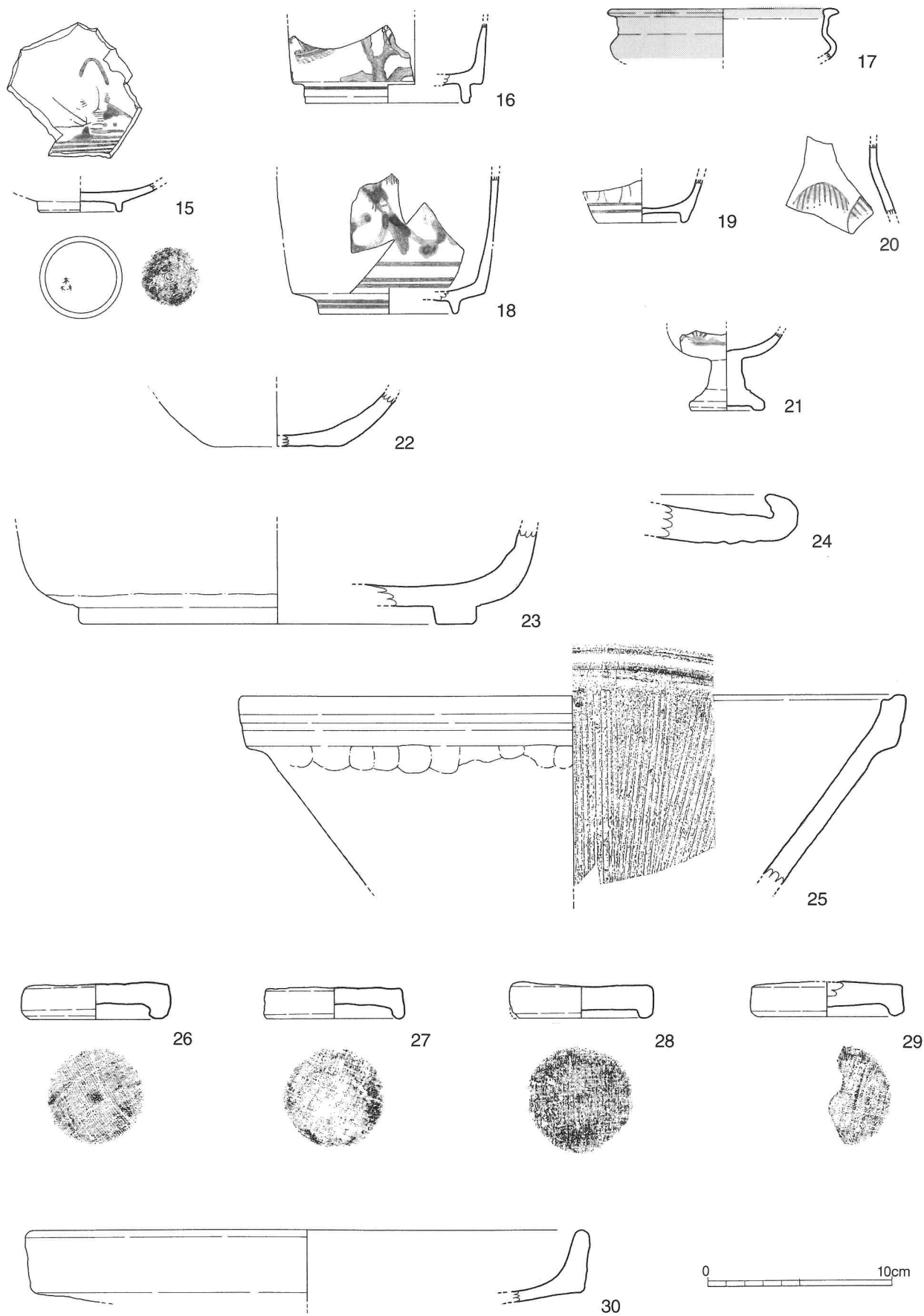
2号瓦溜 (第19・20図・第3表)

1～6・8は肥前染付磁器碗、7は肥前系染付磁器碗である。1～4・6・7は丸形の湯呑碗、5は広東碗で製作年代は1780～1810年代である。7については4号瓦溜にも同一規格のものが存在する。9は肥前白磁碗で、1610～1630年代に製作されたいわゆる初期伊万里である。10～14は肥前染付磁器皿。10では見込みの五弁花が非常に丁寧な手描きであるのに対し、11・12ではコンニャク印版によって簡略化されている。また11の内面文様は墨弾きの技法を用いて描かれたものである。墨弾きとは墨で文様を描いた上から呉須を塗り焼くと、墨の部分が飛んで白い線描が文様として残るといった技法である<sup>(16)</sup>。13・14は同一固体もしくは同一規格と思われるものが整地層より出土している。年代は10・11・13が18世紀前半、12・14が18世紀前半～中頃に比定される。15は肥前京焼風陶器皿である。見込みに鉄絵で山水文を描き底部は無釉、高台内に「森」の印銘がみられる。年代は17世紀後半～18世紀前半である。16・17は磁器香炉。16は九州産の染付で19世紀代の製品である。18は18世紀前半の肥前染付磁器蓋物、19は19世紀初頭～幕末、20は18世紀代に比定される染付磁器瓶でいずれも肥前産。21は肥前系染付磁器仏飯器で、年代は18世紀中頃～末である。22は九州産陶器土瓶の底部、23は瀬戸美濃産陶器手水鉢で、いずれも18世紀後半以降の製品。23については接合はしなかったが1号瓦溜・整地層から同一固体と推定される口縁部、胴部等の破片が発見されており、それらは緑釉、白釉を流し掛けして文様を表している。24は備前産の陶器盤で17世紀代のものと考えられる。25は堺産陶器播鉢で白神典之編年Ⅰ形式1段階、堀内秀樹編年Ⅱ—a類に属し<sup>(17)</sup>、18世紀前半～中頃に比定される。26～29は焼塩壺蓋で内面には布目圧痕がみられ、蓋受けをもつタイプの焼塩壺に伴う。渡辺誠分類のB類、小川望分類のイ②類に属す<sup>(18)</sup>。30は土師質土器焙烙で器高は浅い。時期的には府内城三ノ丸遺跡のV期以降に対応すると考えられる<sup>(19)</sup>。2号瓦溜も18世紀代のものを主体としつつも19世紀代に下る遺物を含むことから19世紀中頃の年代が想定される。



第19图 2号瓦溜出土遺物(1) (S=1/3)





第20图 2号瓦溜出土遺物(2)(S=1/3)

第3表 2号瓦溜出土陶磁器・土器観察表

法量( )は反転復原径

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
1	磁器碗	(8.3)	5.8	(3.4)	ロクロ	染付・透明	外:草花 見込:五弁花	コンニャク 印版		肥前	1780~1810年代		28
2	磁器碗	8.1	5.6	3.6	ロクロ	染付・透明	外:竹笹 見込:抽象			肥前	1780~1810年代		
3	磁器碗	-	-	3.3	ロクロ	染付・透明	外:市松網目 見込:五弁花			肥前	1780~1810年代		
4	磁器碗	-	-	(3.8)	ロクロ	染付・透明	外:雪輪			肥前	1780~1810年代		
5	磁器碗	11.1	6.3	6.0	ロクロ	染付・透明	外:牡丹			肥前	1780~1810年代	広東碗	
6	磁器碗	(8.6)	5.5	(3.4)	ロクロ	染付・透明	外:山水			肥前	1780~1810年代		
7	磁器碗	(9.4)	5.6	(3.4)	ロクロ	染付・透明	外:文字「道」			肥前系	18C後半~19C初頭		
8	磁器碗	(12.8)	-	-	ロクロ	染付・透明	外:松竹			肥前	18C前半~中頃		
9	磁器碗	-	-	(5.0)	ロクロ	白磁				肥前	1610~1630年代		
10	磁器皿	-	-	(10.2)	ロクロ	染付・透明	外:連続唐草 内:唐草 見込:五弁花			肥前	18C前半		
11	磁器皿	11.5	2.6	6.3	ロクロ	染付・透明	内:振花 外:連続唐草 見込:五弁花	墨弾き コンニャク印版		肥前	18C前半		
12	磁器皿	(14.0)	4.5	7.9	ロクロ	染付・透明	内:草花 外:連続唐草 見込:五弁花	コンニャク 印版	渦福 一重圏線	肥前	18C前半~中頃		
13	磁器皿	(24.2)	3.2	(15.8)	ロクロ	染付・透明	内:宝 四方櫛 外:連続唐草		一重圏線	肥前	18C前半		
14	磁器皿	(18.8)	2.9	(11.4)	ロクロ	染付・透明	内:牡丹唐草 窓絵に獅子 外:連続唐草		一重圏線	肥前	18C前半~中頃		
15	陶器皿	-	-	4.3	ロクロ	染付・透明	見込:山水		森(刻印) 露胎	肥前	17C後半~18C前半	京焼風陶器	29
16	磁器香炉	-	-	(8.8)	ロクロ	染付・透明	外:山水			九州 (小宛?)	19C代	コバルト	
17	磁器香炉	(12.0)	-	-	ロクロ	青磁				肥前	18C代		
18	磁器蓋物	-	-	(7.4)	ロクロ	染付・透明	外:唐草			肥前	18C前半		
19	磁器瓶	-	-	4.7	ロクロ	染付・透明				肥前	19C初頭~幕末		
20	磁器瓶	-	-	-	ロクロ	染付・透明	外:松			肥前	18C代		
21	磁器仏飯器	-	-	3.8	ロクロ	染付・透明	外:草			肥前系	18C中頃~末		
22	陶器土瓶	-	-	(6.8)	ロクロ	鉄泥			露胎	九州	18C後半~		
23	陶器 手水鉢	-	-	(21.0)	ロクロ	透明				瀬戸美濃	18C後半~	同一個体と思われる破片は 緑釉、白釉流し掛け 見込みに目跡	
24	陶器盤	-	-	-	ロクロ					備前系	17C代		
25	陶器搦鉢	(36.0)	-	-	ロクロ					堺	18C前半~中頃		
26	土師 焼塩壺蓋	7.1	2.0	-	板作り 内面布目					堺			
27	土師 焼塩壺蓋	7.2	1.6	-	板作り 内面布目					堺			
28	土師 焼塩壺蓋	6.9	1.9	-	板作り 内面布目					堺			
29	土師 焼塩壺蓋	7.4	1.9	-	板作り 内面布目					堺			
30	土師焙烙	(30.6)	-	-	ロクロ						19C前半~中頃		

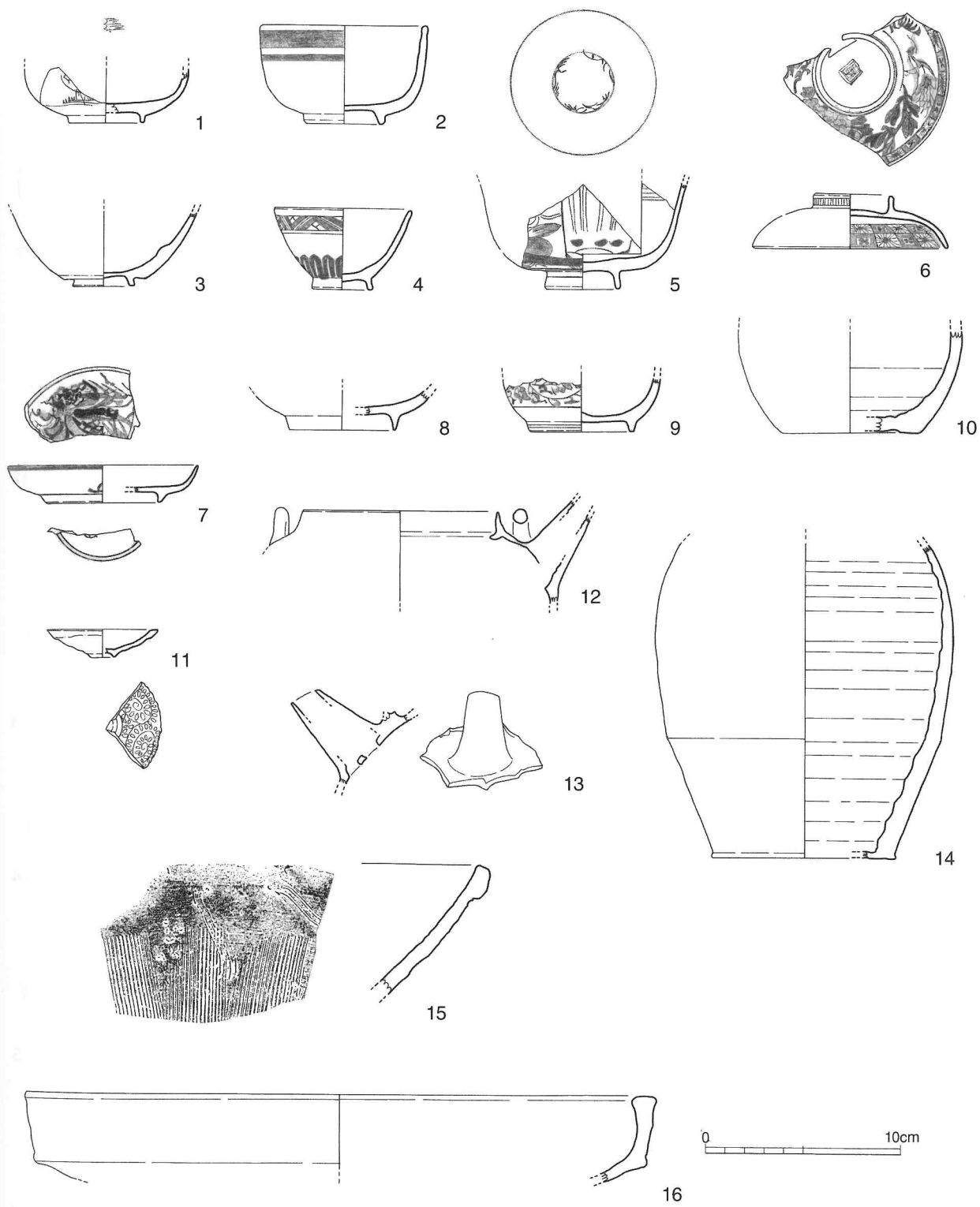
3号瓦溜（第21図・第4表）

1は肥前染付磁器湯呑碗で、同一規格のものが試掘調査時に多く検出された（第49図12～16）。2は陶器碗で外面に白化粧土を掛けその上から呉須で染付した特殊なものである。高台内には鉄泥を施す。製作年代は19世紀以降と考えられ、関西系または九州産のものと推定される。3は18世紀後半以降に出現する小杉碗とよばれる関西産の陶器碗である。4は19世紀初頭～幕末に製作された肥前染付磁器小杯。類例が佐賀県嬉野町吉田2号窯で確認されている<sup>(20)</sup>。5は1820～1860年代の肥前染付磁器端反碗、6は幕末の端反碗蓋である。7は瀬戸美濃産染付磁器皿で幕末～明治前半に比定される。8は磁器蓋物、9は染付磁器瓶でいずれも肥前産である。10・14は陶器瓶。10は備前系、14は九州産と推定される。11は肥前白磁紅皿である。型押し成形により外面に蛸唐草文を施す。幕末～明治前半の所産である。12・13は陶器土瓶、12が肥前産、13が関西または九州産と考えられる。15は陶器播鉢で内外面とも鉄釉が掛けられており、内面の播目は口縁部付近で間隔が広がる。産地は肥前の可能性が高い。16は土師質土器焙烙で器高は低く、口縁端部が肥厚し口唇部は平らな面を成す。府内城三ノ丸遺跡編年のV b期に対応する<sup>(21)</sup>。3号瓦溜は18世紀後半～明治前半までの比較的新しい時期の遺物で構成されており、遺構の所属年代は明治前半頃と考えられる。

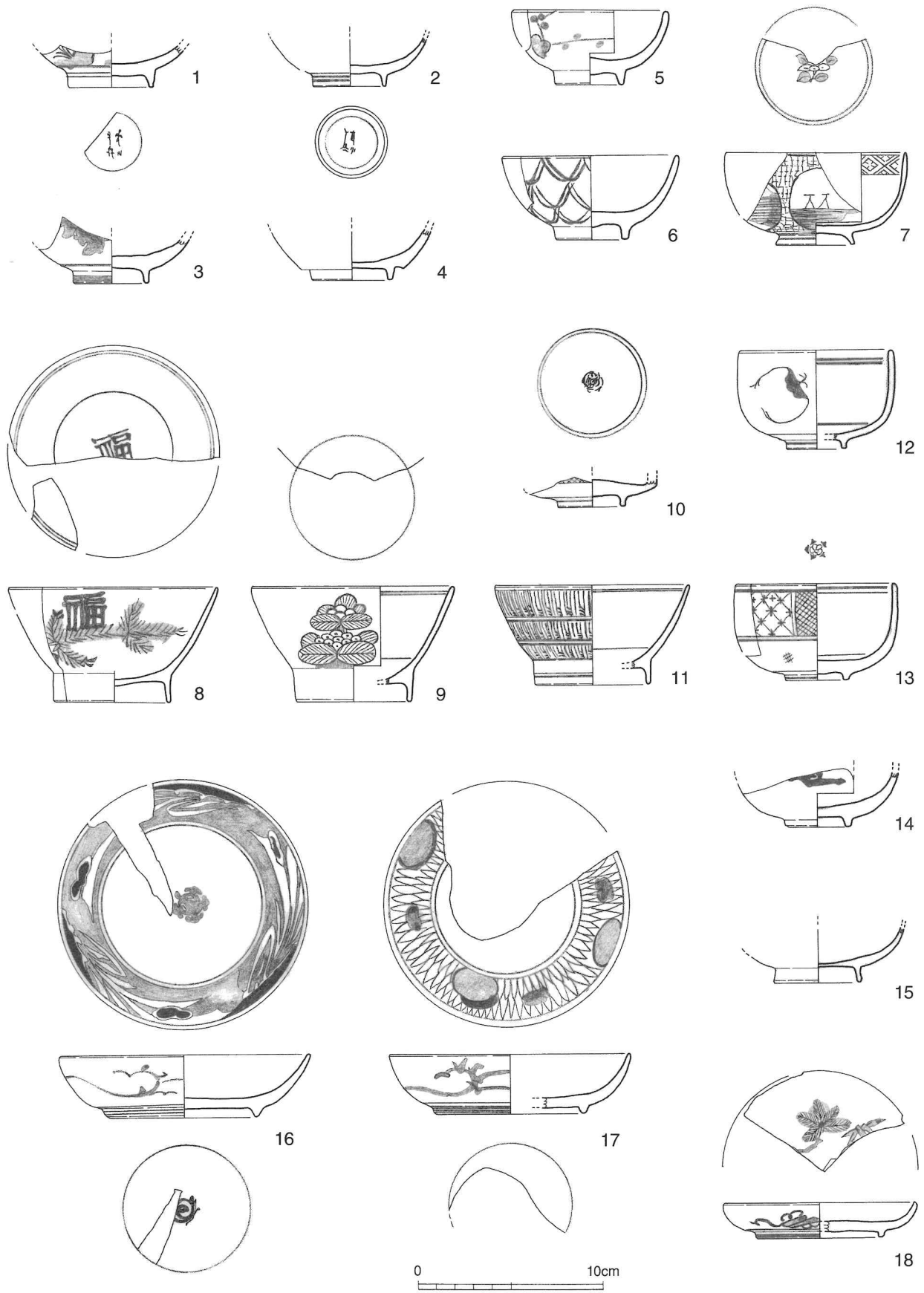
第4表 3号瓦溜出土陶磁器・土器観察表

法量（ ）は反転復原径

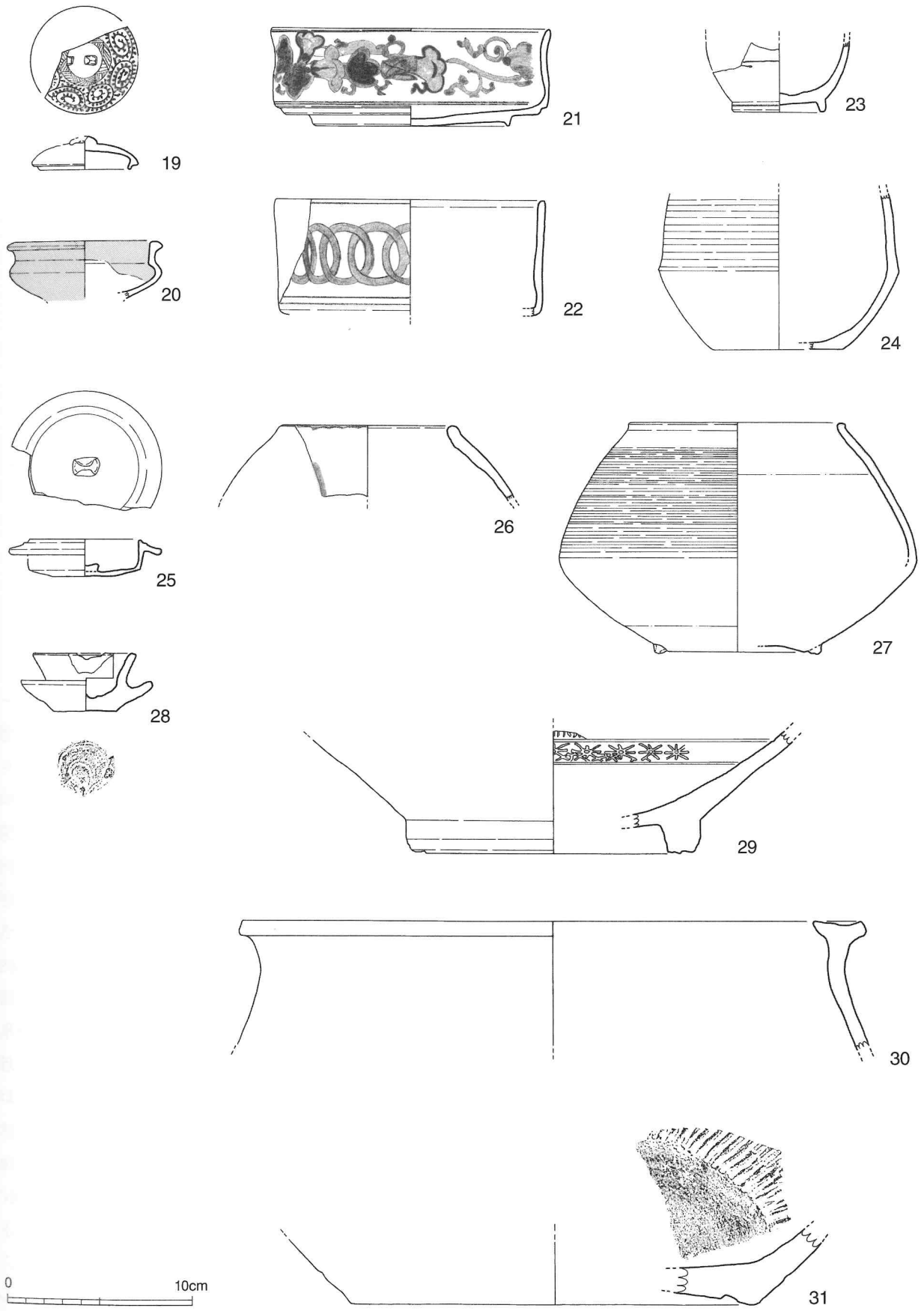
番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
1	磁器碗	—	—	(3.8)	ロク口	染付・透明	外:鶴 見込:不明			肥前	1780～1810年代		32
2	陶器碗	(8.3)	5.0	3.8	ロク口	染付・白土			鉄泥	関西 or九州	19C代		
3	陶器碗	—	—	(3.1)	ロク口	透明			露胎	関西	18C後半～	小杉碗	
4	磁器小杯	(6.9)	4.1	(2.8)	ロク口	染付・透明	外:剣形蓮弁			肥前	19C初頭～幕末		
5	磁器碗	—	—	3.7	ロク口	染付・透明	外:植物 見込:松竹梅門形			肥前	1820～1860年代	端反碗	
6	磁器蓋	(9.9)	2.8	3.9	ロク口	染付・透明	外:牡丹		銘あり	肥前	幕末	コバルト	
7	磁器皿	(9.7)	1.4	(5.7)	ロク口	染付・透明	内:植物			瀬戸美濃	幕末～明治前半	コバルト	
8	磁器蓋物	—	—	(5.4)	ロク口	白磁?				肥前	17C末～18C前半		
9	磁器瓶	—	—	(5.2)	ロク口	染付・透明	外:唐草			肥前	18C前半		
10	陶器瓶	—	—	(7.0)	ロク口					備前系	18C～19C		
11	磁器紅皿	(5.8)	1.4	(1.2)	型打	白磁	外:蛸唐草		露胎	肥前	幕末～明治前半		
12	陶器土瓶	(9.9)	—	—	ロク口	緑釉・透明				関西	19C		
13	陶器土瓶	—	—	—	ロク口	鉄釉				関西 or九州	18C後半～		
14	陶器瓶	—	—	(9.5)	ロク口	鉄釉				九州	18C		
15	陶器播鉢	—	—	—		鉄釉				肥前?	18C		
16	土師焙烙	(32.0)	—	—							19C前半～中頃		



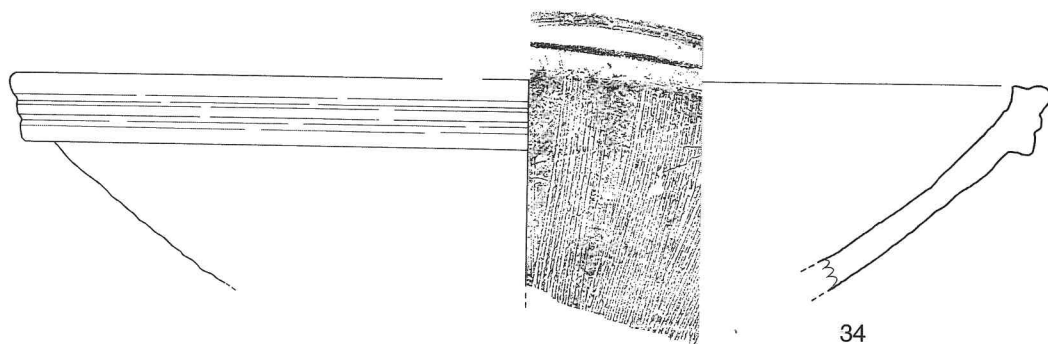
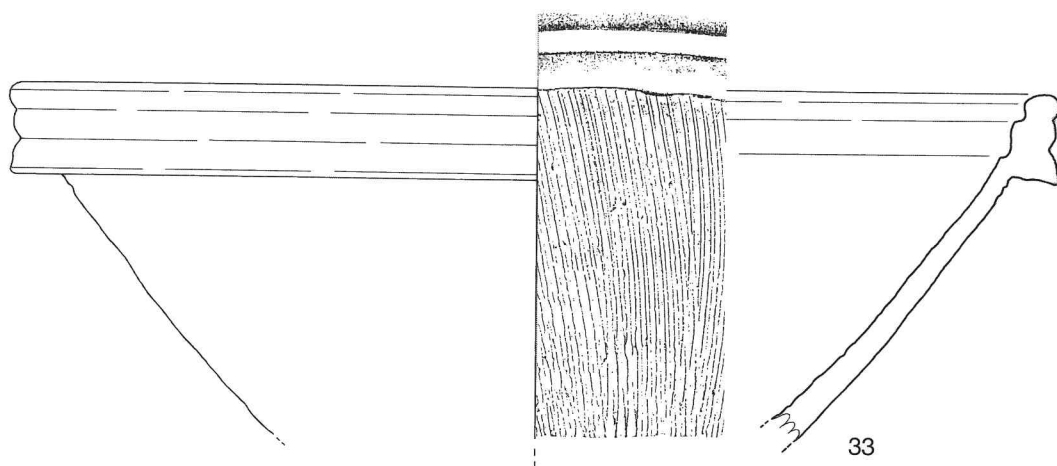
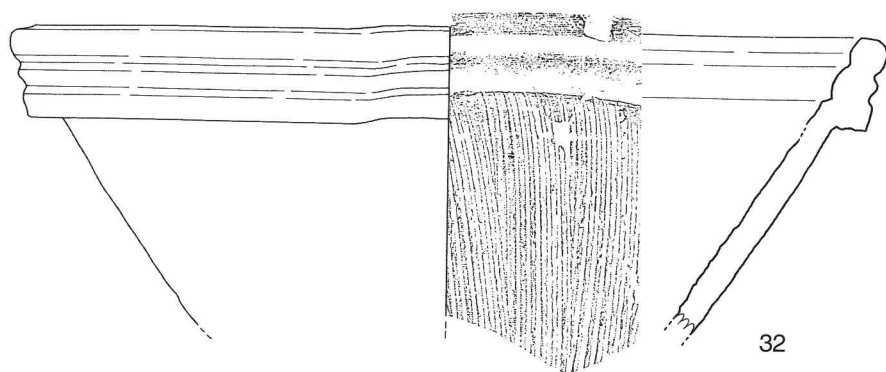
第21图 3号瓦溜出土遺物 (S=1/3)



第22図 4号瓦溜出土遺物(1) (S=1/3)

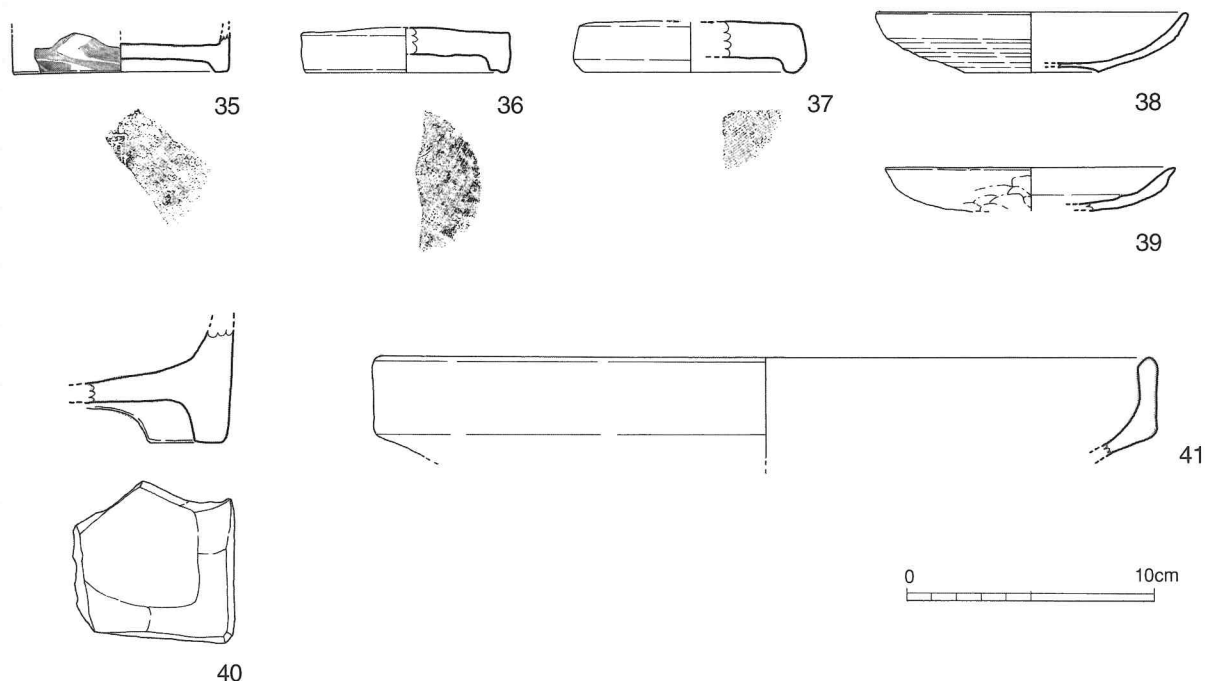


第23图 4号瓦溜出土遗物(2)(S=1/3)



0 10cm

第24图 4号瓦溜出土遺物(3) (S=1/3)



第25図 4号瓦溜出土遺物(4) (S=1/3)

#### 4号瓦溜 (第22~25図・第5表)

1~3・5~13は肥前染付磁器碗である。3の外表面文様はコンニャク印判によるもので、製作年代は18世紀前半~中頃である。5・6はいわゆる「くらわんか手」とよばれる18世紀後半の粗製の碗。7は高台が撥形に開き、腰の張った少し大振りの碗で、やはり18世紀後半に現れる。8~14は1780~1810年代に比定されるもので8・9・11は広東碗、10は筒形の湯呑碗、12・13は丸形の湯呑碗である。14は肥前系の染付磁器碗で2号瓦溜から同一形態・文様のものが出土している(第19図7)。15は18世紀末~19世紀前半の肥前白磁碗である。16~18は肥前染付磁器皿。16は体部内面の文様が墨弾き、見込みの五弁花はコンニャク印判によって描かれている。18と同一形態・文様の皿が整地層からも検出されている。(第35図160)。19は染付磁器蓋、20は青磁香炉、21・22は染付磁器段重、いずれも肥前産である。段重とは2段以上重ねて使用する蓋付きの器で、口縁部と腰部の屈曲した部分(最下段の器を除く)が露胎となる。食器として使用されたほか化粧道具にも使われたといわれている<sup>(22)</sup>。23は肥前染付磁器瓶、24は備前系陶器瓶である。25・27はそれぞれ関西系陶器土瓶蓋と身、26は九州産陶器土瓶である。28は陶器灯明皿台、底部は右回転の糸切り離して九州産と推定される。29は18世紀前半の肥前唐津系陶器大皿で見込みに砂目をもつ。内面に象嵌を施すいわゆる「三鳥手」とよばれる装飾技法を用いる。30は17世紀後半の肥前系陶器甕である。31~34は堺産陶器挿鉢である。31は底部で堀内秀樹編年Ⅲ-a 2類、32・33は白神典之編年Ⅱ型式、堀内Ⅲ-a 1類、34は白神Ⅰ型式、堀内Ⅱ-a類にそれぞれ属する<sup>(23)</sup>。35は土師質土器火容で体部外面は白土の練り込みによる装飾を施している。底部に印銘をもつが判読不能である。36・37は土師質土器焼塩壺蓋。いずれも蓋受けをもつタイプの焼塩壺に伴うもので、渡辺誠分類のB類に相当する<sup>(24)</sup>。38・39は土師質土器皿である。38は左回転のロクロ成形で、体部外面は口縁部やや下まで回転ヘラ削り、底部も回転削りによって平滑に薄く仕上げられ、焼成は堅緻で橙色を呈する。口縁端部に黒く油煙が付着することから灯明皿として使用されたと考えられる。39は手捏ねの製品で外面に指圧痕、内面体部と底部の境に段がみられる。焼成は堅緻で色調は灰白色である。40は土師質土器焜炉の脚部で平面方形を呈するタイプである。41は土師質土器焙烙で器高は浅く府内城三ノ丸遺跡のV期以降に相当する<sup>(25)</sup>。4号瓦溜出土の遺物は18世紀後半~19世紀前半代のもものが中心となる。



第5表 4号瓦溜出土陶磁器・土器観察表

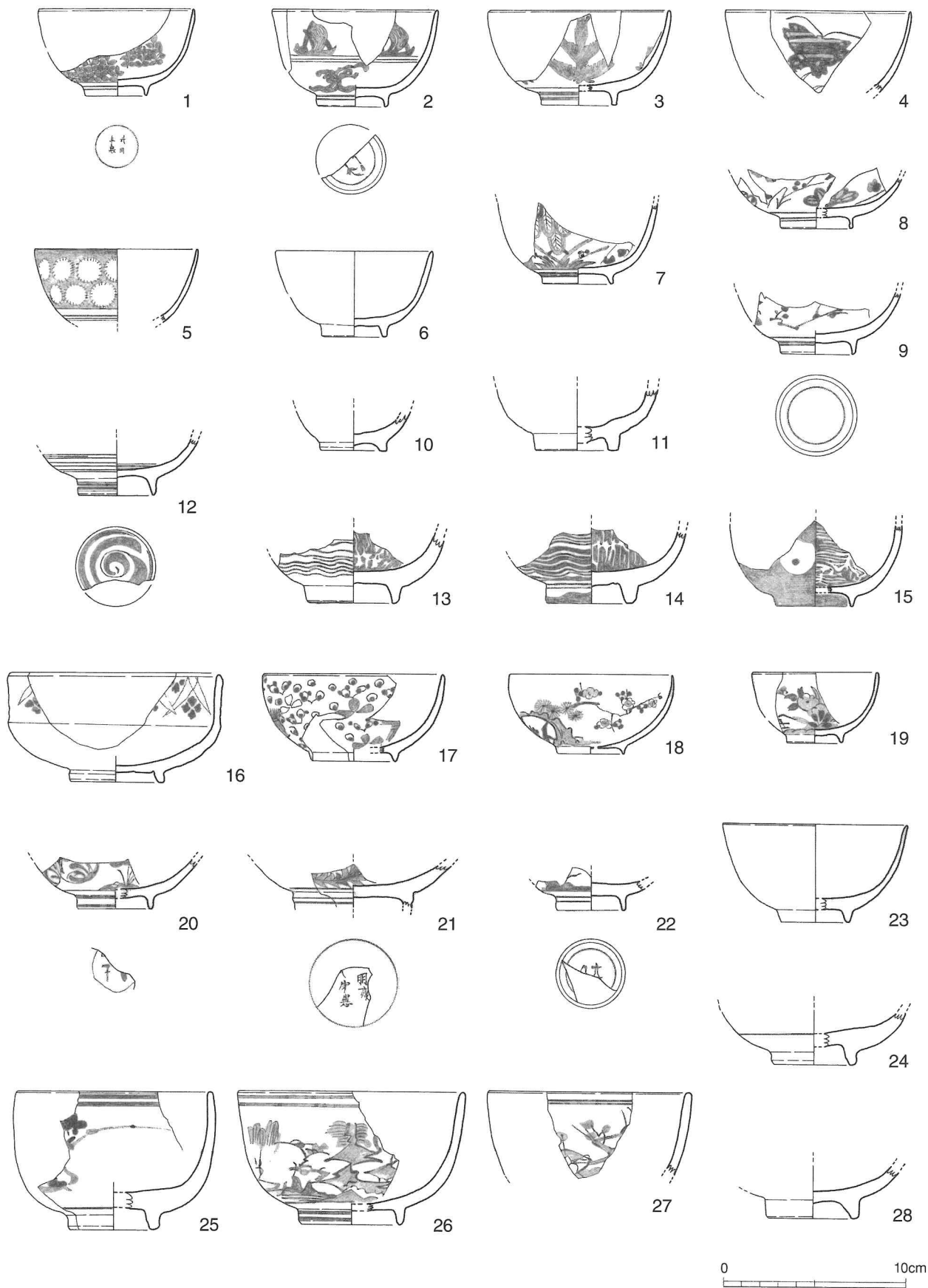
法量( )は反転復原径

番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面 内底	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
1	磁器碗	—	—	4.5	ロク口	染付・透明	外：植物		大明年製	肥前	18C前半～中頃		33
2	磁器碗	—	—	3.8	ロク口	染付・透明			大明年製 一重圈線	肥前	18C前半～中頃		
3	磁器碗	—	—	4.0	ロク口	染付・透明		コンニャク 印版		肥前	18C前半～中頃		
4	陶器碗	—	—	(4.2)	ロク口	透明				関西	18C後半～	小杉碗	
5	磁器碗	(8.3)	4.1	3.5	ロク口	染付・透明	外：梅樹			肥前	18C後半		
6	磁器碗	9.4	4.5	3.8	ロク口	染付・透明	外：二重網目			肥前	18C後半		
7	磁器碗	(9.7)	5.0	4.2	ロク口	染付・透明	内：四方襷 外：窓に網干水裂地 見込：花卉			肥前	18C後半		
8	磁器碗	11.3	6.2	6.2	ロク口	染付・透明	外：若松 「福」「寿」 見込：「福」			肥前	1780～1810年代	広東碗	
9	磁器碗	(10.8)	6.2	(6.1)	ロク口	染付・透明	外：あじさい			肥前	1780～1810年代	広東碗	
10	磁器碗	—	—	(3.6)	ロク口	染付・透明	外：斜格子 見込：五弁花				18C後半～19C初頭	筒形碗	
11	磁器碗	(10.5)	5.4	(6.1)	ロク口	染付・透明	外：梵字			肥前	1780～1810年代	広東碗	
12	磁器碗	(8.2)	5.3	(3.2)	ロク口	染付・透明	外：蝙蝠			肥前	1780～1810年代		
13	磁器碗	(8.5)	5.2	3.4	ロク口	染付・透明	外：市松網目 見込：五弁花			肥前	1780～1810年代		
14	磁器碗	—	—	3.3	ロク口	染付・透明	外：文字「道」			肥前系	1780～1810年代		
15	磁器碗	—	—	4.6	ロク口	白磁				肥前	18C末～19C前半		
16	磁器皿	13.4	3.4	7.9	ロク口	染付・透明	内：草に露 外：連続唐草 見込：五弁花	墨弾き コンニャク印版	渦福 一重圈線	肥前	18C前半～中頃		
17	磁器皿	12.9	3.2	7.9	ロク口	染付・透明	内：一重網目 外：連続唐草		一重圈線	肥前	18C前半～中頃		
18	磁器皿	(10.3)	5.9	(6.7)	ロク口	染付・透明	内：松竹 外：宝			肥前	18C中頃～末		
19	磁器蓋	(4.9)	1.8	—	ロク口	染付・透明	外：蛸唐草			肥前	18C後半～19C初		34
20	磁器香炉	(7.8)	—	—	ロク口	青磁				肥前	18C代		
21	磁器段重	(14.8)	5.2	(10.2)	ロク口	染付・透明	外：朝顔			肥前	18C末～幕末		
22	磁器段重	(14.4)	—	—	ロク口	染付・透明	外：輪繁			肥前	18C末～幕末		
23	磁器瓶	—	—	4.8	ロク口	染付・透明				肥前	17C後半～18C代		
24	陶器瓶	—	—	(7.0)	ロク口					備前系	18C～19C		
25	陶器蓋	(6.0)	2.0	2.3	ロク口	透明				関西	18C後半～		
26	陶器土瓶	(9.2)	—	—		灰釉・鉄泥				九州	19C代		
27	陶器土瓶	(11.4)	12.2	7.2		透明			露胎	関西	18C後半～		
28	陶器 灯皿台	5.2	3.1	3.4		鉄釉			糸切り (右)	九州			
29	陶器皿	—	—	(15.3)		白土・鉄釉		象嵌		肥前	18C前半		
30	陶器甕	(33.4)	—	—		鉄釉				肥前系	17C後半		

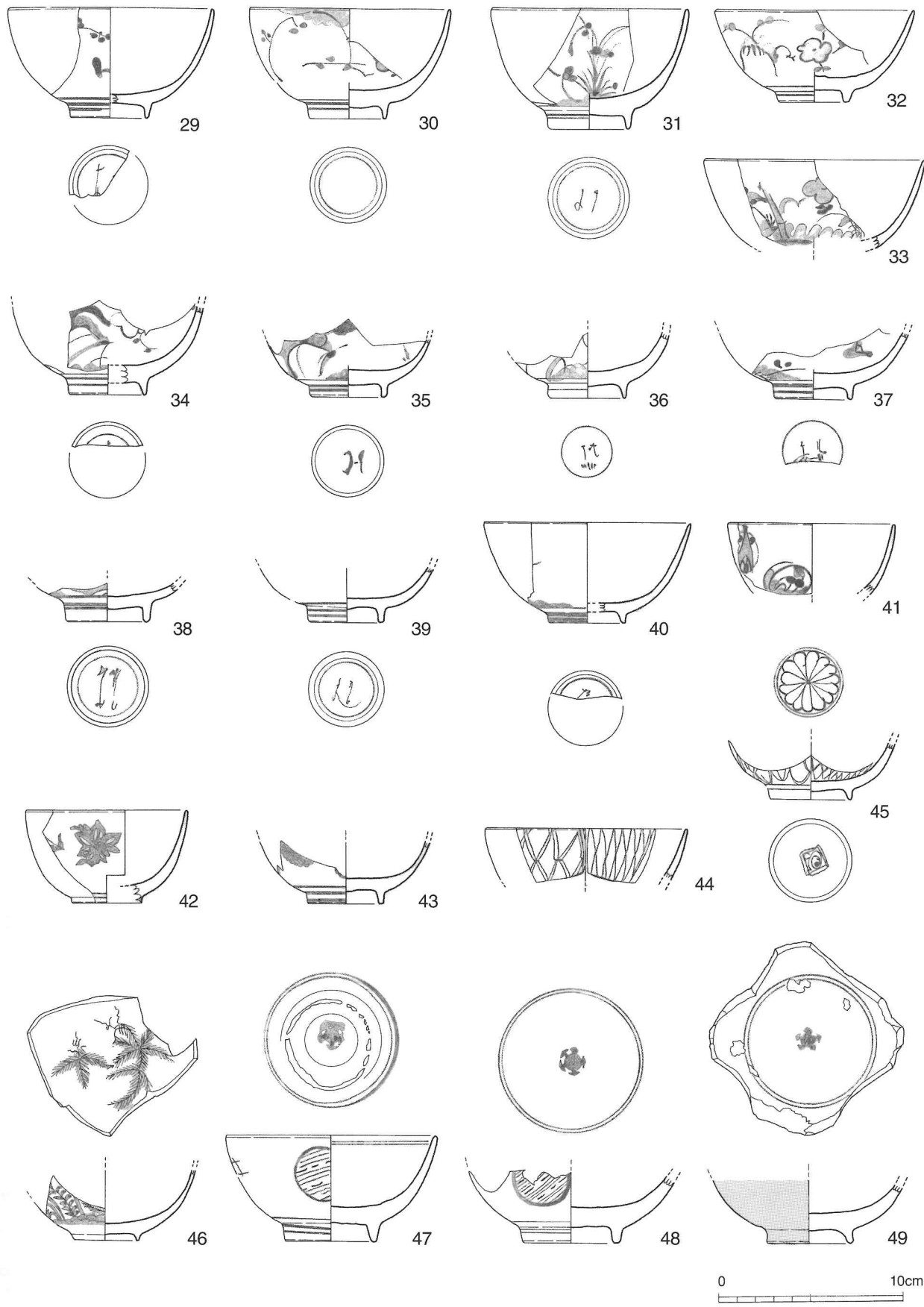
番号	器種	法量 (cm)			成形	装飾			底面	製作地	製作年代	備考	掲載頁
		口径	器高	底径		絵付・釉薬	文様	装飾特徴					
31	陶器播鉢	-	-	(22.0)	ロクロ					堺			
32	陶器播鉢	(33.2)	-	-	ロクロ					堺	18C後半		35
33	陶器播鉢	(50.4)	-	-	ロクロ					堺	18C後半		
34	陶器播鉢	-	-	-	ロクロ					堺	17C末~18C前半		
35	土師火容	-	-	(8.6)	ロクロ			練り込み (白土 赤土)	刻印		ミガキ		36
36	土師焼塩壺蓋	(8.0)	1.8	-	板作り 内面布目								
37	土師焼塩壺蓋	(8.4)	2.0	-	板作り 内面布目					堺			
38	土師小皿	(12.3)	2.4	(5.4)	ロクロ								
39	土師小皿	(11.6)	-	-	手捏ね								
40	土師焜炉	-	-	-									
41	土師焙烙	(31.0)	-	-	ロクロ						18C末~19C前半		

#### 整地層 (第26~45図・第6表)

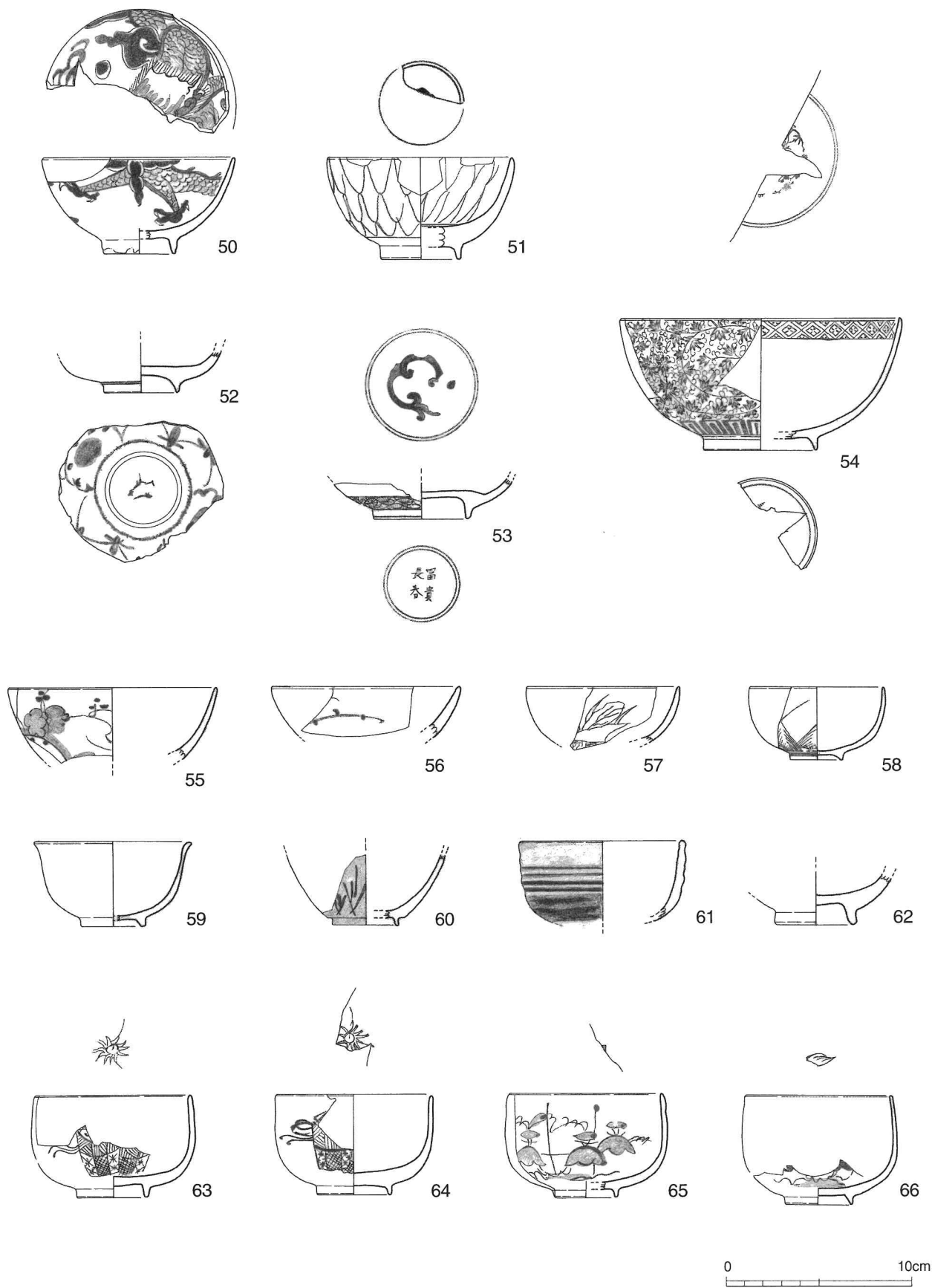
1~5・7~9は肥前染付磁器碗。1は器壁が薄く高台の作りもシャープで整地層出土磁器碗の中では最も古いタイプである。年代は1650~1680年代と推定される。2~4の外表面文様はコンニャク印判によるものであるが、いずれも比較的丁寧な作行である。2はコンニャク印判としてはめずらしい帆船文様である。8・9はコンニャク印判と手描きを併用した文様の碗。6は1690~18世紀前半の肥前白磁碗である。10・11は肥前灰釉陶器碗で10は16世紀末~17世紀初頭の胎土目積段階、11は1600~1630年代の砂目積段階の製品である。12~14は肥前唐津系陶器刷毛目碗、15は内面刷毛目、外面虫手の陶器碗である。12のみ若干古く17世紀後半~18世紀初頭に比定され他は17世紀末~18世紀前半の所産である。16は関西系陶器碗で製作年代は17世紀末~18世紀前半である。17~22は染付磁器碗、23は白磁碗、24~27は陶胎染付碗。いずれも肥前産で製作年代は18世紀前半である。21の外表面の文様は主として輸出用の大皿などに描かれた唐草文である<sup>(26)</sup>。28は肥前京焼風陶器碗で、いわゆる「呉器手碗」とよばれる形態を呈する。29~45は18世紀前半~中頃に比定される肥前染付磁器碗。29~39はいわゆる「くらわんか手」の中では古いタイプに属し、高台内に一重圏線を廻らせ「大明年製」銘をもつものが多い。42・43の外表面文様もコンニャク印判によるものであるが、前述した2~4と比較するとかなり雑な印象である。46は18世紀中頃~末の肥前染付磁器碗である。47・48・50~53・55・56・58は肥前染付磁器碗、49は青磁染付碗、57は色絵磁器碗でいずれも製作年代は18世紀後半である。47~49は見込みにコンニャク印判による五弁花をもつ。53は明末に盛行したいわゆる「饅頭心碗」を模して作ったと考えられるもので高台内に「富貴長春」銘をもつ。54は18世紀末~19世紀前半の肥前染付磁器の大型碗である。59・60は関西系陶器碗で18世紀後半以降の製品。61は瀬戸美濃産、62は福岡産陶器碗で18世紀代に比定される。63~73は肥前染付磁器碗である。63~69は丸形湯呑碗、70は広東碗、73は筒形湯呑碗で製作年代は1780~1810年代。63・64・68は同一形態・文様で他にも同様の破片が多数出土している。74~79・83は1820~1860年代の染付磁器端反碗で、75~78・83は肥前産、79は瀬戸美濃産である。80~82は肥前染付磁器小丸碗。製作年代は端反碗と同じ1820~1860年代で前代に盛行する丸形碗・筒形碗に続く形態の湯呑碗である。84は18世紀末~幕末の肥前白磁碗、85・86は端反碗の形態を踏襲するものであるが器壁が薄い幕末以降の肥前産である。87は19世紀代の萩焼陶器碗、88はクロム青磁の碗で明治前半の製品。89は高台内に「岐712」と陽刻されており、これは戦争中の経済統制のもとで陶磁器生産業者に与えられた統制番号である。「岐」は岐阜地方を示すものである。90は肥前染付磁器碗で高台内に山光製と手



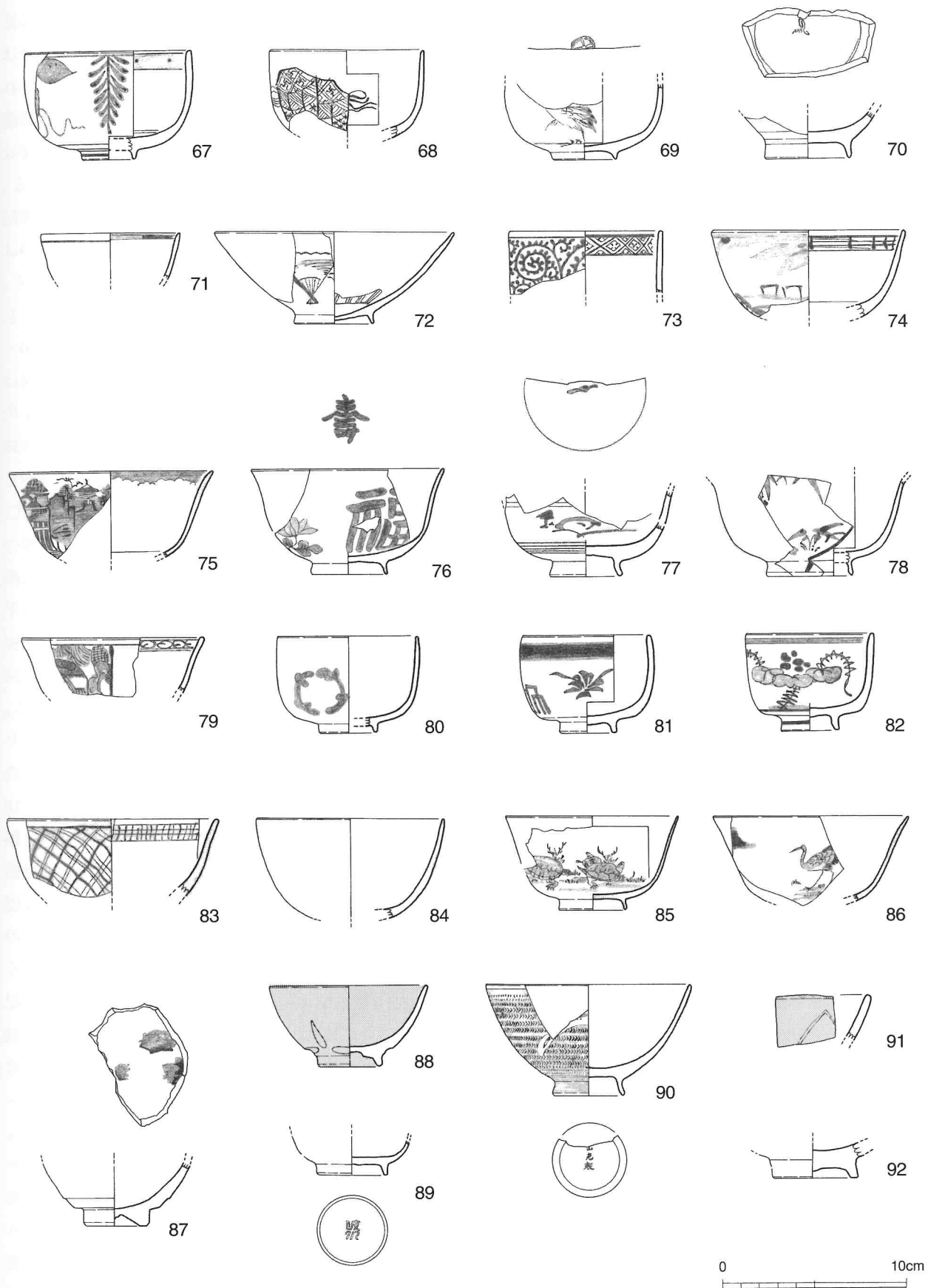
第26图 整地層出土遺物 (1) (S=1/30)



第27図 整地層出土遺物 (2) (S=1/3)



第28図 整地層出土遺物 (3) (S=1/3)



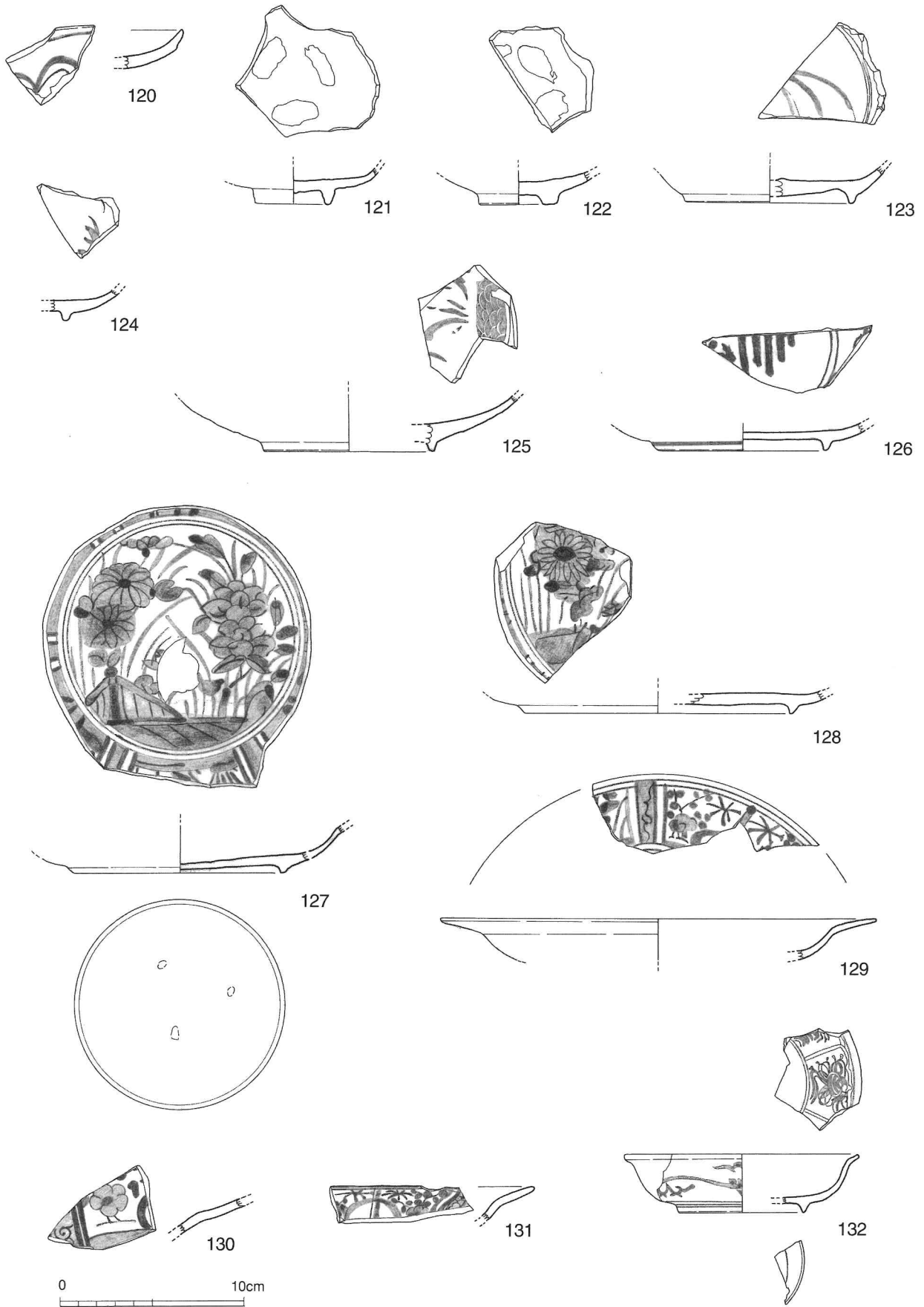
第29図 整地層出土遺物 (4) (S=1/3)

描きされている。91は14世紀末～15世紀中頃の中国製青磁碗である。92は暗緑色を呈する灰釉陶器碗で胎土・釉調などから波越焼と推定されるものである。波越焼とは佐伯市波越に所在する陶器窯で、製品の特徴から16世紀末～17世紀初頭のいわゆる初期唐津と併行する時期に操業された窯であると考えられている<sup>(27)</sup>。言い伝えでは初代佐伯藩主毛利高政が文禄・慶長の役（1592～1598）で出兵したおり朝鮮から連れ帰った陶工によって築かれたといわれている。93～95は肥前染付磁器蓋、93・94は広東碗、95は端反碗に対応する蓋である。96は瀬戸美濃産色絵磁器蓋で明治以降の製品である。97～101・103・106・107・109～111は染付磁器猪口、102・105・108は白磁猪口でいずれも肥前産。99の外表面文様は型紙摺、103はコンニャク印判の技法を用いて絵付けされている。106は薄手で外面文様も精緻に描かれた上手のもので、1670～1680年代に比定される。猪口の製作年代は17世紀後半～18世紀中頃の中に納まりこれ以降のものは認められなかった。112～116・118は肥前染付磁器小杯、119は肥前白磁小杯である。114・115・119は非常に薄い器壁をもついわゆる薄手酒杯とよばれるものと考えられる。製作年代は19世紀以降である。117は型打成形の白磁紅皿で年代は17世紀末～18世紀中頃である。118も紅皿として使用された可能性がある。120～122は肥前唐津陶器皿。120は内面に鉄絵が施されたいわゆる絵唐津で1590～1610年代のもの。121・122は見込みに砂目を有し1600～1630年代に比定される。123は1630～1660年代、124は1630～1640年代の初期伊万里である。125は最初期の色絵である古九谷様式の肥前色絵磁器皿で1640～1650年代に比定される。126は肥前染付磁器皿で見込みに寿字、体部内面に鳳凰文を描いたデザインである。年代は1655～1670年代である。127～132は17世紀末～18世紀初頭の肥前染付芙蓉手皿である。127・128の体部内面は129と同じ竹文と草花文を交互に配した図柄になると考えられる。133～136は肥前染付磁器皿で133は1660～1690年代、134・135は17世紀末～18世紀初頭、136は17世紀後半に比定される。137・138は肥前染付磁器変形小皿で内面の絵付けにはそれぞれコンニャク印判・型紙摺の技法を用い、両者とも口唇部に口紅が施されている。137は糸切細工とよばれる型打成形法で作られた皿である<sup>(28)</sup>。138は高台部分はロクロ、本体部分は型打によって成形され平面形は八角形になると推定される。139は17世紀後半～18世紀前半の青磁染付の皿である。140は1690～18世紀初頭の肥前染付磁器皿で同一規格の皿が1号瓦溜（第11図39）でも出土している。141は肥前染付磁器鉢、142は同皿で製作年代は1690～18世紀前半である。143も肥前染付磁器皿で見込みの部分に型押しで龍が陽刻されている。1690～1740年代の製品。144・145・148～153は18世紀前半の肥前染付磁器皿である。144・145は墨弾きにより内面の文様が描かれている。151・153は口径が25cm以上の大皿。146・147は肥前京焼風陶器皿。146は内面に鉄絵で山水文が描かれ、高台内に「清水」の印銘をもつ。年代は146がやや古く17世紀後半～18世紀初頭、147は18世紀前半の所産である。154～157はやはり肥前染付磁器皿で18世紀前半～中頃のもの。158は見込みを蛇の目釉剥ぎした粗製の肥前白磁皿、159は瀬戸美濃産陶器皿でいずれも18世紀代に比定される。160・162は肥前染付磁器皿で160は同一規格のものが4号瓦溜でも検出された。161は肥前青磁染付皿、163は肥前または福岡産の陶器皿で見込みを蛇の目釉剥ぎし、高台豊付にアルミナを塗布する。164は型打成形の肥前青磁変形小皿で明治以降の製品。165・166は肥前染付磁器大皿で、年代は順に18世紀末～幕末、1820～1860年代に比定される。166のようなタイプの皿は佐賀県塩田町の志田窯の製品にみられる<sup>(29)</sup>。167も肥前染付磁器皿で、年代は18世紀末～19世紀前半である。168～172は肥前唐津系陶器鉢である。168・171は刷毛目装飾、169は白化粧土の上から鉄釉と緑釉を掛けた二彩手、170は象嵌を施した三島手である。168～170・172は17世紀後半～18世紀前半、171は18世紀前半の製品。173～174は肥前唐津系陶器片口。173の見込みには胎土目がみられる。176は肥前色絵磁器蓋177～179・181・182は肥前染付磁器蓋である。178が碗蓋である以外は蓋物もしくは段重に対応すると考えられる。180は関西系、184は肥前産の陶器蓋である。183は15世紀代の中国龍泉窯系の青磁蓋である。183・184は形態から壺類の蓋と推定される。185・186は同一固体と考えられる肥前青磁蓋物である。186の高台内は蛇の目状に釉剥ぎされその部分に鉄泥を施す。17世紀末～18世紀初頭の製品である。187～189は肥前染付磁器蓋物。それぞれの年代は187が18世紀代、188が18世紀後半～19世紀初頭、189が1690～18世紀前半に比定される。190・191は肥前染付磁器合子蓋、192は肥前瑠璃釉磁器合子である。190は肥前産の葉盒で欠損のため全体が不明であるが、外面の文字は「肥後 大□ 一処入 烏犀円」であると推定される。年代は19世紀前半代。烏犀円とは漢方薬の名

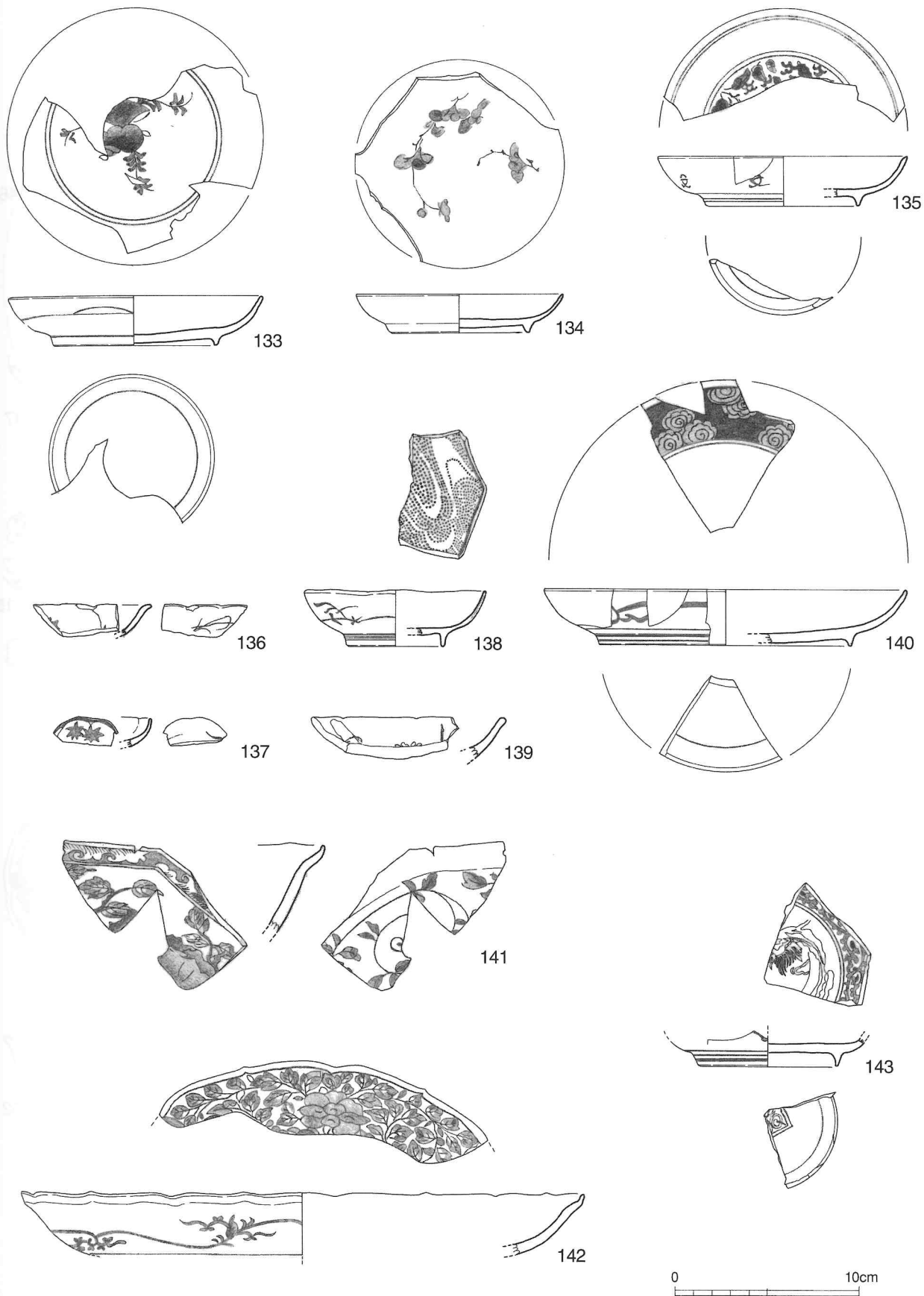


第30图 整地層出土遺物 (5) (S=1/3)

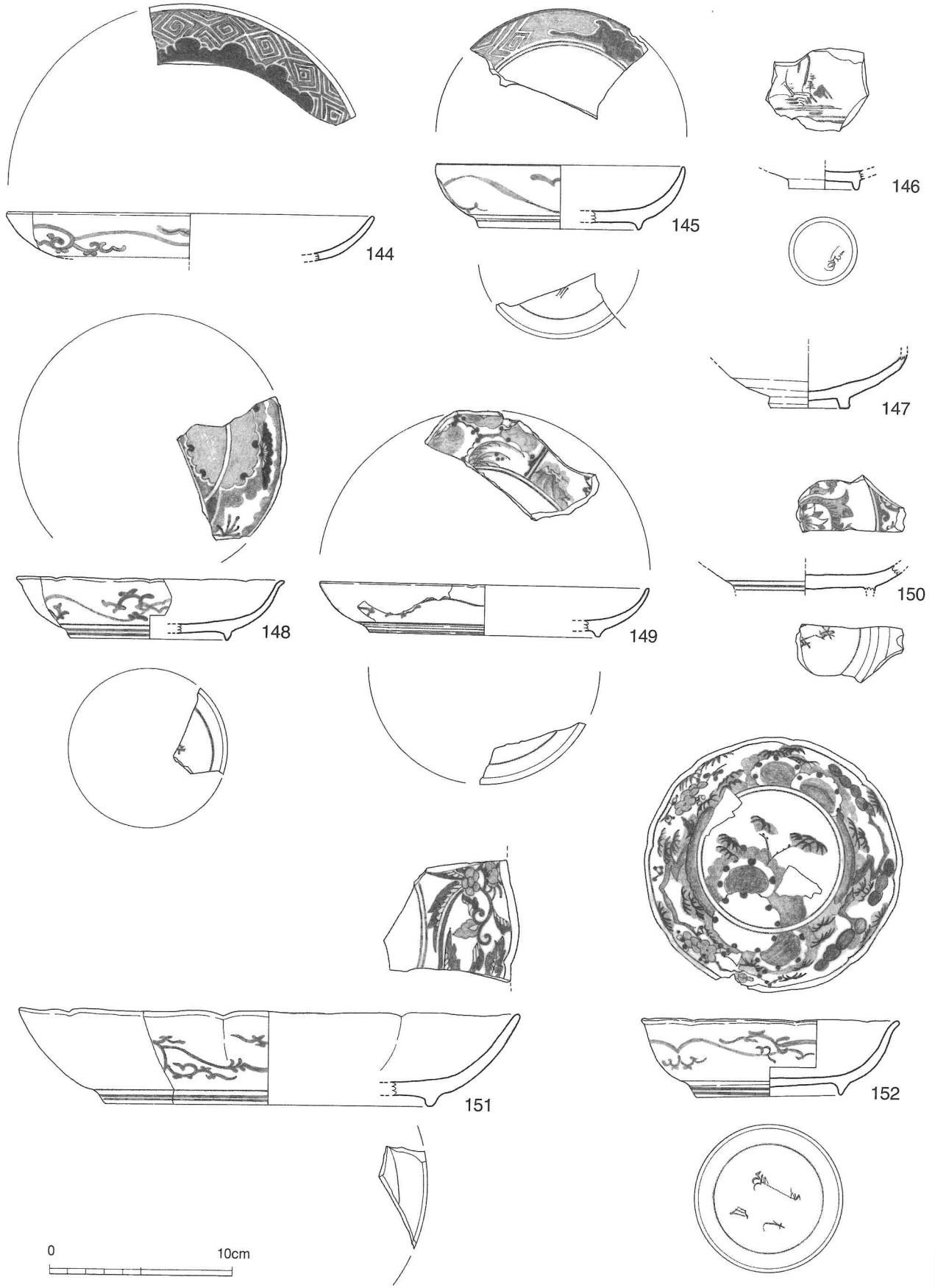




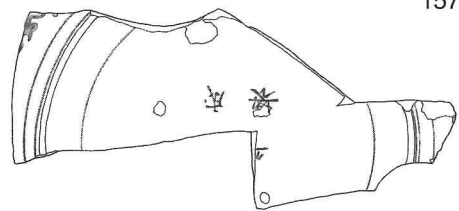
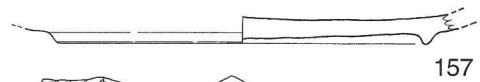
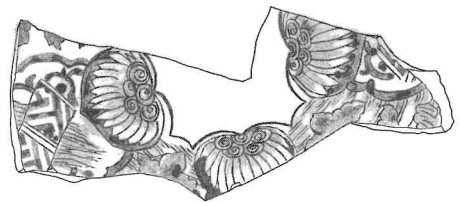
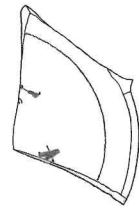
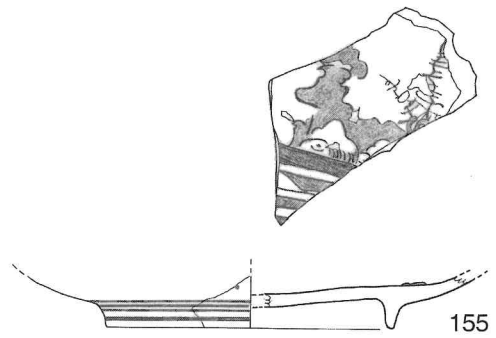
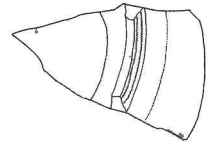
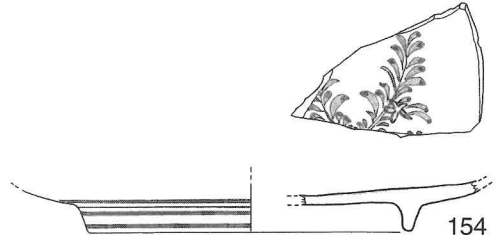
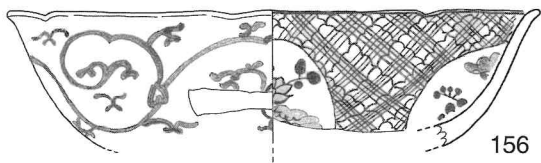
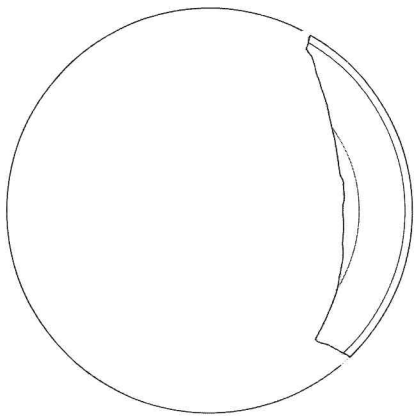
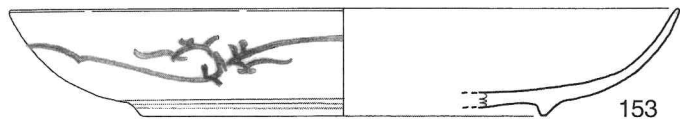
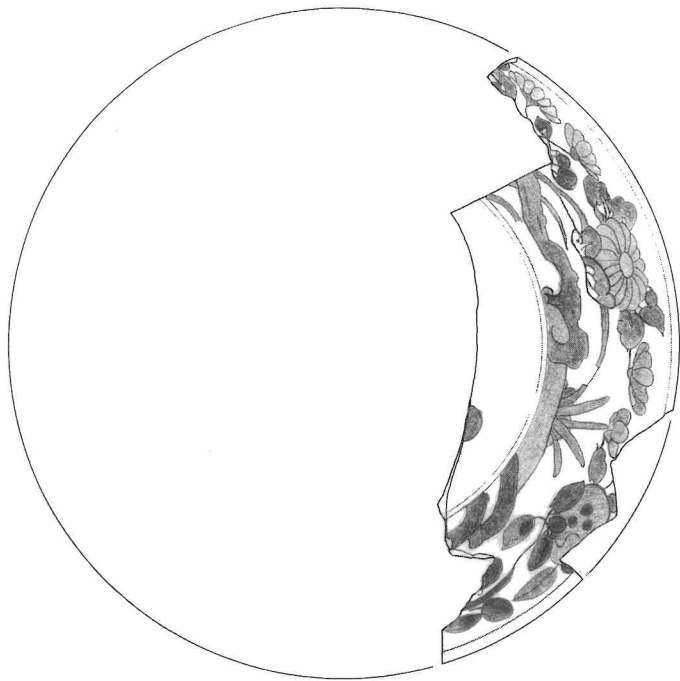
第31図 整地層出土遺物 (6) (S=1/3)



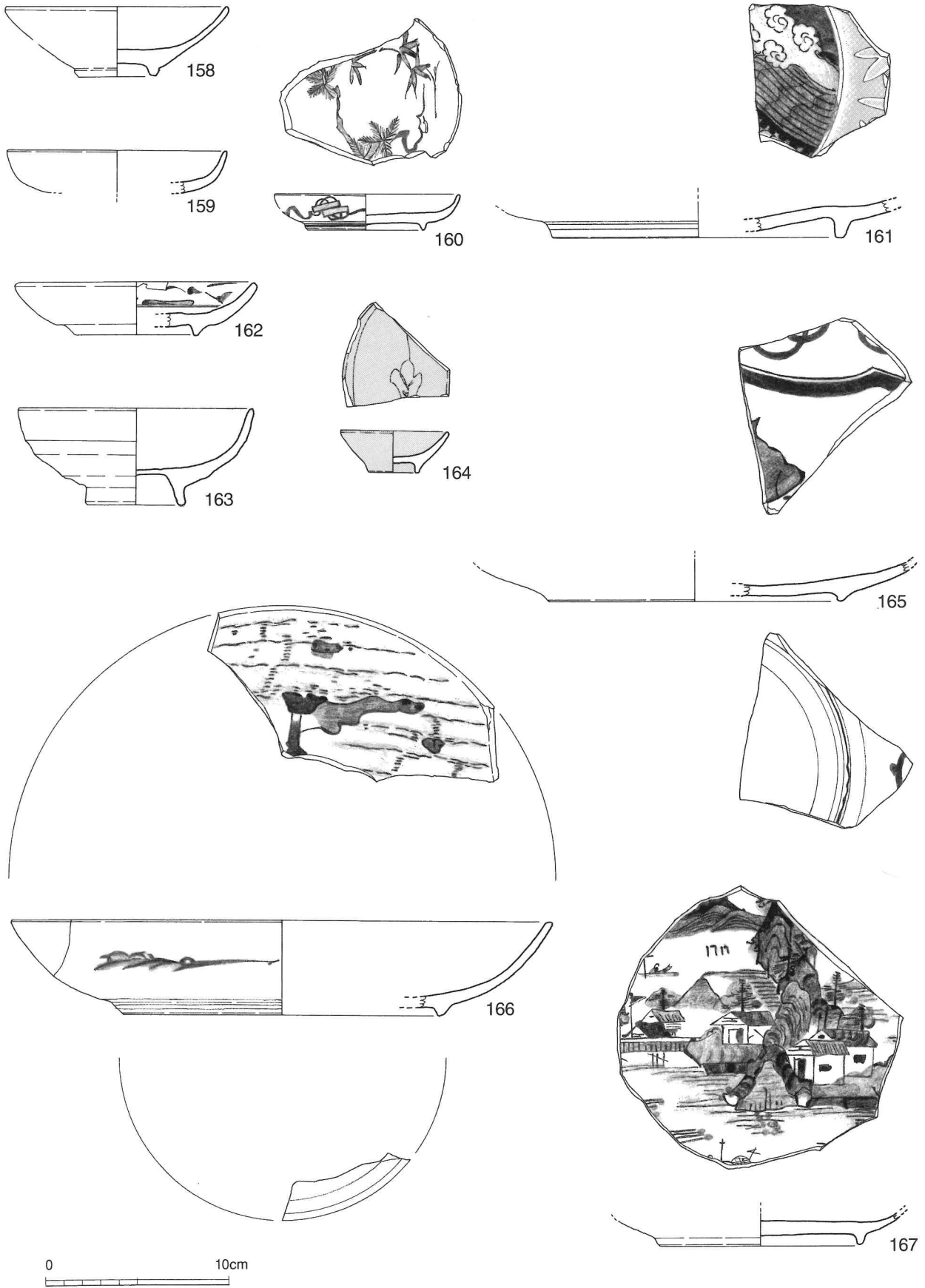
第32図 整地層出土遺物 (7) (S=1/3)



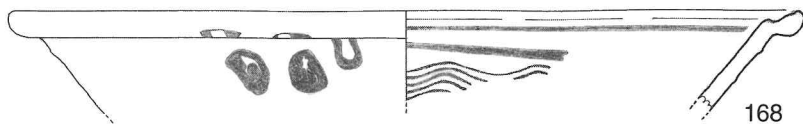
第33図 整地層出土遺物 (8) (S=1/3)



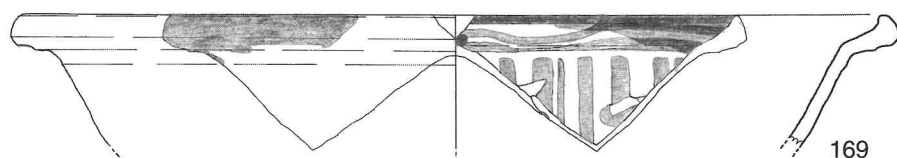
第34図 整地層出土遺物 (9) (S=1/3)



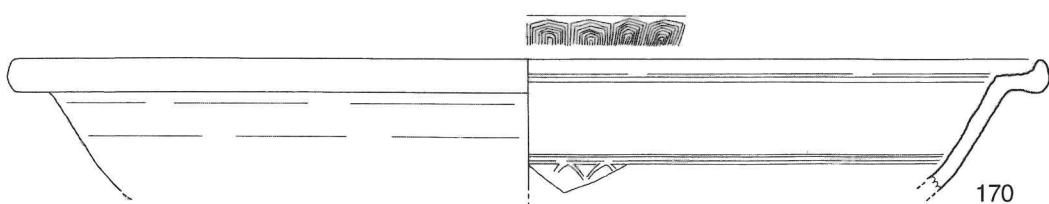
第35図 整地層出土遺物 (10) (S=1/3)



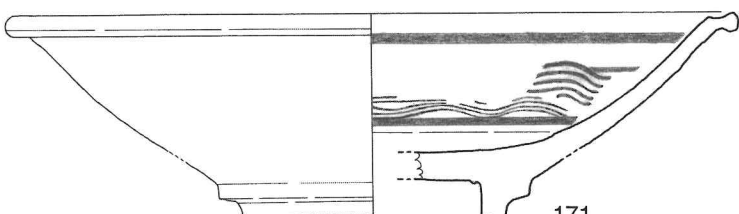
168



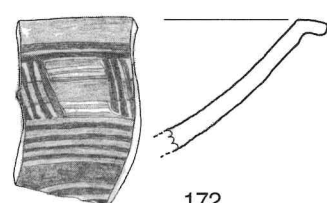
169



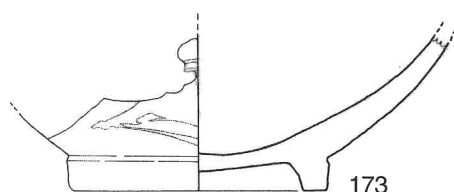
170



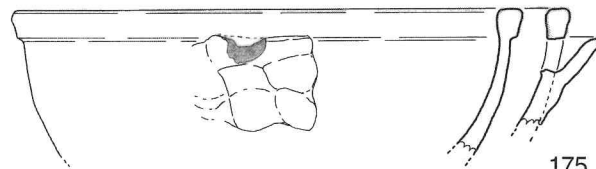
171



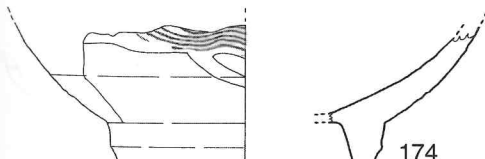
172



173



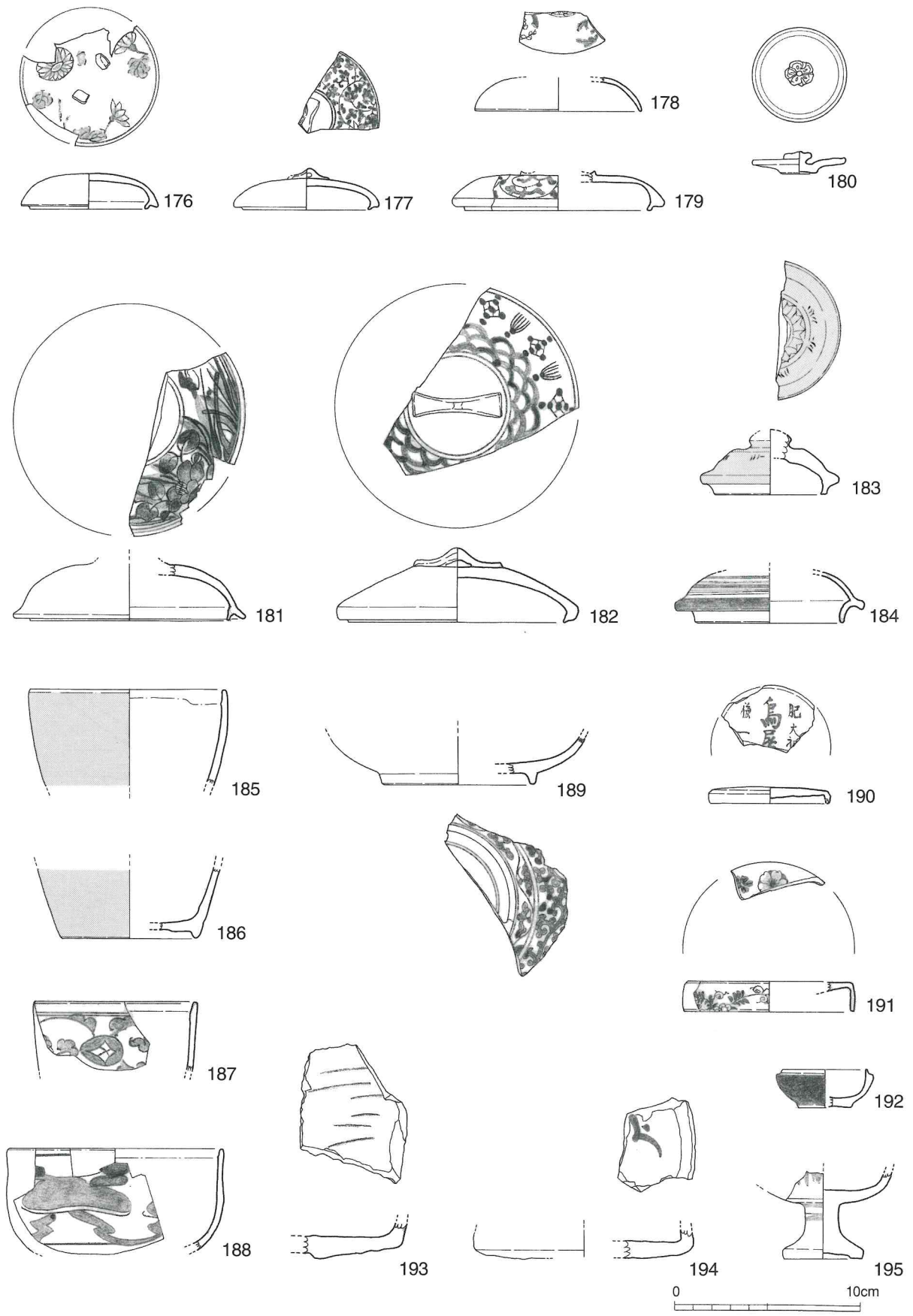
175



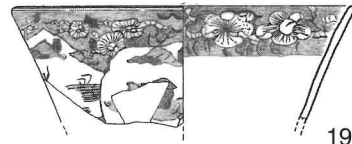
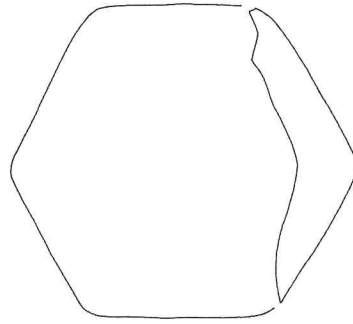
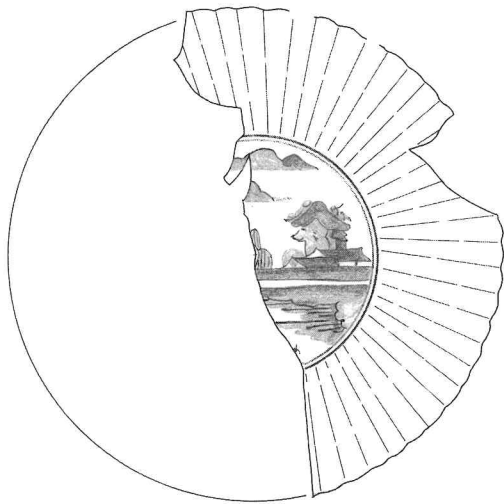
174



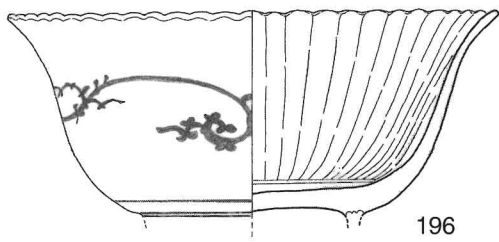
第36図 整地層出土遺物 (11) (S=1/3)



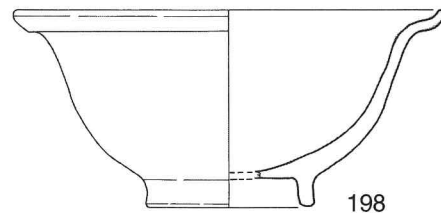
第37図 整地層出土遺物 (12) (S=1/3)



197



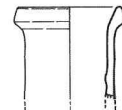
196



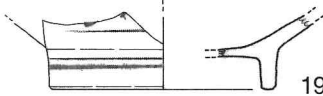
198



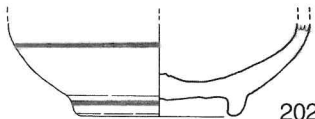
200



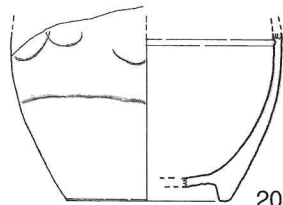
201



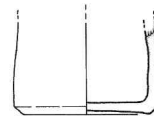
199



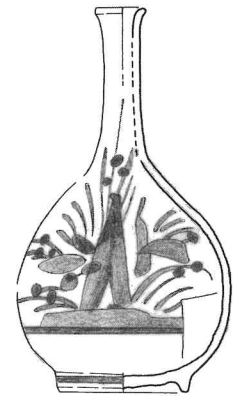
202



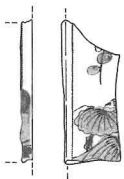
203



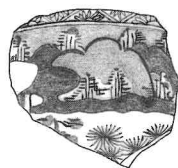
204



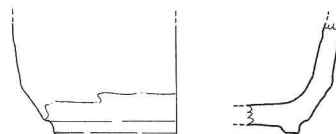
205



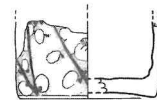
206



207



208



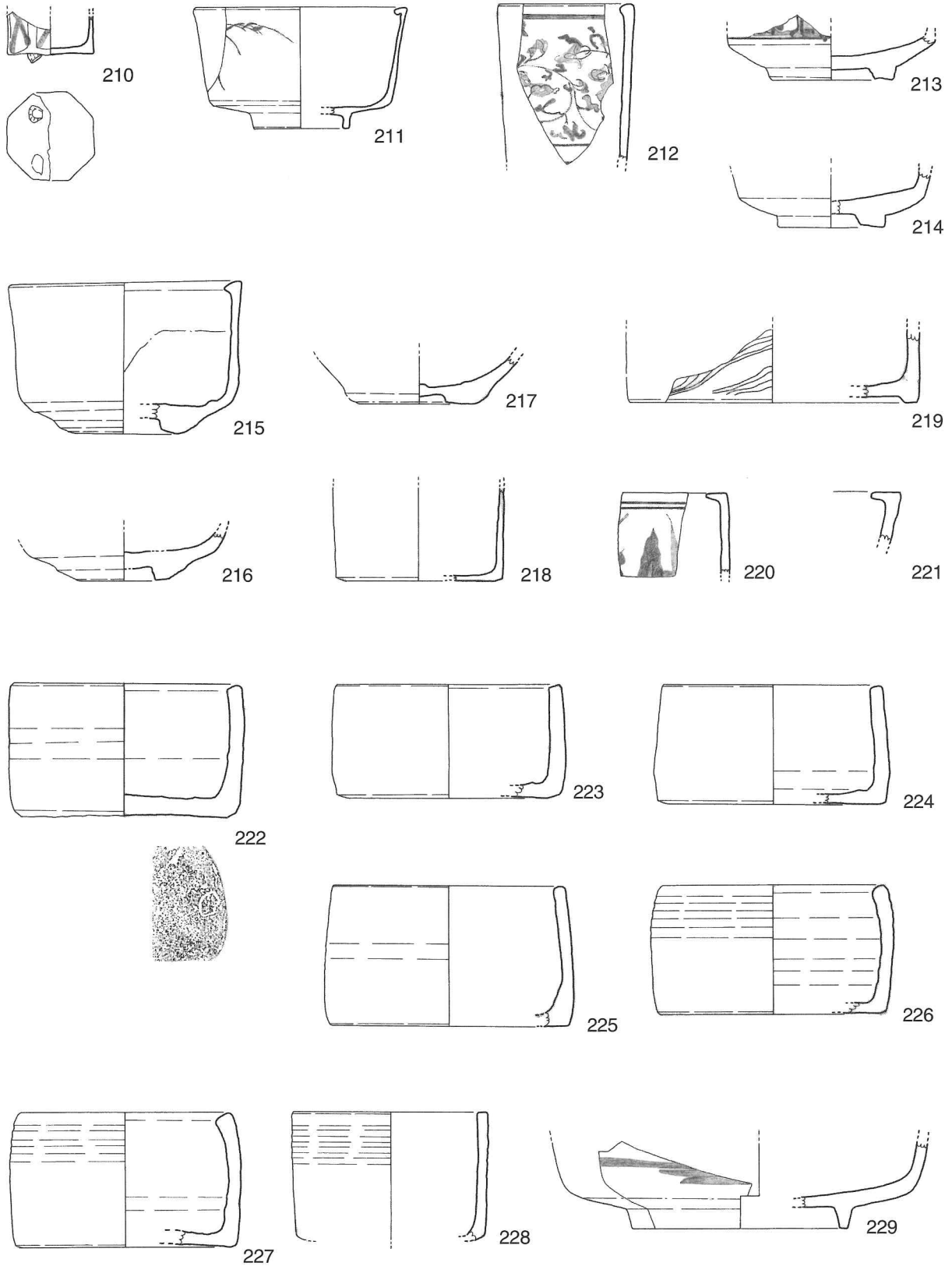
209



第38図 整地層出土遺物 (13) (S=1/3)

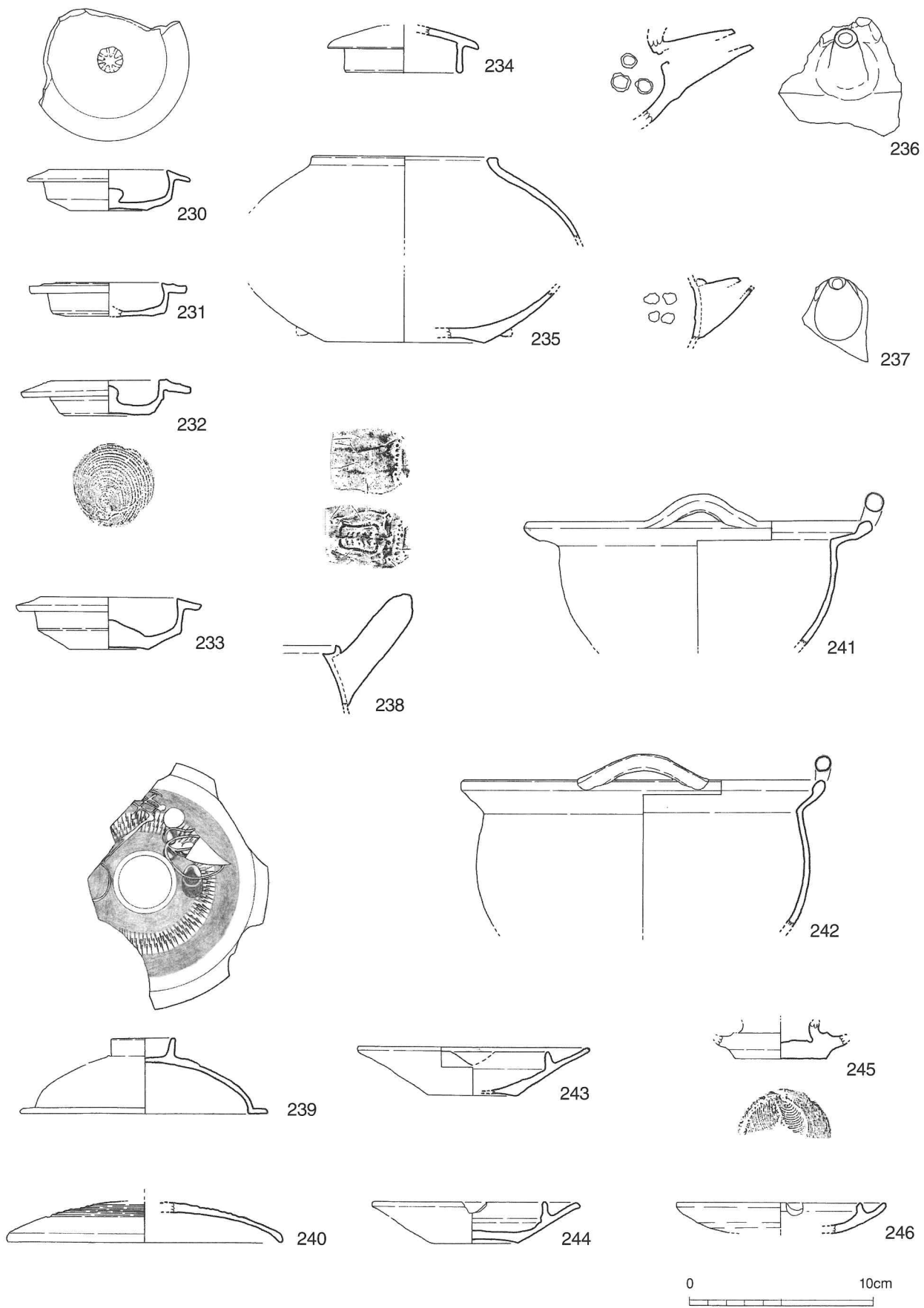


前である<sup>(30)</sup>。193・194は志野染付陶器向付。表面には長石釉が掛けられ粗い貫入がはしる。16世紀末～17世紀初頭の所産である。195は18世紀代の肥前染付磁器仏飯器である。196・197・199は肥前染付磁器鉢で年代は順に18世紀中頃～1780年代、19世紀初頭～幕末、18世紀後半～19世紀初頭に比定される。197の平面形は六角形を呈する。198は関西系陶器鉢で見込みに3足ハマ痕が残る。18世紀後半～19世紀初頭の製品である。200は焼き締め陶器瓶の口縁部で備前産と考えられるものである。201～203・205は肥前染付磁器瓶。202は17世紀後半、203は初期伊万里で1630～1640年代、201・205は18世紀後半以降の製品である。204は九州産陶器瓶または蓋物である。206・207は肥前染付磁器角瓶で同一固体の可能性のあるものである。年代は18世紀前半～中頃。208は瀬戸美濃産陶器瓶、209は関西系陶器銚子である。210は型打成形の肥前染付磁器八角香炉。外面には地文様として紗綾形文が印刻されその上から襷文が染付されている。17世紀末～18世紀初頭の所産である。211は17世紀末～18世紀前半の京焼風陶器香炉、212は18世紀前半の染付磁器香炉でいずれも肥前産である。213～228は火容と考えられるものである。213～217は肥前産火容で213・214は18世紀前半の陶胎染付、215～217は18世紀中頃～末の青磁である。215～217はそれぞれ高台の形態が若干異なるが、同タイプのものと考えられる。219は白土を練り込んで外面を装飾した土師質土器火容である。4号瓦溜でも類品が確認されている。221は15世紀代の中国製青磁香炉。222～228は焼き締め陶器火容である。222は底部に扇形の刻印をもつ。これと同じ刻印をもつ火容が1号瓦溜からも出土しており(第13図58)、両者は成形・形態・胎土等が非常に類似する。このことから222も備前系の製品である可能性が高い<sup>(31)</sup>。同様に223と224、226と227もそれぞれ成形・形態・胎土等が類似するもので、226・227については体部上部に一種の装飾とも考えられる沈線状のロクロ目がみられる。223～228の産地については備前系あるいは在地産であると考えられ、その中でも223と224、226と227は同一産地である可能性もある。229は肥前京焼風陶器と考えられるもので、水指または火容として使用されたと推定される。230～234は陶器土瓶蓋である。いずれも18世紀後半以降の製品で産地は関西あるいは九州である。232は底部に右回転の糸切り痕が残る。235・236は陶器土瓶、237は陶器急須である。235は九州産、237は関西産で19世紀以降の製品。238は陶器行平鍋の把手で上面に型押しで軍配が陽刻されている。239・240は同じく陶器行平鍋の蓋で239は外面に飛びガンナとイッチン掛けによって装飾されている。241・242は陶器鍋で九州あるいは関西産のものである。243・244・246は陶器灯明受皿で243・244は関西産、246は素焼きの製品で九州産と考えられる。245は残存部が底部のみのため全体の形状が不明であるが、おそらく焼き締め陶器盃台と推定される。底部は右回転の糸切り離し。238～246の製作年代は18世紀後半以降である。247は福岡産陶器甕で内面にタタキの痕がみられる。年代は16世紀末～17世紀初頭に比定される。248は福岡あるいは肥前産・249は関西産の陶器甕でいずれも18世紀以降の製品。250・251は18世紀後半～19世紀の瀬戸美濃産陶器火鉢である。252は肥前染付磁器水滴で、型打ちにより菊花が陰刻されている。18世紀中頃～19世紀前半に比定される。253は18世紀～幕末の肥前白磁根付で七福神の福祿寿を模したものである。254・255・256は肥前色絵磁器人形である。いずれも小破片であるため全体の形状は不明であるが、254・255は体部に穿孔があり水滴として使用されたものと推定される。製作年代は17世紀後半～18世紀前半である。257～259はガラス瓶、260はガラス瓶蓋である。いずれも明治以降の製品と考えられる。261～274は陶器播鉢である。261は16世紀代、263は17世紀初頭の備前産と推定される口縁部と底部である。262・264～269は堺産播鉢である。262・264は外面のロクロ削りを口縁部外縁帯のやや下方まで施し、264ではその上に指圧痕が廻る。内面の播目は口縁部付近で軽くナデ消されている。267は播目が見込みの中央で交差する。262・264・267は白神典之編年Ⅰ型式、堀内秀樹編年Ⅱ-a類に属し<sup>(32)</sup>、年代は18世紀前半～中頃に比定される。265・266は口縁部内面下部に段を有し、播目を口縁部付近で強くナデ消す等の特徴をもつことから、白神編年Ⅱ型式、堀内編年Ⅲ-a 1類に対応すると考えられる。製作年代は18世紀後半である。268は見込みの播目が中心から放射状に入れられ、体部内面の播目は底部との境より引き上げられている。このような特徴は堀内編年Ⅲ-b類にみられ、堀内の年代観では1820～幕末に比定される。269は産地、年代とも不明の播鉢底部。270は17世紀前半の肥前産播鉢の底部である。271・272は17世紀代の丹波産。273は内外面に鉄泥を掛け播目は口縁部付近で完全にナデ消される。産地は不明であるが、1号瓦溜出土遺物88(第17図)と同一

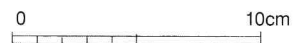
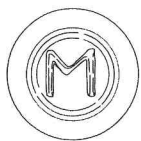
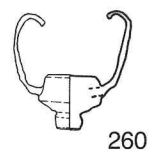
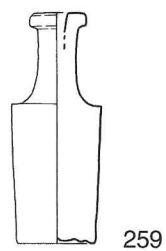
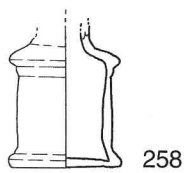
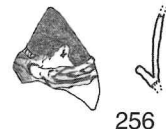
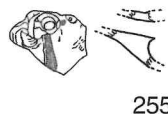
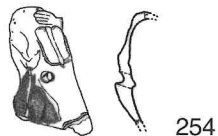
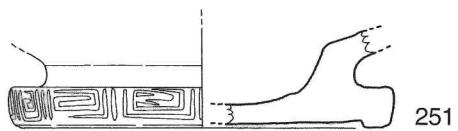
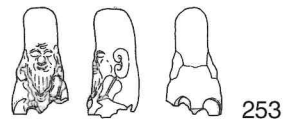
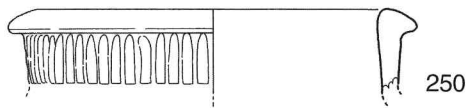
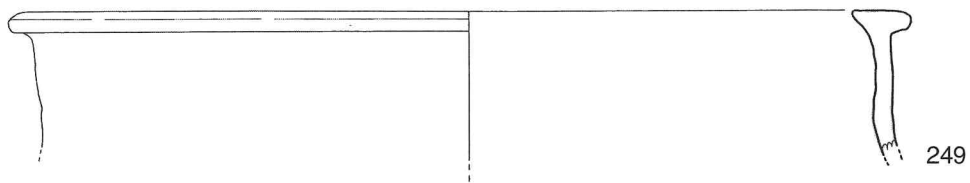
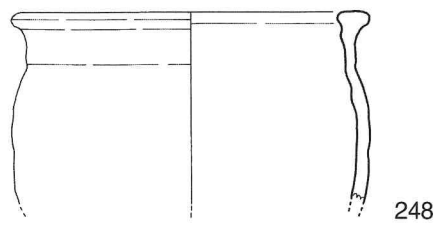
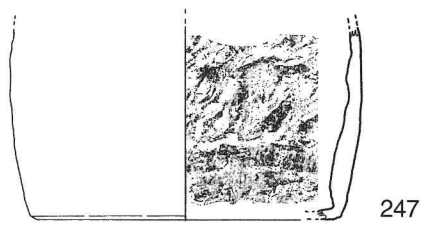


0 10cm

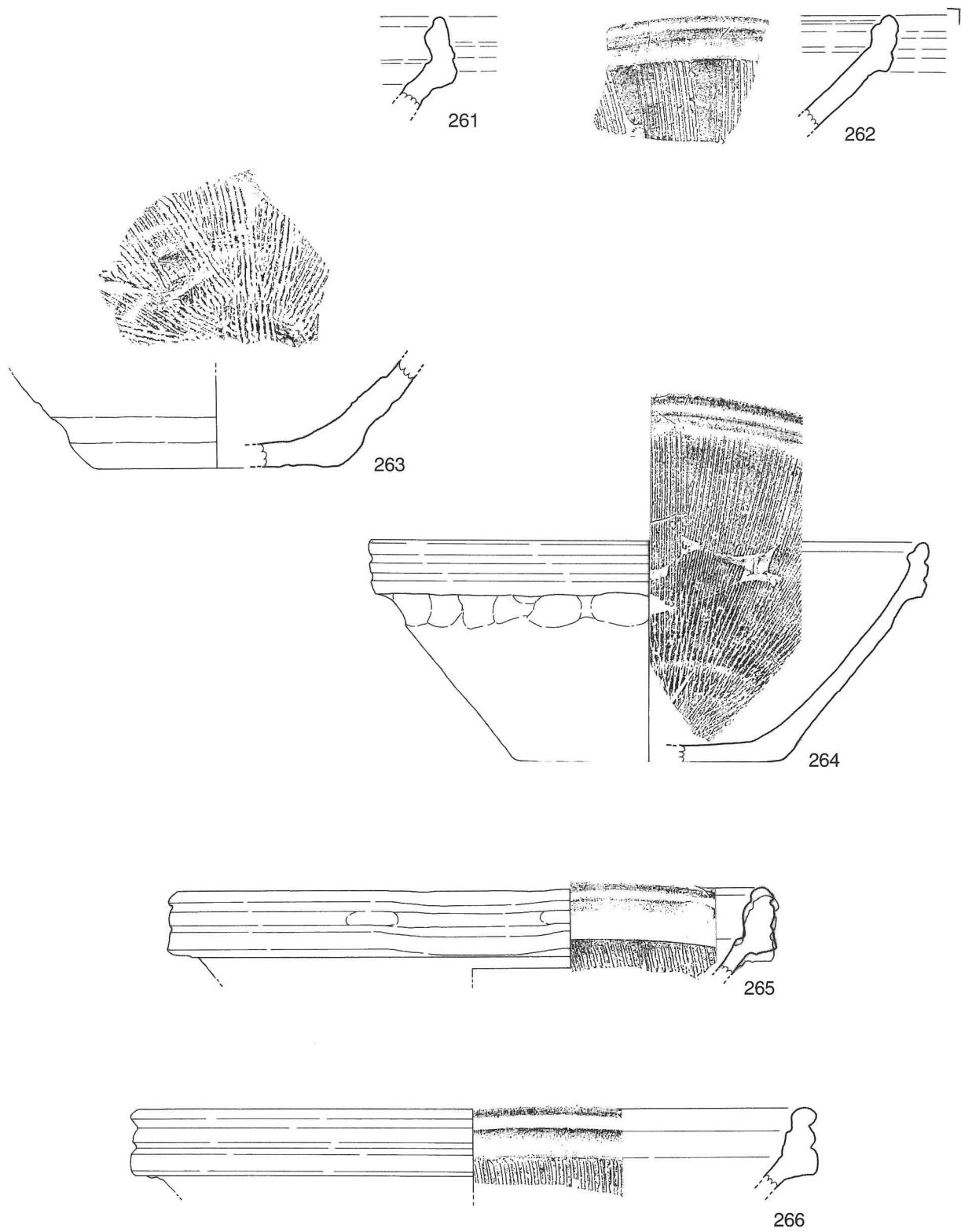
第39図 整地層出土遺物 (14) (S=1/3)



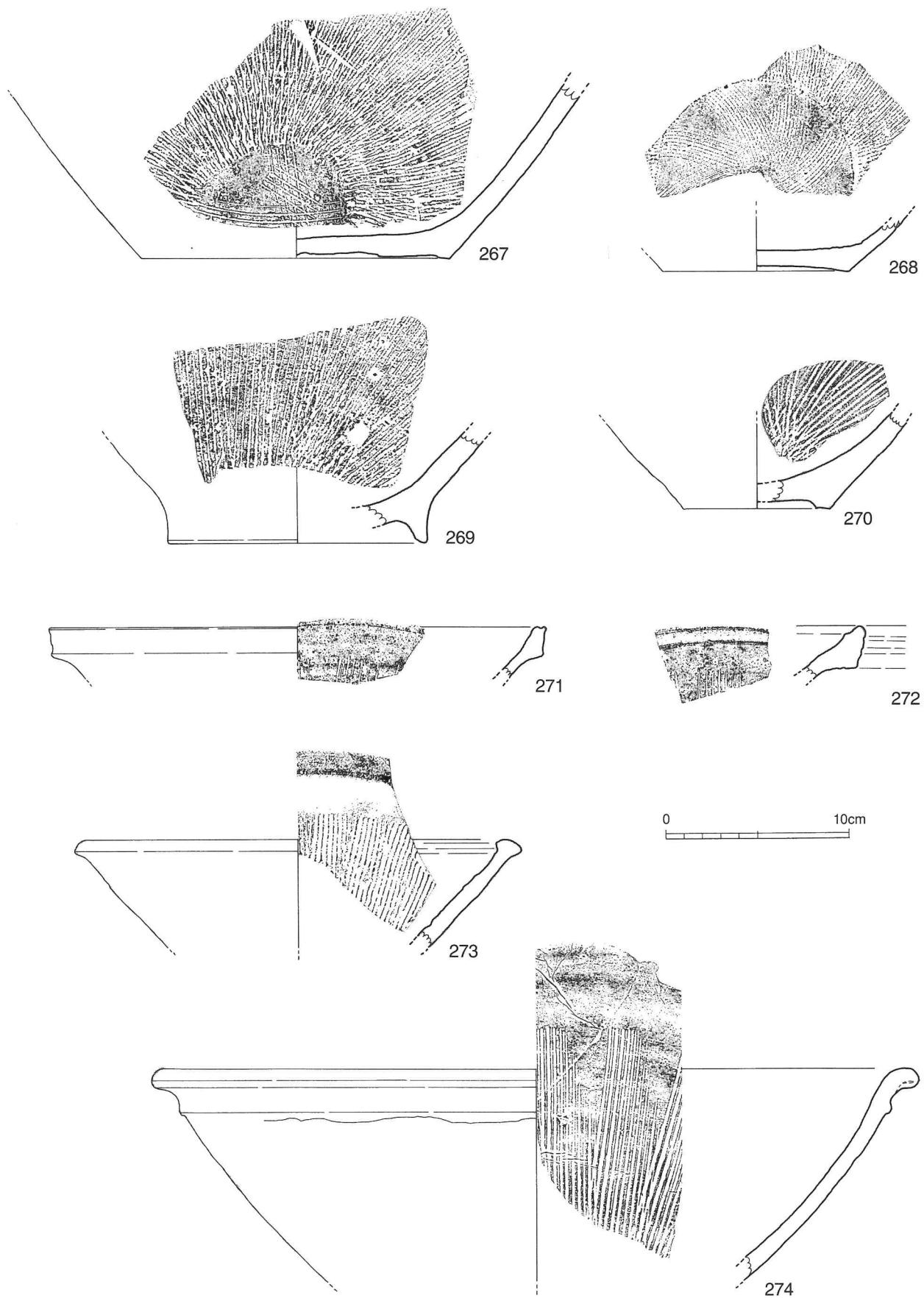
第40図 整地層出土遺物 (15) (S=1/3)



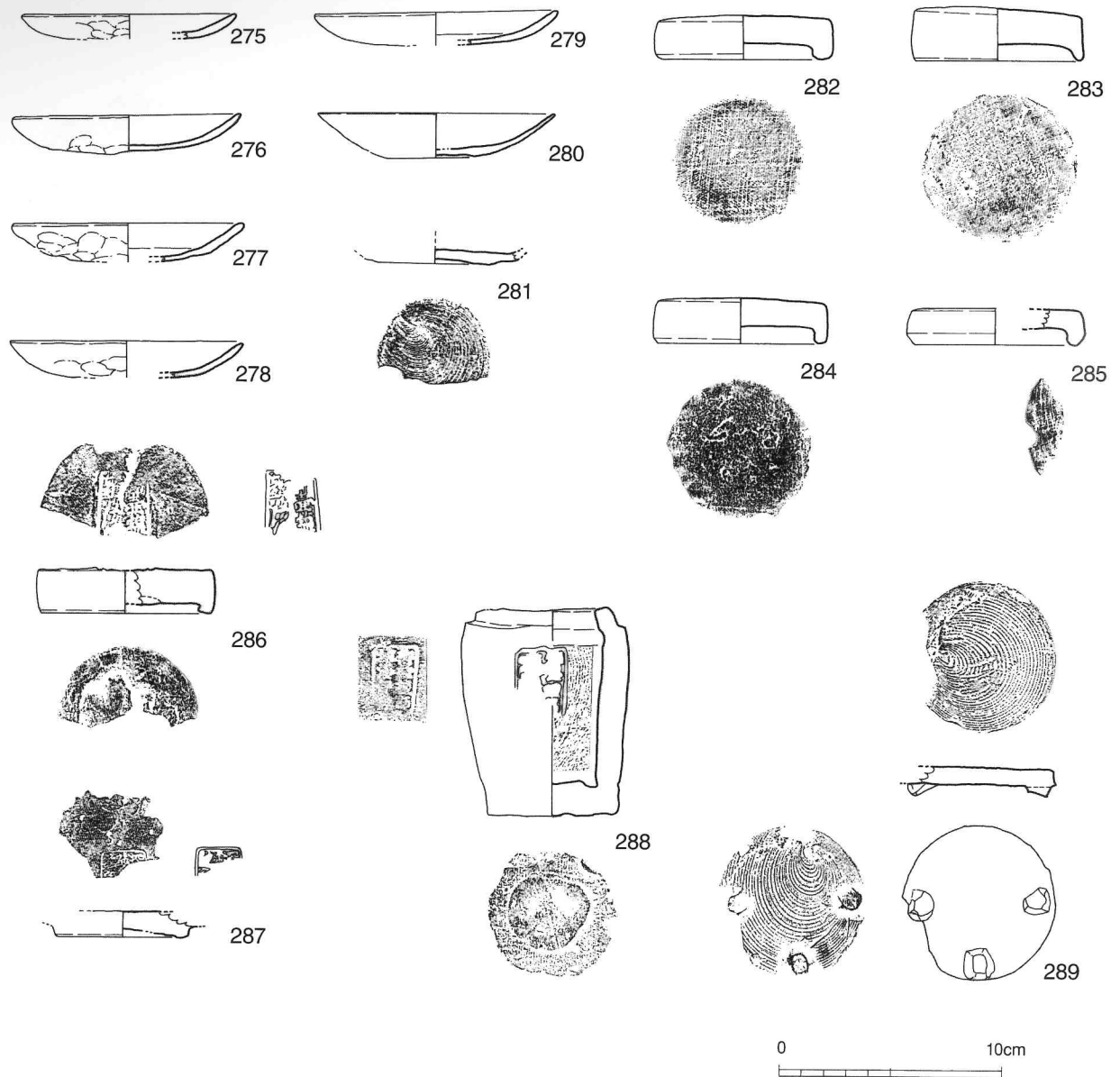
第41図 整地層出土遺物 (16) (S=1/3)



第42図 整地層出土遺物 (17) (S=1/3)

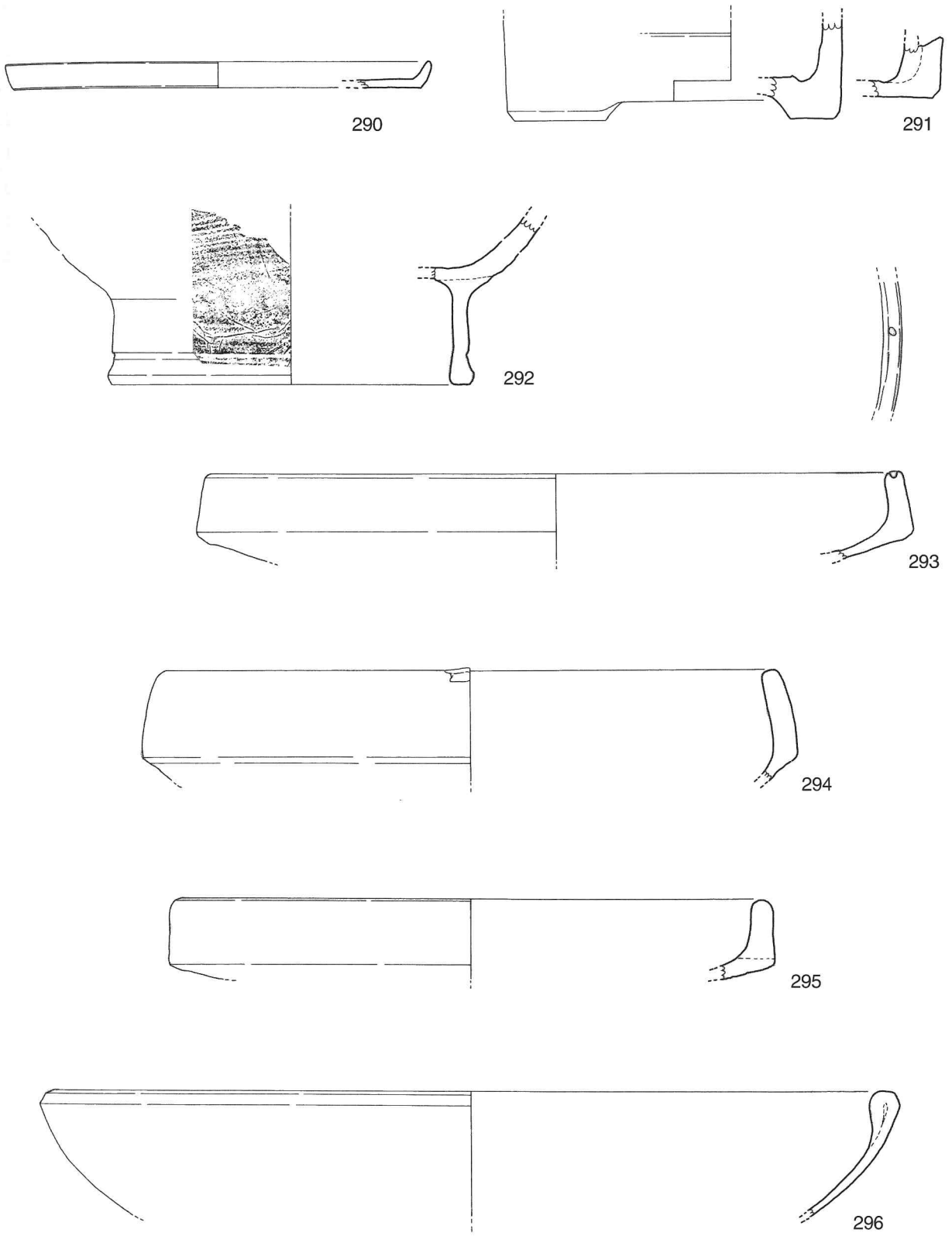


第43図 整地層出土遺物 (18) (S=1/3)



第44図 整地層出土遺物 (19) (S=1/3)

固体または同一産地の可能性が高い。274は肥前の志田西山窯の製品で、内外面に鉄泥を施し播目は上部で間隔が広がる。年代は18世紀前半～中頃に比定される。275～279は手捏ねの土師質土器小皿で色調は灰白色を呈する。いずれも体部外面に顕著な指オサエ痕がみられ、内面体部はヨコナデ、底部はナデによる調整を施す。277・278・279は内面の体部と底部の境に段が廻る。280はロクロ成形の土師質土器小皿で、色調は淡橙褐色を呈し焼成は非常に良好である。ロクロの回転方向は左で、外面は体部から底部にかけて回転削り、内面は回転ナデを施す。281は施釉の土師質土器小皿。ロクロ成形で内面に柿釉を施し底部は右回転の糸切り離しである。282～285は蓋受けをもつタイプの焼塩壺蓋である。いずれも内面に布目圧痕が残り胎土には金雲母を含む。製作地は堺と推定される。286はやはり蓋受けをもつタイプの焼塩壺蓋である。内面は布目痕をもち中央部には粘土を指で埋め込んだ様子が観察できる。上面に方形枠で囲まれた刻印をもつが、4分の1程が欠損するうえ故意に消したような痕があるため全体の解説は不能である。辛うじて右列の2文字目が「壺」、3文字目が「塩」と読めるため可能性としては「御壺塩師 堺湊伊織」あるいは「御壺塩師 難波浄因」の2種類の銘が想定できる。類例として東京大学本郷構内遺跡出土の「御壺塩師 難波浄因」銘をもつ焼塩壺蓋があり、胎土・形態・側面に横方向の削りのような痕が残る点が共通する<sup>(33)</sup>。282～286は渡辺誠分類のB類、小川望分類のイ②類に属する<sup>(34)</sup>。287も焼塩壺蓋であるが前述したのものとは形態・胎土・色調等が全く異なる。ロクロ成形で上面はミガキによる調整



第45図 整地層出土遺物 (20) (S=1/3)



を行い、刻印をもつ。刻印の大半は欠損しているが残存する部分に「𪛗」と判読できる箇所があり、これが「深」の上部であるとする、生産地は京都の深草と推定される。渡辺誠分類のD類、小川望分類のオ類に対応する<sup>(35)</sup>。288は蓋受けをもつタイプの焼塩壺である。成形は板作りで内面には細かな布目をもち、底部は内側から詰めた粘土栓を棒で突き外側からは指で押圧している<sup>(36)</sup>。栓の周囲の外底部には布目がみられる。両角まりのC1-c-ホ、小林健一編年V期（1720～1740年代）に属し、また小川望分類のⅡ②aに対応する<sup>(37)</sup>。290は土師質土器皿もしくは盤と考えられ、外面体部と内面はミガキによる調整が施されている。291・292は瓦質土器焔炉。291は前面に窓をもち、292の外面には刷毛目のような調整痕がみられる。293～296は土師質土器焙烙である。293の口縁端部に穿たれた孔は本来向かい合う2カ所にあり、難波洋三の把手b2類とされるものである<sup>(38)</sup>。293は府内城三ノ丸遺跡のVa期、294はV期、295はVb期に対応する<sup>(39)</sup>。296の口縁部は内湾し粘土を内側に折り返して肥厚させている。他の焙烙とは形態が異なり、おそらく全く別の系譜を辿るものと考えられる。以上整地層出土遺物は18世紀～幕末までものが主体を占め、一部近代以降のものが含まれるのは攪乱によるものと考えられる。よって整地層の年代は幕末前後と考えられ、文久3年（1863）の天祐館建設時の整地層であったと推測される。